
いのちをだいに

雷泥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いのちをだいじに

【Nコード】

N5546K

【作者名】

雷泥

【あらすじ】

それなりに人らしく、少しズレた主人公。

彼が歩むその道には一体何が待ち受けているのだろうか？

正義の味方、始めました。

神様はいつも突然だ（前書き）

どうも、作者の雷泥です。この作品には、オリ主、再構成、独自設定、ご都合主義万歳の要素が多大に含まれております。合わねえなこりゃと思った方、ここから真っ直ぐブラウザの戻るをクリックしお戻り下さい。

まあとりあえず見てやるよという方、それではどうぞ。

「8月13日改訂」

神様はいつも突然だ

さて、自分にとって日常とはなんぞや？と問われた際、普遍的でちよつとした刺激はあろうけどもやはり平和な物。と、こつ俺は答えるものだ。俺はこつ、なにかしら打ち込めるものさえあれば別になんだっていいと考える。人生のちよつとした時間に息抜きとして安らげる事もある。俺が打ち込むものというのが偶々、『特撮ヒーローのフィギュア収集』だというだけで、別に何かしらの非難を受ける謂れもないのだ。俺が集めているそれらは、最近出始めたアクシヨンフィギュアで、出先で見かけ購入意欲を掻き立てられて集め始めた。俺の唯一の趣味と言つても過言ではない。ところでなんでこんなことを言っているのかというと、なんてことはない。まあ、後悔と現実逃避である。

「あうあああ……」

呟こつとし、断念。そりゃそつだ、なんせ我が身は赤ん坊。喋ろつにも喋れないんだから。鬱蒼と茂る木々の向こつ、雲1つない青空を見上げ、こつなるに至つた原因を思い出す。

自分でも信じられん位に上機嫌に、お気に入りの歌を口ずさみながら商店街を歩く。今日は楽しみにしていた”アレ”が届く日なのだ。上機嫌にもならあ。周りの目がとても怪しい人を見るような感じなのだがそんなことはどうだっていい。これでもかつて位に俺は浮かれていた。

「よっ、おっちゃん！」

馴染みの肉屋に声をかける。貧乏さんだったころもそれなりに金を持て余してる今もずっとお世話になってる。ここのコロッケがうまいのなんの。

「おっ祐一、ずいぶんとご機嫌じゃねえか」

「わかるか？ わかるか〜！」

「気持ち悪いくらいに盛り上がってるな」

おっちゃんは笑いながら揚げたてのコロッケを二個紙袋に詰めてよこしてくる。いつもこの肉屋に寄ってはおっちゃん謹製のコロッケを食いながら我が家に帰るのである。一個80円のところを顔馴染みの俺には二個120円にしてくれているのだこのおっちゃん。あゝ実に愛されていますこの俺。商店街の皆にめっちゃ愛されていますよこの俺はっ！

「あんがとよおっちゃん！ 今日待ち望んだアレが届く日なんだ
っ！」

「はっ、今日も変わらずガキみてえな笑い方だなお前は」

「うるへえっ」

五年近くもありやおっちゃんの口の悪さにもいい加減慣れたってなもんだ。それに今日は気分がいいんだもんな！

「まあた玩具だっただら？ いい加減飽きねえなお前」

「おっちゃんにはわかんねえってば、んじゃっまたな」

「おうおう、またな」

おっちゃんに別れを告げて商店街から出る。目の前の横断歩道を渡りや家はすぐそこだ。

ああこの赤信号の僅かな時ですら惜しい。逆側にいる小学生達もどこか待ちきれないような雰囲気醸し出してる。と、漸く信号が青に変わる。

はて……横断歩道を渡りきって横目で見たのだが、あのトラック……少々速すぎないか？

「つておい!？」

今だ幼女が進路上にいるというのに信号など無視し全く速度を落とす事なく暴走するトラック。これは確実に!？

「くっそ!」

間に合う。ギリギリだが俺の手が幼女に届く。踏み切ってその背を思い切り押した。突然の事に歩道に倒れ込み泣き出した幼女……それを見た瞬間にとてつもない衝撃が来て……。

次に視界に入ったのは、物凄く立派な白髭を蓄えた爺さんの姿だった。

「……」

「……」

「気まずい沈黙……こつこつというのは苦手だ。とりあえず、先手を打とう。」

「……え？」

「え？とは何じゃね神河祐一君」

「な、何故俺の名を！？」

「そりゃあ神様だしのう、知ろつと思えばいくらでも知る事ができるわい」

「神……様……？」

「んなアホな……。」

「偉いのじゃよ、これでもな。まあ多々聞きたいことがあるじゃろうが、とりあえず先に用件を話してこつこつかの」

「言つてコホンと一つ咳払い。」

「は、はあ……」

「確かにこれがどついつ事なのかは問いたるところだ。だが質問させてはくれなさそうでもある。」

「まず、君は死んだ。これはわかるな？」

「ええまあ……あの衝撃で生きてるとは思えませんし……」

「理解が早くて助かるのう。まあわしがやったんじやが」

「は？」

なん……だと……？

「まあそれにも理由がある。君の体はちょっと元の世界からすると異常でな、2つの魂が混在しておった。あつたじやる？ 記憶に無い物がいつの間にか存在していたりした事がの」

そ、そういえばあつたような気がするけど……頼んだ覚えのないフイギユアが届いたりとか。まあちゃんと受け取ったけども。

「律儀じやな」

人の思考読まないでください。

「以後気をつけよう。話を戻すが、魂の混在とは二重人格とはわけが違ってな。ただの二重人格ならば放つといてもよかつたんじやが。魂の混在とは……本来一つの魂しか入らない器に、君の場合君と君そっくりの魂が混ざり合って、人間には規格外の魂の大きさになつてたのじや」

「それが不味かつたんですか」

「まあそうじや。そのまま何もせずにおくしていたら、君ともう一

人の君の魂は、ある日突然消えたりしておった」

怖っ!?!?

「元の世界ではもう一人の方というか、片割れに残ってもらって
おる。強い衝撃で君の方が体から出たしの。まあ、あっちはあっちで
どうにでもというより幸せにやっていけるじやろ。問題は君の方じ
やな」

「あつ……俺は消えるんですか」

そりゃ異物だしなあ、消えても文句は言えないか。一応、俺自身は
生きてるんだしな。

「何を言っておる、わしは神様じゃぞ? んな無体な事はせん」

「えっ?」

「新たに器をやるう。特別サービスでうんと強くしてもやる。」

「えっ?」

「そして別の世界で生きるんじや。君の好きなように生きてくれ
ば構わん」

な、なんという……。

「さて、ようは新たに人生楽しんでくれというのが本題だったんじ
や。早速、器を作ってやるうかの……ふむ、もともと容姿は無駄に
よかったしの。こんなもんにするとして、次は能力かの」

能力……はっ!?

「まさか殺伐とした世界に飛ばす気ですか!」

「もしかしたらそうなるかも知れんし、そうならないかも知れんの」

曖昧ですね!

「まあなにはともあれあつて困るものでもあるまいじゃろうから、
今からやるから頭の中で考えるんじゃ」

くっ……ならば!

「……ふむ、随分面白い事考えるの君は。リスクあつての力かね」

「まあ、そりゃありスクなかつたら使うのに覚悟もいらなかつたり
しますから……それよりは」

「ふむ、とりあえずはそうしておくとしよう。まあ君はやたらと優
し過ぎる気があるしの、そういう事を思っていたとしても不思議で
はないかの」

そうかな……?

「まあ、他にも特典は付けておいてやろう。それだけあれば滅多な
事では死んだりせんしな」

ありがたやありがたや。神様万々歳だな。

「さて、まあそれなりに準備は整ったの。あとはこいつをはめておると良い。使い方はあとで直接頭にも流しこむわい」

「痛そうですねんか」

「ちくつとする程度じゃよ、男なら我慢してみせい」

「ですよねえ。」

「では早速じゃ、行ってこい」

「へっ？」

そう言われた瞬間、また意識が飛んだ。

「さて、あやつはどう生きるのかのう……頑張りたまえよ少年」

ということで、今はどこか知らぬが森の中。神様にやあ色々いた
だいた……らしい。しかし肝心な事を聞き忘れたのである。

「あああいあういうあ（知らない天井だ）……」

意味不明ながらもお約束の台詞を吐く……そもそも天井なんてない
が。ああ、俺はこれからどうなるやら。

拾い物には注意しましょう(前書き)

まだ序章です。

「8月13日改訂」

拾い物には注意しましょう

さて、暴走するトラックに跳ねられ、目の前に神様を名乗る爺様が現れたかと思いきや、自分の存在は異常だと言われ、体を弄くられた拳げ句、気が付けばただっ広い森の中。

何が一体どうなつとるのやら……。人に話せば病院行き確定などんでもない状況下において、割と落ち着いている自分にも驚きだが、まあ楽観的とはよく言われた。

『“なんとなかなる”でどうにかできる程世の中甘くないの。ただでさえあんたは優し過ぎるってんだから……』

『そうかな？』

『そうなの』

懐かしいな。あいつもきつと元気でやってるだろうけど、最近会ってなかったし……。会いたかったかもなー。

『これ』

なんだ！？

どっからともなく、というか俺の頭に直接声が響いたぞおい！

『そう喚くでない。わしじゃわし』

この声はって……神様か。そりゃそうだよな、こんな状況で俺に語りかけてくるとか神様以外にいないよね。

『なんじゃか卑屈じゃの。まあよい、これがわしから干渉できる最初で最後の時じゃ。さほど時間があるわけでもなし、授けたものの使い方を教えるぞ?』

ああはい、お願いしますってその前に!

『なんじゃ、出鼻を挫くとは感心せんのか』

あ、すみません……ってそうじゃなくて!なんですかこの体!

『赤ん坊になつとる事かね? その方が都合が良いだけじゃよ、その内わかるから我慢せえ』

納得はしませんが一応わかりました。

『よろしい、ではまずはその身に宿るアーチャーの能力じゃが、そのまんまじゃ。固有結界、そこからくる投影、強化は勿論のこと、身体能力を底上げしといてやったぞ。英霊エミヤとしての経験や戦闘技能は自分で引き出せるから十分扱える体躯になつたらやつてみるとよかるぞ』

なるほどなるほど。

『まあついでに言うなれば傷を受ける度に強固になる。物凄く死にくい身体じゃ』

うわぁなんとというチート。

『身体についてはまだあるの。腰、へその辺りに違和感を感じると思うが、それはわしからのささやかなプレゼントじゃ。それについ

てはいずれわかるじやろうて……君の身体に流れておる魔力は純粹な大きさで言えばわしレベル。たとえ全力で固有結界を開こうとも尽きることはないと思って良い』

やつぱチートだな……って腰のこれはなんなんでしょう？

『だからいずれわかると思うとろうに、気にせずとも良い。身体の機能については概ねこんなもんじやな……あと渡した指輪じやが、わし謹製の魔道具じや。喋れるようになったらこう言つと良い、「我、汝の力求めたり。我が声が聞こえたならば、この声に答え、我と誓いを交わさん」……との』

長いですねちよつと。

『なに、知識として後でまとめてやるわい。さて、そろそろ時間じやな』

まあ色々とありがとつございました。

『わしの都合でやったことじや、礼なぞ言わんでくれ』

それでも、もう一度生きるチャンスをくれた事に感謝します。

また俺は歩けるんだ、その機会をもらえただけでも感謝に値する。ただやつぱりちよつとこれはないんじゃないかなかるつか？

『ほつほつほ、不思議な奴じやの君は……では、念話を切るぞ？

すぐに知識の奔流があるが我慢してくれ。さらばじや、優しき青年よ』

さようなら、神様。

神様の意識が離れたのがわかる。それと同時に、頭痛が始まった。とても痛い。我慢の子。俺は強いからな！

頭痛が治まると様々な知識が頭の中に存在しているのがわかった。俺自身のスペック、多種多様な魔法、神様が言わなかったもう一つの固有結界。そして、腰に存在する違和感の正体。

本当に規格外だな……。

固有結界と違和感の正体なんて、完全に化け物クラスだぞ？

いやそんなもん役に立たんくらい現在ピンチだけどね？まずこのままだと死ぬんじゃないかな？赤ん坊IN森の中だよ、ある日突然熊さんに出会うよ。洒落にならねえよ。とりあえず叫んでみようぜ！

「あうあぁー！」

字面だけだとちよつと悲しくなるよね！

「あうおっ！？」

ガサッと茂みが揺れやしたぜおとつあん！？

いやおとつあんは遙か別世界だけどね！！

つてそうじゃねえよ、まさか早々にゲームオーバーか！？

「やはり、子供……だな」

誰だおじさん！？

「捨て子かな……よし、ウチに連れて行ってあげよう」

突如現れたおじさんはそう言って俺の体を抱き抱えてどこぞに向かって歩き出した……。

泣きたい時は泣けばいい(前書き)

どうも、雷泥です。

唐突に原作キャラに絡みます。ちょっと飛ばし気味ですがご了承くださいませ。

泣きたい時は泣けばいい

結論から言おう。俺はあの後、八神夫妻に引き取られ、八神祐一として生きている。はからずも生前の名と一緒にだったのには驚いてるが……どれほど感謝しても足りない恩を夫妻には感じている。もし拾われなかったら、今頃俺はこうして立っていたかどうかも怪しい。俺を引き取ったのと同時期に、義妹はやてが産まれた。はやては俺を兄と呼ぶ。だから俺にとってははやては妹だ。しばし八神祐一として暮らしていたが、とある日に義父に聞いてみたのだ。俺が一緒にいる事は負担になってはいないのかと。すると八神夫妻は笑いながら、こう言った。

「2人も1人も変わらんよ、息子も欲しかったからね」とは義父の談。

「またそんな悲しい事言われたら泣いてまうよ」とは義母の談。

そのすぐ後に、なんで拾い子だという事がわかったのかを小一時間問い詰められたりしたが……俺はこの八神家が大好きになった。休日は義父とキャッチボールして遊び、はやてと共に悪戯しては義母に叱られ、笑い声の絶えない……最高の家族だった。

……義父母が死んだ。

交通事故だったらしい。

これが今から1年前。

俺とはやてが5歳の頃だ。

その時はまず絶望した。ただ絶望した。俺を育ててくれた人達を、こんな形で失った。

ありがとうの一言も……結局言えやしなかった。

小さく行われた葬式、俺は涙を流す事が出来なかった。隣で涙を流

すはやてをきつく抱き締めながらも、泣けるはやてが羨ましく思えた。そう思ってしまった自分が、泣けなかった自分が、酷く醜く思った。

そして寒き込んで、2人がくれた自分の部屋に閉じ籠った。最低な自分が嫌になつて、駄目だった。この家は2人の匂いがするから、一緒にいたという記憶があるから、辛くて、悔しくて、家を出た。ひたすらに走つて、気付けば義父と遊んだ公園に居た。結局俺は、どこまでも2人の面影を探していたのだ。

「あああ……………」

ここで、はやてが転んで、俺があやして、2人が笑つてた。父さんの投げたボールが飛びすぎて、はやてが追い付けなくて、母さんがそれに怒つて、俺がボールを拾いに行つて。はやてが遊び疲れて父さんの膝で寝ちゃつて、母さんが俺を抱き締めてくれて…………。

「あうぐう……………」

気付けば、膝をついてへたり込んでた。思い出は数え切れないほどにあつた。それを忘れてしまつていたのか…………？俺が大切だと感じた時間を、俺が大切にしてきた時間を。

「にいちゃん……………」

振り向くとそこには、所々に傷を付けたはやてが立っていた。

はやては段々、足が悪くなつていつている。それが何故なのかはわからない、ただそれが事実なのだ。ここまで来るのに、どれだけの時間を掛けて、どんなに痛い思いをしてきたのか。

「にいちゃん……………かえ、ろ？」

痛みを堪えて、少しずつ俺に近寄ってくる。その頬は涙で濡れていた。

「もう……………いやや、ねん……………だいすきな人がいなくなるの、いややから……………」

可愛い顔をくしゃくしゃに歪めて、はやてはゆっくり俺へと歩みを進める。

「お家に……………帰ろう……………？」

はやてが目前に迫り、俺に抱き付いた。やっと見つけた大切な物を、もう離さないと言ってもうつよつに、きつくきつく抱き締めた。

「ああ……帰ろう」

「ほん、ま……？」

だから俺も、はやてを抱き締めた。ようやく俺は、涙を流せた。そしてこの時決めたのだ。何よりも大事なたった1人の家族を、如何なる脅威からも守ると。

それが俺、八神祐一のたった1つの誓いだ。

「兄ちゃんさつきから何してはるの？」

「んや？ 別に何にもしてないよ、ちよっと思いついてただけ」

「何を？」

「はやてのオムツがいつ取れたのかを」

言った瞬間、はやての顔が真っ赤になった。

「ば、馬鹿なこと言うると遅刻すんで！」

「冗談さ。弁当、はやての分はテーブルに置いてあるから、お昼はそれな？」

「に、兄ちゃんあのなあ！」

「ハイハイ、文句は帰ってきたら聞くから……んじゃ、行ってくる」
はやての怒声をやり過ぎし家を出る。ここが俺の家。ここが俺の帰る場所。俺が守りたいと思った物。

「おっと……このままじゃ遅刻しちゃうな」

俺は苦笑し、急ぎ走り出した。

私立聖祥大付属小学校。俺がこの春から通う事となった小学校だ。私立なんてどうやって通う事になったのかというと父さんの友人を

名乗るおじさんが、今の俺達の生活費その他を出してくれたからだ。少なくとも学校には行った方が良いというはやての要望で、俺はこの聖祥大付属小学校に入れられた。家にはやて1人を置いていく事から物凄く渋ったのだが、はやてが「足がよくなったら私も行くから、兄ちゃん先行つといてな」と言ってきたので仕方なく引き下がった。はやての足は今年に入ってから最早動かなくなり、車椅子無くしては移動すら出来ない状態となった。そのため、俺はとっとと帰ってはやてと共に過ごしたい。

「帰りたい……」

「ど、どうしたのやがみくん？」

呟いた言葉に、隣に座っていた高町さんが反応した。入学式を終えた翌日、休み時間だったかに彼女が膝を擦りむいて泣いていたのを偶然見かけ、保健室までおぶって行って以来、よくよく話しかけてくるようになった。茶色がかった髪の毛を頭の横で二つ結わえたおさげで、きつとこのまま行けば美人になること間違いないの可愛い子だ。見る限り、明るく優しく元気な子といったものか。

「がっこう楽しくないの？」

「別にそついうわけじゃないさ」

まあ正直なところ小学校の授業なんてつまらないものの筆頭ではあるのだが、それを言うとはやてに怒られるから言わない。まさか前世から色んな物を引き継いでるなんて事は言えないし……。

「じゃあ帰りたいつてどうしてなの？」

「それは……」

何となく家の事を言うのは憚れる。別に言ってもいいはずなんだが、今は言わない方がいい気がした。

「どうして？」

「……あ、授業が始まる」

「もうっ、後でOHANASHIするの」

なんか知らんが凄く怖い感じがした。小学生にビビる俺って一体……。

「あつ」

「ん？」

その日の昼休み、高町さんと共に昼食をとっていると、突然高町さんが声を上げた。じつとこちらを、よく見れば俺の手元を見ている。視線を追うと、その先にあるのは箸でつまんだ鶏の唐揚げ。俺が口に放り込もうとしていた今日のメインがそこにあった。

「……………どうしたの？」

「へっ！？ あつ、な、なんでもないの！！」

焦り過ぎだ。何を思っていたのかは大体予想がつく。とはいえ、これも俺の好物であるが故に、最後の一つを残ったご飯と共にかき込み、その余韻を楽しみながら午後は昼寝に勤しむつもりだったのだが……………。

「あつ……………」

唐揚げを口に運ぶ素振りをする度にコレである。恐らく意識してやっているわけでは無いのだろうが（これで意識してやっていたら確実に大物になるであろうが）、非常に食べ辛い。というかなんかもうあげなきや駄目な気がしてきた。

「……………はい、あーん」

「ふえっ！？ や、やがみくん！？」

「あーん」

「あうあう……………」

「あーん」

「……………あ、あーん」

戸惑いつつも申し訳なさそうに唐揚げを口に含む高町さん。さようなら俺の唐揚げさん。

「んぐんぐ……………お、おいしいの！」

「そりゃどうも、そう言って頂きありがたい」

「ふえっ！？ こ、これやがみくんが作ったの！？」

「そつだよ？」

はやくも大好きな俺特製の鶏の唐揚げだ。あんまりにも食べるからこの前つい「太るぞ」と言ったら目に見えてへこんだのでフォロワーが大変だった。いや、実際カロリーには気を付けてるからそこまでつてわけでもないけどさ？ただでさえ動けないんだから大皿に用意した唐揚げ20も30も食べたたら太るって……。俺の分も食べられ

たし。

「ず、ずるいの……」

「なんか言った？」

「なんでもないの！！」
なんか知らんが怒られた。俺が何したって言うんだ。身に振り掛かった理不尽に、残った白米かき込んで授業でふて寝したのは悪い事じゃない筈だ。

「先生さようならー」

やっと学校が終わった。さて帰ろう、やれ帰ろう。

「バイバイ高町さん」

「うん、また明日ねやがみくん」

ニコニコしながら手を振る高町さんと別れ、家までの道を歩く。

横手に森が見えて、ふと思いついた事がある。

神様からもらったこの指輪、赤ん坊の時は父さんが持ってくれていたが、2人がいなくなつてから、父さんの書斎の引き出しに入っていたのを見つけ、以後嵌めている。

神様曰く魔道具らしいし……一応台詞は覚えている。

「試して……見るか」

森の奥目指して、歩みを進める。

「我、汝の力求めたり。我が声が聞こえたならば、この声に答え、我と誓いを交わさん」

指輪に魔力を込め、神様から受けた言葉を紡ぐ。

瞬間、指輪が輝き出し、光が収まった後には……。

「サーヴァントセイバー、召喚に応じ参上した。問おう、貴方が私のマスターか？」

画面越しに見た、黄金の剣を持つ騎士がいた。

小さくまとめおくと便利ですよ？（前書き）

ちょっと日が空きましたが、それもこれもデータが飛んだせいだと
言い訳させてください。電源が落ちるとは思わなかったのです。

今回も出来としては大した物ではないので勘弁してください。段々
と暴走が止まらなくなるのはよくあることですからね……。

では、ごじゆ。

小さくまとめおくと便利ですよ？

「た、ただいま……」

あれから二時間。完全に日が落ちてしまったが、ようやくと家に帰ってこれた。

「おっそいで兄ちゃん！ 今何時やと……思……てんねん……」

車椅子とは思えぬほどに勢い良く玄関前に突撃してきたはやては、恐らく俺の後ろを見て、きっかり10秒静止した。

「だ、だ、だ……」

ああ、こりゃ久方ぶりに咆哮が見られるなあ……。とりあえず誤魔化し笑いをしつつ耳を塞ぐ。この次の展開はなんとなく見えた。

「あ、あははは……」

「誰やああああー！？」

はやての驚愕の声に、後ろに控える面々もかなり驚いたようだった。

「さて、きつちり説明してくれんねやるなあ兄ちゃん？」

落ち着きを取り戻したはやてがテーブルに着き、対面に座る形で俺がいる。そしてテーブルの上に、20cm程の人形大となったセイバー達、サーヴァントが陣取っていた。

「ええっと……どう説明したら良いのやら……」

ひたすらに狼狽えまくる俺、ニコニコとしながらもどこか怒気が滲み出ているはやて。テーブル上で右往左往としているサーヴァント達……つてえ！

「頼むからじつとしてくれよ！」

俺の声にとりあえず従ってくれたようで、全員おとなしく腰を下ろしてくれた。

「だから、さつきからようわからんこの子らはなんなん？」

え、笑顔が怖いよはやて……。

「やれやれ、説明は私がするとしよう……祐一、話しやすいよう元の大きさに戻してくれ」

「あ、あぁうん」

言ってテーブルから飛び降りるアーチャー。俺は指輪を介し、アーチャーに魔力を送る。するとアーチャーの肉体が光り、瞬時に180cm程、初めて見た時と同じサイズにまで大きくなった。

「さて、ご覧の通り我々は人間ではない」

そう置いて、アーチャーは話し出した。

遡ること二時間前。

神様から受け取った魔道具の起動に成功した俺は結果として……。

「サーヴァントセイバー、召喚に応じ参上した。問おう、貴方が私のマスターか？」

伝説の英雄達、Fate/stay night第五次聖杯戦争に参加した七騎士+1を召喚する事となった。

「た、多分そうなるのかな？」

目の前にいるのは青き剣士。セイバーのサーヴァント、アーサー・ペンドラゴンとして知られる騎士王。本当の名はアルトリア。

セイバーが伸ばした手を取り、助けを借りて立ち上がる。すると俺に近寄って来て、覗き込むようにしゃがむ男がいた。

「こんな小僧がマスターとはな……つくづく俺はツいてねえってとこだなあ」

全サーヴァント中、最速を誇る蒼い槍兵。ランサーのサーヴァント、クーフリーン。

「ふふっ、そう悲観することもなくってよランサー？ この子の魔力をご覧なさい、純粋な大きさだけなら、この私ですら遙かに凌駕するわ」

いつ近寄ったのか気付きもしなかったが、そう言い放ち艶やかな笑

みを携え俺の頭を撫でたのは、キャスターのサーヴァント、メデア。
ア。

「ふむ……如何様にしては知らぬが……此度のような機会を得た事を幸運に思うとしよう……」

呟き、俺をこねくり回すキャスターを眺める群青の侍。アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎。

「……可愛い」

ちよっぴし不安な声が聞こえたような……紫と黒を基調としたボディアスーツに身を包む騎乗兵。ライダーのサーヴァント、メデューサ。思春期を迎える少年には少しばかり刺激が強すぎる双山が視界を覆う。うわぁ柔らかい……じゃねえよ。どうやら抱き締められたみたいだ……何故に？」

「……」

ライダーの抱擁から逃れて更に後方を見る。鉄色の狂戦士が静かに佇んでいる。白の少女のために戦ったバーサーカーのサーヴァント、ヘラクレス。

「……ってちよっと小さい？」

ふと疑問に感じる。原作だと2mは軽く超える巨体だったような気がする……しかし、正確にはわからないがどう見積もっても190cm前後くらいにはしか見えないし、筋肉だってあそこまで膨張してるわけじゃなさそうだ。指輪のせいだろうか？

「なるほど……第五次聖杯戦争に参加したサーヴァントが一同に会したわけか……さて、まずは我々八人を事も無げに呼び出した事と、その全員を従えている事を素直に誉めよう」

言いながら俺に視線を合わせてしゃがむ紅い弓兵。アーチャーのサーヴァント、エミヤ。

「まあ若干名、君がマスターである事を快く思わない者も居るだろうが……」

木に背を預けて立っている黄金の鎧を身に纏った男をチラリと見てアーチャーは皮肉げに口の端を吊り上げた。

「まあ、大した問題ではないな」

一方、煽られた方は

「ふんっ……贗作者ごときが我の器を計ろうなどと……愚者もここまで極まれば実に笑えるわ」

アーチャーの挑発にこれまた挑発で返す金ぴか。その名をギルガメツシュ。古代メソポタミアの王であり、第四次聖杯戦争に置いてアーチャーとして参戦し、その後十年の間現界し続け第五次聖杯戦争にも介入した英雄王。

「ふっ……ではその愚者に負けたような貴様は、愚者にも劣る最底辺という事でよろしいのかな？」

アーチャーは薄く笑い、その手に夫婦剣　干将・莫耶　を投影した。つてか沸点低っ!?!?

「正しく我が負けたわけではないが、我の失態は我が拭い去るとしようか……」

ギルガメツシュも王の財宝　ゲート・オブ・バビロン　から一振りの剣を引き出し……つて。

「やめんかいあんたら!!」

見れば他の面々も臨戦体勢に入っていた。こいつらが暴れたらこの森が吹き飛び兼ねない。そんな明日の朝刊の一面を飾るような事件はごめん被る。

「……ちっ」

あっさりと剣を下ろすギルガメツシュ。そして俺を見て

「命拾いしたな贗作者、我のマス……おい、名前はなんだ」

「八神、八神祐一だ」

「いい名だ。我の祐一に感謝するがいい、祐一の声無くば貴様消えていたぞ」

しんとなる一同。俺を含めた全員が、ギルガメツシュを訝しげな目で見ている。

「一つ聞かせなさいギルガメツシュ」

皆の代表とでも言わんばかりにセイバーがギルガメツシュの前に出

る。

「私を含めここにいるサーヴァントには、あの聖杯戦争の記録が鮮明に残されている」

「どういうこと？」

ちよつと頭が追いつかないので俺を抱え込むように抱くキャスターに聞いてみる。理由は距離が一番近いからだ。何故に抱かれてるのかというところ……そんなもん知らん。

「そうね……マスターは知らないでしょうけど、貴方が呼び出した私達サーヴァントは全員とある戦争に参加していたのよ」
知ってますすいません。

「聖杯戦争に参加していた私達と今ここにいる私達とは同じでいて違う、英霊の座と呼ばれる場所にいる本体から分けられた言わば分身……そう、別個体と思ってもらっていいわね。そしてここにいる私が、別の私が聖杯戦争に参加したその記憶は持てないけど、それは“あつた”事として英霊の座にいる本体に記録されるの。その事実が、セイバーは勿論ここにいるサーヴァント全員には存在しているのよ。ここまではわかってくれたかしら？」

フードを被っていて全てはわからないが、見上げているとキャスターはクスリと笑った。

「なんとなくわかったよキャスター」

「そう、賢い子は好きよ？ そうやって聖杯戦争を知っている私達には、あの金ぴかがマスターの言うことに素直に従っているのが不可思議に見えるというわけなの」

「ふーん……」

まあ確かにギルガメッシュってこんな感じだったのかどうかちよつと疑いたくもなる言動ではあつたが、別に悪い事でもないような……。セイバーはならば、と続ける。

「私が知る限り、彼の聖杯戦争での貴方は今のような殊勝な心構えをしてなどいなかっただはずですが……？」

「ふっ……我は我だ。あれは間違いなく我であるが、我とは関係な

い。ただ我は、このような形でこの我を召喚し得た祐一が気に入ただけだ。気に入った者をどうしようが、我の勝手であろう?」

「なっ……………」

うわぁ……………まさか気に入られるとは……………。

「宣言しよう。我はお前の望むままに、我はお前の願うままに、我はお前の味方であろう。お前に仇為す全ての物を、壊し、刻み、潰し尽くしてくれよう」

芝居がかった大袈裟な動きをしながら俺の前で膝を着き、ギルガメツシユは唱える。

「祐一よ……………お前を我のマスターとして認める」

「……………これからよろしくなギルガメツシユ」

「何、我の事はギルで構わん」

言い回し自体は憚然としているのだが……………すげえ友好的だコイツ。

「んじゃあギルで……………どうしたの皆?」

ギルから目を離し周りを見渡す。なんか皆ポカンとして、狐にでも化かされたみたいな顔してるな……………。

「あ……………あまりにも印象が違い過ぎてな……………」

アーチャーが眉間を押さえながら言う。セイバーも困惑してるし、ランサーはなんかダルそうに木に背を預けていた。キャスターは最初からどうでも良かったのかいまだに俺を抱き続けてるってかいつ放してくれるのか。俺の横にしゃがみながらライダーも頭撫でてくるし……………いや、美人2人にこんなことされて嬉しいんだけどこれは完全に子供扱いというか玩具扱いというか……………ためこらアサシン何が可笑しいかこの野郎!鳥と戯れてないで助けてバーサーカー!

「はっ!」

「ど、どうしたのさセイバー?」しまったと言いたげな表情を浮かべ、セイバーが大きな声を上げる。わりと落ち着きがないんだねセイバー……………。

「い、いえ……………何でもありませんマスター……………」

明らかに悔しそうな顔されて何でもないって言われてもなぁ……………。

「ねえマスター？」

「な、なに？」

頭上から囁く甘い声に思わずどもる。

「とりあえず貴方の家に行きましょう？ マスターが風邪を引いてはいけないものね」

「あ、うん……心配してありがとう」

「いいのよ」

キヤスターを見上げ礼を言うと、彼女は優しく笑ってくれた。あれ？キヤスターもこんなんだっけ？もうちよつと魔術師然としてたよ
うな気がすんだけど……まあいつか、悪い事じゃない。

「あ、でもこれだけいると目立つな……」

「それについては心配いらんようだぞマスター」

立ち直ったアーチャーがここぞとばかりに発言する。

「マスターが嵌めているその指輪に、私を意識しながら“縮め”とでも願ってみろ」

言われた通りにアーチャーを見ながら縮めと指輪に願う。するとアーチャーの体が発光し出し、光が収まるとアーチャーが立っていた
筈の場所に20cm程の人形大に小さくなったアーチャーがふよふよと浮いていた。

「そら、このようになる仕組みらしい。他の連中にも同じようにやってみるといい」

「んじゃあ……」

今度はアーチャーを除いたサーヴァントを意識して縮めと願う。一瞬眩しく光ると、サーヴァント達が小さくなった。

「ほう……面白いものよのう……」

「どうやらそういう風に作られた魔道具らしいな……随分と規格外な物だが」

「……小さい」

各々思うところがあるようで小さくなった体を眺めている。

「あはは……とりあえずコレに入っててよ、家に着いたらまたみんな

な大きくするからさ」
背負っていたリュックを開けサーヴァント達がそこに入る。全員を入れたリュックを背負い直し、暗くなってしまった森の中を走り抜け急ぎ家に向かった。

「とうわけなんだよはやて」

「ふーん……」

ここまでの経緯を聞いたはやては、胡散臭げな視線をアーチャーに向け、次いでテーブルの上に鎮座するサーヴァント達を見て、最後に俺を見つめた。真剣な顔をするはやても可愛らし……じゃなくて「信じて……くれるかな？」

「……そらこないなもん見せられて信じるな言う方がムリやっちゅうもんやで兄ちゃん」

ごもつともだ。洗いざらい話して実はずきりでしたので済むほど話は軽くもないし、何より人が小さくなったり大きくなったり等どうやったってトリックで片付ける事は難しい。

「まあ、兄ちゃんが私に嘘つく必要もないし、何より兄ちゃんのマジメな顔見たら何言われても信じてまうよ」

「あつはは……ありがとうはやて」

ちよつと照れるな……はやては俺を信頼しきつてる。その信頼だけは裏切らないようにしよう、それだけは絶対に。

「ただなあ兄ちゃん？」

「ん、何はやて？」

あれ？ちよつと黒いオーラみたいなのを醸し出したぞ？

「二、三……今のを踏まえて聞きたいことがあんねん」

「ナ、ナニカナハヤテ？」

笑顔が怖い、その笑顔が恐いよはやて。目が全然笑ってないよはやて。

「まずいつこめや、話の中で……その、キャスターさんとライダ

「さんやっただけ？ お二方にもみくちやにされてずいぶんと鼻ノ下ノバシトツタミタイヤネ？」

「ひいっ！？はやての瞳からハイライトが消えたあ！？」

「ワタシノ知ランとこデナニいちゃいちゃシトルン？」

「恐っ！恐いよマイシスター！」

「めっ、滅相もございません！」

「はあ……ふたつつめや……何でウチの庭でやらなかったん……？」

「兄ちゃんが事故とかにおうてないかずっと心配やったんやで？」

「はやてが瞳を潤ませ俺の手を掴む。その手は少し震えていた……きつと俺が帰ってくるまでの間不安で仕方なかったんだと思う。俺は一度はやてを置き去りにして家を出ようとした事がある。多分それがまだ少なからず影響しているはずだ。また俺が自分を置いて何処かに行ってしまうのではないか、そう考えてしまうのも仕方ない事だと思う。」

「……ごめんな、心配させちゃって」

「席を立てはやてに近付き、その小さな体をきつく抱き締める。」

「あっ……」

「なあはやて……もう勝手に何処かに行ったりはしないから、そんなに不安がらないでくれ」

「……うん」

「返すように、はやてが俺の背中に手を回して来る。」

「一応……家でやらなかったのは、もしコレが危険な物で、はやてが危ない目にあうのは避けたかったから……」

「……わかつとるよ、兄ちゃんはいつだって私をだいじにしてくれる。私を守ってくれてる」

「……遅くなつてごめんな、ただいま」

「ええよ……おかえり、兄ちゃん」

「互いに笑い合い、一度強く抱き締めて離れた。やっぱりはやてには笑顔でいて欲しい、それが俺の望む物だ。」

「……ふむ、そろそろ2人だけの世界から戻って来て貰えると助か

るのだが」

すっかり忘れ去られていたアーチャーが思い出したように言う。するとはやての顔が真っ赤に染まり急に俯いてしまった。どうした？「さてマスター、我々はサーヴァントだ。まずは役割を与えてもらいたいのだが」

「って言っても、皆英雄だろ？ 言っちゃ悪いけど……何が出来るの？」

と言うと、全員が押し黙る。嫌な沈黙が続く中、アーチャーが手を上げた。

「とりあえず当面の問題は、まず我々の食費なわけなんだが……」

「英霊て……幽霊さんみたいなもんやないの？」

復活したはやてがアーチャーに問う。

「本来ならば幽霊と言っても良いのだが、今の我々の体は何故か受肉……つまり本当の人間のような体になってしまっているようだな……原因は一切不明だが、食事はどうしても摂らなくてはならないだろう」

「そうか……でもそうになるとやっぱり貯金を切り崩して行ってもすぐ底を突きそうだなあ……」

ああ、兄妹2人やりくりしてコツコツと貯めた貯金が華麗に飛んで行く光景が目に見えかぶようだ。

「恐らく体をその指輪の機能で小型化すればある程度融通は効くかも知れんが……」

「それはちよつといやや」

「はやて？」

きつぱりと小型化を突っぱねるはやて。

「ウチに住む以上みんな家族や。家族にはほんとの姿でいてほしい」「はやて……」

「……それは嬉しい事だけとお嬢ちゃん、私達が本来の大きさになると、小型化している時の倍の魔力をマスターが消費する事になるわよ？」

はやての意見にキャスターが反応し語る。あれ？でもそんなに辛くなかったぞ？なんだかんだ二時間程度はみんなフルサイズだったのに……。

「うっ……そうなん兄ちゃん？」

はやてが心配そうに俺を見る。しかし実際はそこまででもないのだから笑いながら返す事にした。

「マスターの負担を考えるならば、私は賛成しかねます」

「そう言われても、別に大したことないんだよね不思議な事に……あ、誰か俺のこと調べられる人いる？」

「なら私がやるわ。マスター、手を」

アーチャーの申し出を受け、とりあえず自然体を取る。

「解析、開始………ぐっ！？」

「あ、アーチャー！？」

アーチャーが眉をしかめ、苦痛の声を漏らした。

「いや、問題ない……あまりに馬鹿げていて驚いただけだ……」

「ひどい……」

心配したったのになあ……。

「さて……キャスター、もし君がこれだけのサーヴァントを一度に呼び出し従えらるとなれば、どれほどの魔力を消費する？」

「そうね……多分枯渇するわ、その時の状態にもよるのだけど」

「そうだ、大抵の魔術師であれば一体呼び出すのが漸く、複数のサーヴァントを運用するのは稀代の魔術師であるキャスターですら苦しいところだろう」

しかしとアーチャーは一つ置いて。

「マスターが我々の維持に割いている魔力は、実際に持っている魔力の10分の1にも満たない……蚊ほどの負荷も掛かっていないよ。うだ。全く、指輪が規格外とは思っていたがマスター自身規格外だったようだな」

アーチャーの台詞にサーヴァント達が絶句する。

「ほえ、なんや知らんけど兄ちゃんすごいんやねえ」

「みたいだなあ」

それもこれも全て神様のおかげだと思っが。

「まあそういう事で負担なんてあってないような物だし……はやての案は採用する」

「しかしマスター……」

ミニセイバーが俺の眼前に。可愛いなこれ。

「いってセイバー……心配してくれてありがとう」

「いえ……私は別に……」

「妥協点としては……寝るときには皆小型化してくれればいいや。

何より布団がないし……」

「了解しました」

ミニセイバーの頭を指で撫でる。不服ではあるようだが納得はしてくれたようだ、為すがままである。若干満更でもなさそうに目を細めている。

「となると……やはり諸費用がな……」

アーチャーが仕切り直し、問題を蒸し返す。そんなこと言われてもグレアムさんからもらっている俺達の生活費や学校費はあまり余裕がない。となるとやはり……。

「……よし！」

「どうしたマスター？」

「皆にはまず働いてもらおう！」

「……」

え？なにこの沈黙……？

「なあマスターよお、俺達は所詮戦人だぜ？んな奴らがまともに仕事なんか出来ると思っか？」

ミニランサーが呆れたように言うが、問題ないさ。

「大丈夫さ、今日は流石に無理だけど……明日は皆に仕事を探してきてもらいます。これで決定！」

そう締めくくり、立ち上がって台所に向かった。なに、夕飯を作りに行くのだよ。

修行開始……っていつのかなこれ？（前書き）

どうも、雷泥です。

前回はなるべく期間を空けないで頑張るとか宣ってた気がしますが
そんなことは無理だったというオチです。

今回も大した話ではないのですが、よろしければ見ていって下さい
……では、どつぞ。

修行開始……っていうのかなこれ？

さて、朝である。昨夜の夕食後、サーヴァント達は明日……つまり今日の当番を話し合っていた。まあ俺の護衛を一人、付けるとかいう話だった。別にちよつとやそつとじゃ死なないからいらんような気もしたが、セイバーに睨まれたので何も言わんでおいた。

「というわけで本日の護衛はアーチャーさんです」

『何がというわけなのかは聞かんが、あまりぶつぶつと言っていると変人と怪しまれるぞ祐一』

頭の中に声が響く。今はリュックの中にミニアーチャーが入っている。霊体化はできないとの事で、仕方なしの処置だ。協議の末、マスターではなく祐一と名前で呼んでもらうことにした。セイバーから「ではユウイチと……ええ、この発音は私にとって好ましい」と言われた時にはうっかり悶絶しそうになったが、なんとか頑張つて堪えた。あとアーチャーが複雑そうな顔してたな……。

『本日も手厳しい事で』

『君が戯けた事を言わなければ何も厳しくしたりはしないがな』

皮肉屋とでも言うのか、アーチャーはやはり口が悪いらしい。ちなみに現在、念話とやらで話している最中だ。リンクしているサーヴァント達と俺ならばこのような特典もあるらしい。

『あ、そういえば今朝のあれはアーチャーが？』

朝起きてリビングに行ったら、テーブルの上にちゃんとした和食が並んでいたのである。うちの面子の中で料理が出来そうなのと言つとむしろアーチャーくらいしかいないのでこれは確認だ。

『ああ……まあ久しぶりに包丁を握りたくなつてな』

『ふーん……でもさ、どうやって大きくなつたわけ？俺まだ起きてなかったよね？』

アーチャーが朝食を準備していた時、まだ俺は寝ていただろうから、どうやったってアーチャーが元に戻る事なんてできないはずではな

いのか？

『ああ、ある程度の自由は利くらしくてな。ミニ状態から元に戻るだけならばできるようだ』

『逆は無理と』

『それは祐一の意味が無ければ無理だな』

便利なのかそうじゃないのか……微妙なところだ。そういえば、驚いた事がもう一つある。バーサーカーが喋ったのだ。

曰く

「クラスとしては狂戦士だ。呼び名もそれでいい」

とのこと。理性を失っているはずのバーサーカーが喋れたのは、やっぱり正規の召喚とは違う形で呼び出されたからではないのだろうかと思う。俺だけじゃなく、他のサーヴァントも驚いていたので、やはり色々差異があるようだ。

「や、やがみく〜ん」

「ん？」

聞き覚えのある……というか昨日も聞いたが、俺を呼ぶ声に振り向くと、高町さんがとととと走ってきた……が、遅い。試しに早歩きしてみるとその差が激しく広がっていく。

「ま、まっつてなの〜!？」

『なんだ、君のガールフレンドかね』

『正しく友達の女の子だけどね』

速度を緩め停止する。

『なるほど……好きな女の子には意地悪したくなるか……』

『いや、何言っつてんだアーチャー？』

アーチャーが憎たらしく笑う。そういうんじゃないっての、大体あの子は6歳だぞ？んなこと考えてるわけねー。

「おはよう高町さん」

「あつ……あつ……お、おはようや、やがみくん……」

目を回しながら息も絶え絶えで近寄ってくる高町なのは嬢。今日も栗色の髪の毛をニヶ所で結っていて、動きに合わせびよこびよこ揺

れているのはちょっと面白い。

「はあ……はあ……な、なんでいじわるするの?」

瞳を潤ませ、良心に訴えかけるように問う高町さん。上目遣いでそれは正直ずるいと思うんだ。どことなく猫ちっくだし。

「……意地悪?」

恐らく歩を速めたという事を指すのだろうが、なんとなく……からかってみたくなった。

「なのはをおいてったの!」

「うーん……?」

『存外、君も性格が歪んでいるな……祐一』

『アーチャーに言われるのだけは不当だと思えるよ』

にやーにやー喚く高町さんをさて置いて、今度は普通に歩を進める。

「あ、おいてっっちゃやなの!」

「遅刻するよ?」

「にやっ!? それもやなの!」

結構、忙しい子のようだ。

ようやく授業が終わった。今日、サーヴァント達は仕事探しに出ていったので、我が家にははやてしかいないはず……とっとと帰らねばならない。

「……さようなら!」「」「」

帰りの挨拶、素早くカバンを背負い席を立つ。

「それじゃあね高町さん」

「あっ……うん」

高町さんに声をかけ、教室をあとにした。

「ただいまー」

「お帰り兄ちゃん」

「お帰りなさい祐一様」

帰った俺を出迎えたのははやてと普通の格好したキャスターだ。

「あれ、キャスターその服……」

「そや、お母さんの服や。キャスターさんとライダーさんにはお母さんの服渡したんよ、ランサーさんにはお父さんのな。みんなあないなカツコやったら目立って仕方ないし……」

はやてが苦笑いしながら話す。

「捨てられへんかったから、ゆうこうに使えてよかったやろ？」

二人がいなくなってから、クローゼットに入れたままだったしな……。

「まあ、捨てちゃうよりはいいか……」

「大体兄ちゃんもむちゃくちゃやねん、ギルガメツシユ以外まともな服持ってへんねんで？」

「あつ……そういやそうだな」

セイバーは甲冑だし、ライダーはそれ系のお店のようなボディースーツだったし、バーサーカーは上半身裸だったし、キャスターは不審者全開ローブ姿。ギリギリ、アサシンなら出歩けそうな着物だったけどランサーなんかパツと見青の全身タイツ……そんな連中が揃いも揃って仕事探しとか変人集団のオンパレードじゃないか。

「はやて……ありがとう……」

礼を言いつつはやての手を握る。よくできた妹を持って兄は幸せだようん。

「えっ？ な、なんや兄ちゃんまだ日も暮れてへんのにそないなあ！」

顔を真っ赤にさせイヤイヤンするはやて。なに？

「あら、おませさんねはやて」

いや、キャスターもふふふなんて笑ってないでさ……。

「お帰りなさいユウイチ」

玄関でコントみたいなことやってると、セイバーが見慣れない服で出てきた。

「ただいまセイバー……ってその服は？」

白いブラウスに青いスカート、作中で見た服を着ていた。清純派って感じで凄くセイバーに似合ってるが……。

「こ、これですか……？ これはその……」

「私が用意してあげた服よ？」

「キャスターが？」

ニコツと微笑みながらキャスターが言う。

「そう、私とライダーは家にある服で間に合ったのだけど、セイバーは色々サイズが足りなくて……ね」

「胸なんて……胸なんて飾りです……ユウイチにはそれがわからないのですか！」

「なにが!？」

セイバーが目には涙を溜めながら吼える。何のことかまったくわからないが怒ってることだけはわかったよセイバー。

「どうかしら祐一様？」

キャスターが可笑しさを堪えきれないようにクスクス笑う。

「いや、うんとでも似合ってるよセイバー」

「……そ、そうですか？」

今はまだ身長差があるためセイバーを見上げる形になるのでカッコつかないが、掛け値無しに似合ってるのは事実だ。

「ああ、可愛いな」

「……ほ、褒めてもらって嬉しいです……」

顔を背け、リビングに小走りで行ってしまうセイバー。

「むう……やっぱり無自覚なのはきょーせいした方がええ気がするで」

「あら、それも男の甲斐性と思うのも大事よ？」

「せやけど〜」

何やら復活したはやてがキャスターとこそ話しているようだが……何だ一体。

「あ、そうだアーチャー」

「ああ」

リュックからミニアーチャーが這い出てきて俺の目の前に浮く。

「さつき話していた事だろう？ 早速始めるとしよう」

「うん。じゃあ先に庭出ててよ、カバン置いて着替えたら行くから」
「了解した」

アーチャーが行ったのと同時に俺も自分の部屋に戻った。カバンを置き、制服を脱いでハンガーにかけ、動きやすいTシャツとジーパンに着替える。自室を出て、玄関に向かう。はやてを押ししてリビングに入ろうとするキャスターを呼び止め、

「キャスター、結界みたいなのって張れる？」

「あら、私を誰だと思ってるのかしら？」

「だよ、こつちの事がわからないようにして、目立たない結界つてのはできる？」

「認識阻害かしら？ 出来るわよ」

「んじゃあやつといて。俺今からアーチャーと修行するから」

「ええ、わかったわ」

言ってキャスターの元より離れ、庭に出るべく靴を履く。

「あ、明確な意志を持って家にくる人とサーヴァント達にはわかるようにしてね！」

「わかってるわよ」

確認を終え、外に出た。

「お待たせアーチャー」

「いや、そこまで待ったわけではない」

ぶっきらばうなアーチャーに苦笑しつつ、アーチャーを本来の姿に戻す。

「さて、魔術修行……とのことだったか、私よりもキャスターに頼

んだ方が適任だとは思うがな」

「魔術は魔術でキヤスターに習うよ？ けどこればかりはアーチャーにしかわからないだろうし 投影、開始」

「むっ！」

言葉を放つと、アーチャーの顔色が変わった。手にした剣は夫婦剣。アーチャーが好んで使う二刀一対の白黒の剣、干将・莫耶だ。

「……なるほど、確かに私以外にそれを頼める者はいないか……」

「そういうこと、まだ上手く出来ないからはりぼてみたいなものだけどな」

「ふっ……確かに、精度はまだまだな……だがな祐一、これだけはつきりさせよう。何故君が私の事を知っている？」

皮肉気な笑いから一転、アーチャーの顔が険しく歪む。

「ああ……えーっと」

睨まれた俺としてはどーすれば良いのやら、話しているものか微妙な物もあるし、しかし家族にはせめてすべて打ち明けてもいいのではという気持ちも無きしにあらず……。

「実は……俺、転生者なんだ」

結局俺は、洗いざらい話す事を選んだ。今までの事を、俺が前の世界では異常な存在だったらしい事、神様の計らいでこの世界に来た事、その時に色々とナニかをもらった事、八神家に拾われた事、今に至るまでの道筋を、何から何まで話した。

「……信じがたい話だが、嘘ではないのか？」

怪しげに訊くアーチャーの視線を受けつつ、俺は話はこれで終わりではないと告げる。

「俺がいた世界は、この世界はもちろん、アーチャーがいた世界でもない。俺はその世界から、第五次聖杯戦争の顛末を見ることができた」

「……なに？」

「ゲームとしてプレイしてたんだ。主人公を衛宮士郎として、大まかに三つの終わりをみる事ができた……アーチャー、答えは得て

るかい？」

アーチャーはハツとしながら俺を見て、

「単なる嘘ではないのだな……」

「それは記録じゃないの？」

「ああ、何故私がこの記録を鮮明に思い出せるのか……合点がいった。なるほど、君の影響か……外部から全てを見ていた君がいるから、私はあの光景を憶えていられるのだな……」

穏やかに笑うアーチャー。本当にそれを見ていたのは俺で、アーチャー自身の思い出じゃない。それでもきつと、この紅い弓兵にとつてはそれで十分だったんだろう。アーチャーは俺に歩み寄って目の前で膝を付いて頭を下げている。

「君に感謝を……私はまた、誓いを思い出す事ができた。これが分身たる私自身の物でないとしても、君の記憶から零れた借り物だとしても、もう一度あの光景を見れたことに……ありがとう」

そう言って上げた顔は、あの光の中で遠坂凜に見せた心からの笑顔。そして閉じた瞳から、止まることなく涙が溢れていた。ここで不粋な事を言うほど俺も空気が読めないわけじゃない。

「あの光景に賭けて誓おう。今後何があろうとも、私の全てを持ってして、君と君の大切なものを守る事を……それが守護者たる私の、我が主への約束だ」

「……ああ、頼むなアーチャー」

共に笑い合い、約束を交わす。そしてアーチャーが立ち上がり、きつと表情を変えた。

「さて、まずは解析の修行といこうか。先程投影したのを見る限り、錬度さえ上げればどうにでもなるだろう。君に足りないのは経験だ」

「ふむふむ」

「これを解析してみる、まずはステップその一だ」

言ってアーチャーはいつの間に出したのか一本の剣を放り投げてきた。それを拾って手に持つ。俺の身長は三倍はあるような長さの巨剣だった。

「でかつ……重つ……」

「それでも持てる子供というのは異様だがな」

夕日に反射し、黒く鈍い光を放つ巨剣。

「まあちよつと絵的に恐いものはあるだろうけど解析、開始」

創造理念 解析、完了。

基本骨子 解析、完了。

構成物質 解析、完了。

製作技術 解析、完了。

成長経験 解析、完了。

蓄積年月 解析、完了。

全工程

「解析、終了」

『竜鱗貫く鋼剣の一撃』バルムンクジークフリートが使ったとされる名剣。属性：竜殺し。宝具ランクA。

「はあ……バルムンクね……」

「次だ」

また剣を放り投げるアーチャー。てか剣放り投げるの危なくないかな？普通に刺さりそうになるから。今度のはバルムンク程ではないが長い刀身を持つ剣。

「解析、開始」

『全て斬り裂く不滅の刃』デュランダルローランが誇った切れ味を持つ聖剣。宝具ランクA。

「デュランダル……」

「今の二本、投影してみる」

「んな無茶な……」

言う俺に首を横に振るアーチャー。やれ、ということらしい。

「鬼師匠だ……投影、開始」

とはいえ、一度全てを見た以上、造り出すのは容易い。

「よし、どうだ！」

両手に持つはバルムンクとデュランダル。思えば双方共に俺の身の

丈には合わない大剣ではある。なんだいじめか。

「ふむ……やはり才能はあるのか……くっ、今日のとっろはその二本だけでいい。夕飯まで量産し続けたまえ」

「ハ、ハードだ……」

「頑張れ、マスター」

ちくしょう……アーチャーはそのまま俺に背を向け、家に戻っていた。

「……投影、開始」

哀しく呟く俺の声が、夕暮れの庭に響くのであった……。

第一印象ってのは大事だと思うんだ（前書き）

どうも、雷泥です。

いつの間にかやらPVも15000、ユニークも20000近くになっており、ああこんな作品でも見てくれる人がいてくれるんだなと嬉しく思います。この作品を読んでくださる方々のために、日々精進していききたいです。

そんなわけで第6話。此度もこんな感じですが……どうぞ、見てやってください。

第一印象ってのは大事だと思うんだ

昨日、結局はやてが夕飯に呼びにくるまでひたすらに剣を量産しまくっていたわけなんだが、庭を剣で埋め尽くした。はやてに怒られた。

以下、回想。

「兄ちゃんご飯やよつて、な、なんやねんこの剣の山！」

「いや、あの……修行」

「修行！？ 修行って何の！？」

「ま、魔術です……」

「魔術て！ 兄ちゃんがちよっぴし普通やない変な人やっちゅーのはわかったけど！ こんないっぱいの剣どないすねん！」

「ごめんなさい消しときます」

「ちゃんと片付けてから来るんやで！ きちんとせなばんご飯抜きや！」

「はい……」

ぶんすか怒るはやてが見えなくなるのを待ってから、俺は投影した剣を全部消した。アーチャーに言われた通りにしてたのに怒られた……何かしら理不尽な物を感じたが相手ははやてだ。仕方ない。

回想終了。

さて、本日俺にくつついてきたのはセイバーだ。小型化して俺のリュックの中に入っている。護衛は日替わりでやるらしい。んなもんいいのに、と言うと今リュックに入ってる奴が怒るので言えない。学校に行く日は必ず、つまり週五日はサーヴァント達が学校までくつついてくるらしい。まあ、大して困るわけでもないし良いのだが。担当は以下の通りだ。

月曜：ランサー

火曜：キャスター

水曜：アーチャー

木曜：セイバー

金曜：ライダー

というところらしい。何の法則性が？と訊いたらあっさりクジだと答えられた。セイバー辺りは本当のところ毎日でも護衛に就きたいとか洩らしていたとか。しかしそう都合良くも行かないもので。ちなみに、他三名の護衛役の無い奴らはと言うと……バーサーカーはその類い稀なる力が幸いしてか土木関係に仕事を見つucker事ができ、基本的に家にはいない。朝から出かけ、帰ってくるのは夜だ。一番順応が早かったかも知れない。アサシンは何を思ったのか八神家の門番みたいな事をやってる。と言っても結界張ってあるし害意のある侵入者は来ないと思う。ギルガメッシュは、はやて曰くふらっと消えていつの間にならぬらしい。神出鬼没というやつである。

実は既に、我が家での役割は決まりつつある。昨日の内に、各々仕事は見つかったらしく、ランサーは八百屋でバイト……何となく似合うな商店街。ライダーは古本屋……ぴったりないメージ。キャスターはとりあえず見つからなかったとのことで、見つかるまでしばらくは家事手伝いを頑張ると息巻いていた……ちよつぴし可愛いと思ったのは秘密だ。アーチャーが驚くことに聖祥の用務員として働くことになったらしい。昨日、俺が弁当食べてる時に居なかったのはそれ故のことだったとか。ちなみにアーチャーは朝から全員分の食事を作っている。俺とバーサーカーには昼分の弁当もだ。流石は料理人のサーヴァント……って違うか。そして意外にも、全くどうしようもなかったのがセイバーだった。何を隠そうこのセイバー、見た目は中学生で通じそうな風貌なのだ。少し離れて見ていたライダー曰く、巡回中の警官に学校は？と問われてしどろもどろになるセイバーは物凄く面白かったとのこと。少し見たかったかも知れない。もとより嘘が苦手そうなセイバーは、これでも成人しているとかの器用な台詞は言えなかったらしく、何軒か回ったが惨敗。その前に戸籍は？などと不粋な事を言うなかれ。そんなもんはアーチャ

ーがあっさりとクリアした。どこに行っても裏の世界はあるようだ。あまり非合法的な事はしないでもらいたい……結果として八神家の働き手はアーチャー、ランサー、ライダー、バーサーカーの四人。キヤスターとギリギリアサシンは家事手伝い見習い。よくわからないのがギルガメッシュ、完全にニートっぽいのがセイバー。ちよつと先行き不安になる、6歳の春。

まあ何はともあれ、今日はセイバーが護衛なのだよ。

『ユウイチ、近付いてくる気配があります』

「ん……ああ」

セイバーに言われ振り向くと、栗色おさげの子がいた。

「おはよう高町さん」

「おは、おはようなのやがみくん……」

何やらかなり驚いた様子である。

『どうやらおどかさうとしていたようですね』

『ああそれでか』

『これほど近くまで接近を許すなんて精進が足りませんユウイチ』
『なんか説教が始まった。肉体年齢6歳の俺に何を求めているんだセイバー。』

『かくなる上は私がユウイチを鍛え上げるしかないですね』

『そりゃあ願ったり叶ったりだけ……』

『これで私の役割はユウイチの師で決まりです。決して職が無いわけではありません』

『……気にしてたんだねセイバー』

『ち……違います、気にしてないません……』

やっぱり気にしていたのかセイバー。可哀想にと思っていると高町さんがこちらの顔をまじまじと見ていた。

「なに？」

「どうして気付いたのやがみくん？」

「ああ、うーん……」

背負ってるリュックの中身が教えてくれたとでも言うか、いや馬鹿

馬鹿しい。

「なんとなく……だな」

「なんとなくなの?」

「そ、なんとなくさ」

「ふーん……」

頷いたあと何か思い付いたように顔を綻ばせて笑っている高町さん。なにがどうしたのかよくわからんが、嬉しそうだしいいか。

昼休み、本日も昼食はアーチャーから受け取った弁当である。リュックからミニセイバーを引っ張り制服の内ポケットに突っ込む。「むぎゅっ」とか聴こえたけど気にしない。そそくさと弁当を掴んで屋上に走る。階段を上り扉を蹴り開け、隅に移動し腰かけた。

「いきなり何をするのですかユウイチ!」

抗議の声を上げるセイバー。ミニマムなので恐いどころか可愛いのだが、怒らせたままではいけない。

「セイバーのご飯を考えての行動です」

「許します」

早っ。こと食についてはセイバーは懐柔しやすいので楽そう。流石に誰かに見られると不味いので屋上にきたのである。

「ということさぁ昼飯だ」

言いつつ包みを開ける。セイバーはミニマムのままだ。何故ならその方がセイバーの食事を抑えられるからである。

「ほいセイバー、あーん」

「あーんとは、何でしょう?」

きよとんとした顔のセイバー。なるほど、知らないのか。

「小型化すると食べにくいだろう? だから俺が食べさせてあげるっていうのさ」

「なるほど、わかりました。では……あーん」

言って口を開けるセイバー。ちゃんと目を閉じてるのがかなりプリティだ。

「あーん」

箸で米粒を摘まみセイバーの口に運ぶ。これだけでもかなりの量である。箸で崩す必要があるおかず等をセイバーにあげるのがひじょうに困難だ。

何度かのあーんがあつた後、弁当が空になった。勿論俺が食したのであるが……まあ、現在の我が家としてはもう一人分の弁当を作るより経済的に幾分かマシである。ちょうど弁当を片付けた辺りで昼休みも終わりだった。セイバーにはまた内ポケットに入ってもらい、急ぎ教室に向かって走り出した。

教室に戻ると、授業開始直前に高町さんに

「どうしてなのは置いてったの……？」

と言われたのだが、とりあえず約束はしてないよと言つといた。物凄く不機嫌そうな顔をされ、授業中に横でずつと

「やがみくんはなのはが嫌いなんだやがみくんはなのはが嫌いなんだ」

と呪詛のように呟かれたので、結局明日以降は絶対に昼休みを共にすることを約束した。それ即ち、セイバーの当番の時も昼の弁当は分けてやれないという事であり、その事をセイバーに伝えたら

「そんな……ユウイチは私などどうでも良いのですね……」

という様にいじけられ、俺は一人どうすりゃいいのかと考えている。

そんなこんなで学校も終わり、本日は体力作りに少し町内を走っていく予定……というか現在ランニング中。荷物は早速用務員の仕事をしていたアーチャーに任せ、俺はセイバーをポケットに入れて走っている最中である。

陽も暮れかけた頃、俺は河川敷に蹲っている少女を見かけた。好奇心から見ていると、少女はどうやら置いてある段ボールを見ているようだった。坂道を滑り降り、少女の元に歩み寄る。

「なにしてるの？」

「!？」

振り返った少女はどこかで見たことのある顔だった。長い金髪にツインテール、聖祥の制服を着ているからどこかで見ても別におかしくはないか……だが何故に嫌そうに睨まれているのか。

「あんた確か……」

「俺を知ってるの……?？」

「あんた八神祐一でしょ！ いつも栗毛の子と一緒にいる！」

きつと高町さんのことなんだろうなと解釈。はいいんだが、俺のことを知っているとは予想外。

「正解……で、君は？」

「わ、私を知らないの……?？」

何故にそんな驚くのか、有名人の類いか君は？

「くっ、クラスメイトの顔くらい覚えときなさいよあんた！」

「そんなこと言われましても……」

話しかけてくるような人でなければ覚えなくてもいいかなって。

「ところでその段ボール、何？」

「えっ……」

訊くと何故か気まずそうに後退りする少女。

「な、なんでもないわよ！」

何故にそう攻撃的なのか……俺はその辺が知りたい。とりあえず中身を見るべくスタスタと近付く。

「こ、来ないですよ！」

「嫌だ」

必死に止めようとする少女をかわし、段ボールを覗く。

「おお……わんこだ」

段ボールの中に居たのは子犬、見ると左前足に怪我をしてるようだ

った。ポケットから消毒液とガーゼと包帯を取り出す。子犬の頭に手を近付けると、スンスンと匂いを嗅いだ後心を許したのか指を舐めてきた。

「よしよし……ちょっと待てな」

「う、嘘……私にはなつかないのに……」

なんか聴こえた気もするがいいや。とりあえず子犬の背をゆっくり撫で、前足の傷を見る。どうやら大したこともなさそうなので、ガーゼに消毒液を含ませ傷口を拭く。汚れやらなんやらを拭き取ったら新たにガーゼを一枚傷口にあてて包帯で二重三重と巻いていく。

「これでよし、と」

最後に軽く結び目を作ってゆるまないようにする。わんこの手当で終了である。

「ど……どうなの？」

おずおずと訊いてくるツインテール。その様子が妙にご機嫌窺う犬っぽく見えるんだが幻視だよな。物凄くお手とか言ってみたいけど我慢だよな。

「ああ、この程度ならばらくすれば治るよ。治るまで定期的にガーゼなんかを交換してやればね」

「本当！？ よかった……」

心底安心したって感じに一息吐く少女。おそらくはずっとこのわんこを心配していたのであろう。とはいえ、言って置かねばならない事がある。

「大方ここでこのわんこを見つけてわたわたしてたんだらうけど、こんな時間にこんな所にいるのはあまり良くないな」

「うっ……怪我してたんだから仕方ないじゃない……」

「でもだ、ここで心配してたってどうにもならないし、もしかしたら怪我がひどくて死んでたかもしれない」

「そ、そんなの……」

「そう、もしかしたらの話だけど、あり得ないわけじゃない」

「うっ……くっ……」

あれ、そろそろやばいかな。流石に女の子に泣かれるのは忍びない。フオー！とくか。

「まあ心配だったのはわかったから、次からは早めに病院に連れてく事だな。そうすれば無用な心配はしないですむ」

「……………んっ……………」

顔を背けながら肯定の意を示す少女。ちよつと泣きそうだったんだろうな……………あぶねえあぶねえ。

「でだ、この犬……………どうする？」

「えっ……………？」

「ウチは諸々の事情から飼えない。君が飼うならそれでいいけど、そうでなければ保健所に連絡するしかない」

『ユウイチ、少し厳しくはないですか？ 相手はまだ子供ですよ？』

『いや、俺も子供だよセイバー……………』

セイバーにツッコミつつ、考えに耽る少女を見つめる。さっきとは違い考え込んでいる少女は年相応には思えないが、これはこれで可愛く見える。

「……………飼う」

何か決意したように顔を上げる少女。

「この子は私が面倒見る……………それなら保健所なんか連れていかなくていいのよね」

「それはそうだが、親御さんの許可は得られるのか？」

訊くと少女は頬をかきつつ、

「……………パパは私に甘いから……………」

「……………ああ」

お互い半笑いになる。

「お嬢様ー！！」

「鮫島！」

道の方からきつちりとした身なりのおじさんが走ってくる。

「誰？」

「ウチの執事」

簡潔だがわかりやすい。息を切らせながら少女の前までやってきて肩を掴む鮫島さんとやら。

「お嬢様！ 何故このような所に居られるのですか！ この鮫島非常に心配していましたぞ！」

いつの時代の人なんだこの人。そげな内心はさておき、鮫島さんとやらは俺を見た。

「申し遅れました、私執事の鮫島と申します。あなたはお嬢様の学友でございますか？」

「さあ、今日初めて認識しましたから、初対面のようなものですよ」

俺の言葉に困ったような顔をする鮫島氏。

「そうでございますか、では何故ここに？」

「偶然、としか言えないんですけど。まあ、俺も一応帰る途中なんです、これで」

言って即座に振り返り、土手を上って走る。後ろからわーきゃー喚いているのも聴こえたが、まあ気にしない方向でいこう。その後町を二三週し、帰宅した。

帰ってきてすぐだが、今日もはやては可愛いなあ。シスコンと言われればそうかもしれないと答えるかもしれないが……とにもかくにもはやては可愛いのだ。いや、俺はきつと家族に甘いのだと思う。セイバーは美少女だしライダーも掛け値なしに美人だし、キャスタも美女だ。我が家の女性陣は実に広い守備範囲をカバーできる位に綺麗所が揃っているのだ。まあ、今は彼女ら全員が目が何か可哀想なものを見るような目であることには違いないのだが、そんなこととは些細な……現実逃避はやめよう。八神家の庭に広がるこの赤い荒野、剣の墓標。たまたまここにはランサーとバーサーカーとギル

ガメツシユとアサシンがない。何でいないのか、ランサーとバーサーカーはお仕事だろう。ギルガメツシユとアサシンはわからん。まあとにかくいないのだ。つまり目の前に立つこの男は赤い弓兵、アーチャー以外にあり得ないわけで、唐突に固有結界を開いた理由としては、大方俺の投影修行であるとわかる。ただ、

「まぢでこれ全部覚えると？」

目に映る剣は本気で無限と言っても良いくらいに膨大な量だった。

「でなければ固有結界なぞ持ち出したりはせん、早くやりたまえ祐一」

「……泣くぞ？」

「好きにしてくれて構わん、私は延々これを展開し続ける事が可能だ……祐一の魔力をもらってな。もつとも、そろそろ夕食を作り始めなければセイバー辺りが暴走するやも知れないが……」

どちらにせよ苦勞するのは俺だと言いたいのか、アーチャーは皮肉気に笑うのみ。

「……ううう、ちくせう」

「恨むなら自身の馬鹿魔力を恨めマスター」

冷たく言い放つアーチャーに、泣く泣く俺は片っ端から剣を解析していくのだった……。

メイドさんはロマンだな（前書き）

どうも、雷泥です。

サブタイに深い意味は……ないです。

多分次の更新はかなり日が空くことになると思われませんが、ふと気付けば次話が出てたりしますのでよろしく願います。

メイドさんはロマンだな

人間、やれば出来るもんである。

解析に次ぐ解析、頑張つてやったら一時間程でどうにかこうにか解析を終え、大急ぎで夕飯に取り掛かったものの、セイバーに冷ややかな目で見られていたアーチャーは笑えた。まあ、笑う気力は残っちゃいなかつたが……。

術者がその場から離れるわけにはいかないというアーチャーの言い訳に、セイバーが半分くらいの量にしておけば良かったではないかと怒った。理由は恐らく解析し終えた俺がその場にぶっ倒れた事と夕食が若干遅れた事によるもので、大方3：7くらいなんじゃなからうかと俺は睨んでいる。

とまあ、そんなこんなで俺はアーチャーの内包する剣を全て写し終えた。量だけならばアーチャーと同等だ……まあ質はまだただがかなりのスピードで終わったので、今日からは戦闘訓練もするのだとかで……全然小学生らしい事をしてないな……俺。かといって、もし何かあった時にはやてを護れないとなつては駄目だ。俺の大切な妹を護つていくためにも、この鬼畜紛いの修練は必要なことなのである。と」

『祐一、何をぶつぶつ言っているのですか？』

「あれ？ 声に出てた？」

『今もはつきりと』

『おっと……不思議ちゃん扱いされんのは嫌だな』

いつの間にか声に出してしまつていたようだ、アホだな俺。

『そういえば、ライダーは昼どうする？ 今日から友達と食べる約束してるからライダーと一緒にするのはちときついんだけど』

『問題ありませんよ、一食抜いたくらいでは英霊は死にません』
英霊が死ぬとはこれ如何に。なんとなくセイバー辺りは餓死しそう
だけど……なんてことは言えない、絶対言えない。

『とはいえ、不調にはなるかもしれませんがね』

『うむう……その辺は課題だよなあ……つてそろそろ……』

『祐一、こちらに接近してくる気配があります』

「おはようやがみくん！」

「まあ、だろうね」

「うん？」

小首を傾げる高町さん。中々可愛らしいもので、今日も横に結んだ
おさがが動く度にひょこひょこ跳ねている。

「なんでもないよ」

「ふう〜ん……変なやがみくんなの」

「心外な」

「ふえ、しんがい？」

「高町さんはまだまだなあ」

「にやつ！？ なにがなの！？」

とまあ、こんな感じで適当にからかいつつ、学校へと向かった。

授業中、正直言って暇以外の何者でもないこの時間帯は寝て過ごし
ているために、俺の印象とやらもそれ相応の……まあ不真面目と思
われている。

「起きなきゃだめなのやがみくん……」

隣に座る高町さんが俺の体を揺する。

「……起きてるよ高町さん」

「ふえ！？ 起きてたの！？」

授業中という事もあり小声ではあるが……。
「そりゃあひたすらに揺さぶられてれば」

「もう、授業中にねちゃだめだよやがみくん」

しょうがないなあと笑う高町さん、さながら出来の悪い息子を見るような……って君は俺のお母さんか。

「高町さん、先生が見てるよ」

「うにゃ!？」

ジト目で俺達を見ていた担任の……なんだっけ? まあいいや、先生って言っとけば通じるし。先生が高町さんに私語は慎むように、とテンプレ通りな注意をして……まあ俺はいつも通り寝るだけ、おやすみなさい。

家に帰ると、アーチャーが買い物に出かけるところだった。ついでだから俺もついていくことに決めた。リュックから出してもらったライダーを大きくしてから荷物を置き、ちゃっちやと着替え部屋を出ようとする、

「私も行きましょう」

同じくいつの間にか着替えを終えたライダーが来た。

「ライダー?」

「今日の護衛は私ですから」

そう言っただけで微笑むライダーにドキッとしつつ、玄関に向かう。

「んじゃ一緒にいこうかライダー?」

ライダーと連れ添って玄関を出ると、アーチャーがこちらを見ながらフムと思索していた。

「準備できたよアーチャー」

「うむ……いや、やはり私は行くのをやめよう」

「ん? なんでさ?」

「いやなに、大して物を買わなくてもいいのでな。私は夕飯の準備をしておくから、祐一とライダーで買い物に行ってきたくれ」

そう言っただけでアーチャーは家に戻り、しばし後に戻ってきた。

「コレがリストだ、よろしく頼むぞ祐一」

俺にメモと買い物かごを渡し、アーチャーはまた家に戻って行った。その場に残ったのは俺とライダーのみ。

「……まあいつか、行こうライダー」

「……そうですな祐一」

ライダーと初めてのおつかい、といったところである……。

「これで全部だ、帰ろうかライダー？」

「ええ、そろそろ日も暮れてきました……」

リストの品を全て購入し、俺とライダーは商店街を出た街道沿いを歩いていた。

「今日も帰ったら地獄の修練かな……」

「そうでしょうね」

「流石に昨日みたいなやたら多い剣の群を解析してくのは嫌だなあ

……」

「それでも大して時間を掛けずに全てを終えてしまう祐一は凄まじいと思いましたか」

「アーチャーは容赦ないしセイバーの目が血走ってた」

適当な世間話をしつつ、かごを持って隣を歩くライダーを見る。スラッとした長身に、長く透き通るような髪。整った目鼻立ちに、何より自己主張の激しい胸に目がいつてしまうのはわかる。ちなみに日常生活においてライダーはメガネをかけている。『魔眼殺し』と呼ばれるそれをかけることによって、ライダーの持つ石化の魔眼は効力を完全に抑えられている。なんでそんなものが？というところ、アーチャーが作った。いつも眼帯をしていたのでは日常生活に支障が出るということに悩んでいたら、アーチャーが投影してくれた。大丈夫なのかと訊いてみたが、効果はこの通り抜群だった。なんでも、

昔に一度見たことがあつたらしく、試しに投影してみたら出来たこと。世界が違うからか、修正を受けたりもしないらしく、アーチャーや俺の創る物はそれが真作と認識され、ランクダウンもしないとか……。尽く反則臭い能力だよな……。

「ん？」

視線を前に戻すと、あんまり見たくないものが見えた。紫がかつた髪の少女が、グラサン黒服という怪しさ満点の男二人に無理矢理連れ去られようとしていたのである。

「投影、開始」

俺の背丈に合わせた木刀を二本投影し、走る。少女の腕を掴む男

面倒なので黒服A の脛を思い切りぶつ叩く。木刀が一本折れたがまあいいや、悲鳴を上げて手を離れた隙に少女の手を引っ張り抱き止め、黒服Bが不測の事態におろおろしていたので残ったもう一本で股間を打ち据えてやった。声にならない悲鳴を上げて黒服Bが倒れ、復帰した黒服Aが激昂し襲い掛かってくる。

「気絶させれば十分だからねライダー！」

「わかりました」

叫ぶと同時に返答が来て黒服Aが吹っ飛んだ。人がきりもみ回転しながら飛ぶのは初めて見たな……。ドチャツと落ちた音がして

黒服Aも沈黙。

「ふう……大丈夫？」

気付けばずっと抱いていた少女の方を見ながら安否を問う。突然の出来事に思考が追いつかないのか、どこか惚けて俺を見ている少女。

「あ……大丈夫……夫」

かなりの間を置いて、ようやく問いに答えてくれたので、少女を立たせて手を離す。

「祐一、これらはどういたしましょうか？」

「ん……とりあえず警察になって、電話もなかったな」

「では拘束して捨て置きましょう」

言ってライダーはどこから取り出したのか、丈夫そうな紐で黒服二

人を後ろ手に縛ってゆく。

「あの……電話なら、あります」

「む？　じゃあ通報してもらっていい？」

「ち、ちよっと待っていてください……」

申し訳なさそうに少女が携帯でどこかに連絡し始めた。ってか携帯か……うむ、あれば便利だろうな！あんまり必要性は感じないが！

「あの……」

「ん……？」

少女がなにか言う前に、

「お嬢様！」

何やらメイド服着た女性がこちらにやって来た。

「ご無事ですか?!」

俺と少女の間に割って入り、少女の肩を抱いて俺を睨むメイドさん。視線恐いです……。

「……あなたは？」

警戒しまくるメイドさん。その少女の盾になろうとする心意気は立派である。共感できる部分でもあったのかライダーがほうと声を漏らした。まあ一方の俺の従者は主がわりとピンチなのを放つと置いていた買い物かごを回収するところみたいだったが……酷いやライダー。

「……私立聖祥大付属小学校一年、八神祐一です」

自己紹介したのに沈黙を保ちいまだ警戒を解かないメイドさん。そんなメイドさんの袖をくいくいつと引つ張り、少女が消え入りそうな声で言った。

「……ノ、ノエル……違うよ、この人が助けてくれたんだよ？」

恐らく同世代の少女にこの人扱いされるとちよっと哀しいものがある……。

「……ですが、油断させておきながら襲い掛かってこられるという場合がないわけではございません」

「で、でも……」

本人の前で堂々とと言えるんだからすごいもんだ……あれ？一応助け
たっばいののにこの扱いつて……なるほど、アーチャーはこういう思
いをしながら正義の味方をしていたわけか……アーチャーはすごい
なあ……ちょっと優しくしてやろう。

「……祐一、行きましよう」

「ライダー？」

いつの間にか買い物かごを持ったライダーが俺の隣に立っていた。
声色からしてちよつと……怒ってない？

「先程も言いましたが、日も暮れてきました。長居をして家族を待
たせるのも悪いでしょうし、何よりあなたがここにいることももつ
なさそうです」

「……了解、帰ろうライダー」

中々きつい物言いで、半ば睨み付けながらライダーは俺の手を引く。

「あつ、あつ……！」

少女が何かを言おうとしていたが、ライダーの早足に俺は聴くこと
なくその場を離れた。

「なに怒ってるのさライダー」

「……怒ってなどいません」

そう言いつつもライダーの顔は目に見えて不機嫌だった。さっきま
では少なくとも穏やかな顔してたのに……。

「怒ってる」

「怒ってません」

こう頑なに言われると意地でも負けたくないと思うのは俺が負けず
嫌いだからだろうな。

「怒ってるじゃないか」

「……怒ってません」

「……俺のために怒ってくれたの？」

訊くとバツが悪そうにライダーはそっぽを向いた。

「やっぱりそうなんだ……」

この背でも確認できるくらいにライダーの顔が赤くなっている。

「……大人げなかったでしょうか？」

「んー……いや、嬉しかったよ。ライダーは俺を護ろうとしてくれたんだよね？」

「……あの女性は、あるうことか祐一を疑ってかかったのです」

「あはは……しょうがないよ、多分あの女の子が主人か何かなんだろうさ。子供とはいえ知らない男に肩を抱かれて、そいつが大の大人二人をのしたつていうんだから、警戒されて当たり前さ」

しかしライダーの顔はやはり不満そうで、

「そうかもしれないませんが、私は祐一のサーヴァントです。主に在らぬ疑いがかかったとあれば不愉快にもなります」

「……ライダー、しゃがんでくれる？」

「なんででしょう？」

キョトン顔のライダーが俺の目線に合わせるようにしゃがむ。そのライダーの頭にポスツと手を置いて撫でた。

「……あの、祐一？」

「可愛いなあライダーは」

「かわつ、かわいい……い……？」

「嬉しくて思わず撫でちゃうぜ」

撫でりこ撫でりこしているとライダーの顔が見る見る赤くなっている、最終的に茹で蛸みたいになってしまった。

「……帰りますよ祐一」

「はいはい」

照れるライダーというのも初めて見たなあとにやけている内に家に着いた。

「ただいまー」

「おかえり兄ちゃん！」

「おかえりなさいユウイチ」

ああ、やっぱり我が家はいいな、癒される……。

食後、アーチャーに連れられ庭に出る。

「さて、今日からは戦闘訓練だ。覚悟はいいかね？」

問われ、考える　までもない。

「いいよ、やろうアーチャー」

「……ふむ、良い目だ　投影、開始」

アーチャーの両手に夫婦剣、干将・莫耶が出現する。

「誰かに師事できる程、私も器用ではなくてな……悪いが実戦形式で行くぞ？」

「おう！　投影、開始！」

俺の手にも同じく干将・莫耶が現れ、構える。

「刃は潰してあるが、当たれば痛いぞ？　心してかかれ」

アーチャーが走る。一足跳びで俺の目の前に現れ、剣を振るう。左手に持った干将の横一闪の一撃を、同じく干将で受けて流す。

「ほう、理論構築だけならば既に出来ているか……ではこれはどうかな？」

円を描くようにアーチャーが回転し、莫耶の斬り上げ、干将の突きと二連撃が繰り出される。莫耶の斬り上げを身を捻ってかわし、干将の突きを俺の莫耶で受ける。結果として莫耶が砕けたため、一度跳んで離れる。何故俺がこのように動いているのか、アーチャーが手加減してくれているというのも勿論あるが、俺も一連の動きを視ているのだ。

「……ずいぶんと淀み無く動けるものだな君も」

「ふう、やっぱり精一杯な感じはするけどね……」

アーチャーが感心したように言うが、こちらは息も絶え絶えである。

「勝てるとは思わない……けど、負ける気はない」

「ふっ……心構えは充分のようだな。では　行くぞ？」

アーチャーが動き、視界から消える。流石に英霊かつ！

「投影、開始！」

振り返る前にしゃがむ。頭上で空気を斬る音が聴こえ、そのまま前に転がるようにして避ける。予測通りアーチャーは俺を蹴り上げようとしていたらしく、視界にアーチャーの足が見えた。

「危なっ、てりゃ！」

起き上がる前に両手の干将・莫耶を投擲し、新たに剣を造り出す。

「むっ!？」

投げてるかとは思っていなかったのか、アーチャーが一瞬たじろぐ。即座に思い直し剣を叩き落とすが、その隙さえあれば俺が剣を造り出すことなど容易。

「はああっ！」

「くっ!？」

新たに投影した干将・莫耶を振り上げ、斬り掛かる。しかしアーチャーもバッグステップでかわし、距離をとって離れる。かわされてしまったため、着地したものの膝をつく。

「ハア、ハア……うへえ……疲れた……」

「ふう、まだ早かったのかもしれない……体力がもたんのだろう？」

「流石に……なあ」

その辺はやっぱり小学生……というか六歳だぞこちとら。

「しかし、つくづく君は怪物染みているな」

「ひどいよアーチャー」

「何がひどいよアーチャーだ、何ださっきの機動は、小学一年生の動きかあれが？ 詐欺も良いところだぞ」

若干不服そうに言うアーチャー。そんなこと言われたって負けたくないもんは仕方ないじゃあないか、こっちも無我夢中なんだ。

「まあいいや……疲れた、眠い」

「くっ、変なところはしつかり子供らしいじゃないか」

「寝そうだ……そういえば俺が寝るときは皆に小さくなってもらうつての、やれてないよな……」

「君がし忘れるのではないか」

笑うアーチャー。だが仕方ないでないか、皆帰ってくる時間がばらばらなんだから……勝手に小型化したらなんかあった時に困るだろうに。

「まあ、なんだかんだ寝る事は出来ているからな……そうだな、明日は布団をいくつか買いに出るか。そろそろ取り合いになるやもしれんしな」

実に楽しそうに笑う。なるへそ、明日は布団を買いに行くのか。ちよっと楽しみだな。

「では、今日の鍛練はこれまでとし、風呂に入って寝るとしようか」「了解アーチャー」

剣を消し、アーチャーと共に家に戻る。何故かそのままアーチャーと風呂に入る事になり、その大きな背中に父を思い出してほろりときた……。

エルフ耳とかを妙に弄くりたくなるお年頃（前書き）

叶うならば一度はくにくにしてみたいと思います。

どうも、久方ぶりです雷泥です。

ほっぼつといたにも関わらず、ちよくちよくと見てくださる方もいらっしやり、いつのまにやらPVも50000を超え、ユニークも8000を超えるという……ありがたいき幸せでございます。今のところ非常に温かい意見を皆様方から頂いており、私自身ほっこりとした気持ちでいます。今一度読んでくださる方々に大きな感謝を。今回しばらく期間が空いたのには一応の理由があり……私はパソコンを持っておらず、つまり携帯で投稿しているのですが、前話辺りから既に不調を訴え始め、遂には先日ぶっ壊れまして……修理に出していたという事でありました。直ってよかったです。

さて、この度もいつもと変わらぬ出来ではありませんが、よろしければ見て行ってください。

エルフ耳とかを妙に弄くりたくなるお年頃

朝起きると隣にはやてが眠っていた。夢かと思って自分の顔をひっぱたいてみたら痛かった、おのれはやて。

窓から差し込む朝日を浴びて起床。昨日の疲労が尾を引つ張っているみたいだが、今日の昼頃には疲れも取れ切る事だろう。妹が俺のベッドに入り込んでいたというハプニングが発生。とりあえず体を揺すって起こしてみた。

「はやて、はやて？」

「んに……」

「起きろってはやて」

「にやあ……もう食べられへんよお……」

テンプレートな寝言を言う我が妹……っておいまさか。

「……はやて、起きないとその唇奪うぞ」

「……」

無言で唇を突き出す妹。しばらく放っておくと段々赤くなっていく……。

「やっぱり起きてるなお前」

言っではやての眉間にでこぴんを放つ。

「あいたっ！ あうう……ちよっとひどないかな兄ちゃん？」

漸く諦めて目を開き、恨めしそうに睨んでくる。目尻につつすら涙を溜めている辺り可愛さが増すが……。

「何を言つか貴様は」

「乙女の純情もてあそぶなんて兄ちゃんきちくや」

「あのなあ……そもそもなんでお前ここにいるのさ？」

最近はやてが変だ。覚えてたの言葉を使ったがる年なのか、妙ちくりんな事を言つては俺を困らせる。

「……兄ちゃん最近ずつとしゅぎょーしゅぎょー言つて私と一緒にいてくれへんもん」

「そりゃあ……そうかもしれないが……」

「せやから……一緒に寝るくらい良いやろ？」

俺のパジャマの端を引っ張り、はやてが上目遣いに訊いてくる。

「うっ……わかったわかった、一緒に寝るくらいならいいよ」

「やった！ せやけど兄ちゃん、チューしてくれへんの？」

「するかアホ！」

もう一度はやての眉間にでこぴんを撃ち込む。まったくこのマセ狸は……。

「あうあう……手加減してえな兄ちゃん……」

愚痴るはやてを置いてベッドから飛び起き、パジャマを脱ぐ。タンズからTシャツとズボンを引っ張り出し、着替える。

「つていや兄ちゃん！」

はやてが凄い勢いで顔を反らし、あらぬ方向を見る。

「何してんだはやて？」

首痛めるぞと続けようとすると、はやてがそれを遮った。

「あれれ、レディの前で着替えるて兄ちゃんはしゅうちんっちゅ

ーもんがないんか！」

なにやらわーきゃー喚いているが、んなことはお構い無しにズボンを履く。シャツに腕を通し、着替えも終了と。

「今さら何を言つてんだ、一緒に風呂だつて入るだろ？」

たまに風呂に入れてやることがあるので、別に裸を見られる事に抵抗はない。

「それとこれとは話が別や！」

「さよけ」

「兄ちゃんが冷たい！」

今日はいつにも増してテンションの高い我が妹。

「どーでも良いけど、どうやって潜り込んだんだ？」

足が悪いはやてが一人で俺のベッドに入り込めるわけもないので、誰かしらの手助けがあったはずである。

「えと……兄ちゃんが疲れて寝てからキャスターに頼んで運んでもらったんやけど……」

「キャスターか……ったくもう」

「うっ……兄ちゃん怒っとる？」

「いや、怒ってるわけじゃないんだ……まあいいや、ほらこい」

「えっ……わっ、兄ちゃん何するん!？」

はやての脇と膝裏に手を回し、抱き上げる。俗に言う、お姫様だっこってやつだな。

「に、兄ちゃん……私、すっごい恥ずかしいんやけど？」

「はいはい、いいから首にでもどこでもいいから掴まってくれ。協力してくれないと辛い」

「あ、うん……兄ちゃん私、重ない？」

「軽過ぎだな……成長してるのか心配になるくらいだ」

「むうー……私かて成長しとるよ」

はやてを抱き抱えた状態で部屋を出てリビングに向かう。

「あら、朝からお熱いのね。妬げちゃうわ」

部屋を出てすぐにキャスターに遭遇。にやにやしながら意地悪そうに見てくる。

「誰のせいだ誰の」

「あら、迷惑だったかしら？」

またそうやってしれっと言うこの人は……。

「そうは言っていないけどさ……」

「くくく……祐一殿、女狐に謀られたようだな」

スツと突然現れたのは甚平姿の侍だった。いやなんか似合うけどさ。

「女狐とは失礼ねえ……私ははやての願いを聞き届けただけよ」

「わわっ、そんな言ったら駄目やキャスター!？」

「ぬおっ!?! ば、馬鹿、暴れるなはやて!」

キャスターが口を滑らせればはやてが慌て、俺がひどい目に遭うという見事な悪循環。

「愉快な主よなあ……」

朝っぱらから酷く疲れた気がする。鼻っ柱に一発くらいながらもはやてをリビングに連れて行くと、アーチャーが自身で作ったと思われる朝食をテーブルの上に並べていた。

「おはようアーチャー」

「おはようアーチャー」

「おはよう祐一、とはやてか。ついでにキャスターとアサシン」

「ついでとは酷いわねアーチャー」

「他の誰であれ主と妹君以外には似たような反応だと思うがな」

「それもそうね」

「仲良くしようよみんな……」

どうにもそりの合わないというか……これだもんなあ。

「まあ、何はともあれ朝食をとるとしよう。祐一もそろそろはやてを下ろしてやったらどうかね？」

「ん？ ああそういえば抱きっぱなしだったな」

はやてをゆっくり車椅子に乗せる。ちよっと名残惜しさを感じたのはやはり俺がシスコンだからか？きつと違うと信じたい……。

さて、時刻は大体10時頃といったところか、英霊含む八神家一同が現在いるのは、海鳴ショッピングモールというやたらめったらどでかい施設である。洋服屋だったり本屋だったり、雑貨に家具に食品と、なんでもござれな感じだとか……チラシを握り締めて語るアーチャーの、得体の知れない迫力に圧されて、俺達はこの場所に突っ立っている。まあ、日がな世話になっているアーチャーがあそこ

まで燃えていたのだ。先日開店したばかりで、全店舗セール中のこの施設に来る位、別に我が儘というわけでもない。

とはいえ一応今回は目的があり、我々は布団を購入しに来たのである。日雇いだからなのかどうなのか、我が家に一番お金を入れてくれるのはバーサーカーであり、バーサーカー自身特に欲しい物も無いので家計に役立ててくれと全額回してくれている。いい人だ、いやいい英霊だ……まあ何はともあれ、それほど高価な物でなければ、布団くらいなんぼでも買える。ちなみに、最終的な我が家の財布の紐は……俺が握っている。俺もアレがこの世界に無いとわかった以上、特に欲しい物もなく。そもそもこの世界には俺の大好きなアレが存在すらしていないことがわかったのだ。わかった時は人生の儚さについて本気で考えてみたりもしたが、無いものは仕方ない。そんなわけで意外に思われるかも知れないが、俺が八神家における資金運営という言い方もおかしいがまあ家計のやりくり担当なのだ。はやては「兄ちゃんに任せる」と言って早々に全権を俺に委ねて来た。サーヴァント達も特に異議無く。任せられた俺は俺でしっかりやれているから問題ない。

「では、行くとしようか」

どこか楽しい表情のアーチャーの横顔を見上げつつ、俺も付いて歩く。右隣をアーチャーが歩き、左隣には私服姿のセイバーが控えている。勿論、皆私服だ。

「まずは先に布団を見てしまおうとしよう」

言われて来たのは家具屋さん。机やら椅子やらのインテリアが綺麗に陳列されているのを見てみると、中々どうして、俺も意味無くワクワクしてきた。

店内を進むと、寝具の置かれているエリアに辿り着く。ずらっと並べられた布団を見上げ、その多様さに驚く。

「結構多いんだなあ布団……」

見るとすでにアーチャーは品定めしているらしく、何枚目かの布団を手で擦りながらも目付きが先程までと違う。

「わあ、なんやこれ？」

「ああ……低反発枕だな」

ライダーの押す車椅子に乗るはやてが積んであった低反発枕を手に取ってふによふによと押して遊んでいる。

「兄ちゃんおもしろいよこれ！」

「はいはい」

俺に付いて歩くセイバーも何気なく手に取ってその感触に驚愕しているようだった。はやてと同じく手のひらを枕に沈ませては遊んでいる。

「これはすごいですねユウイチ」

「そうだね……」

至極真面目な顔で目をキラキラと輝かせているのは……何だ、買って欲しいのか？

「おおつ、確かにおもしろえ触り心地だな」

更にランサーまで枕を触り出し、面白がっている……。

「まあ、二人が生きてた時代にはなかっただろうけど……」

「なんだ祐一、妙な顔しやがって」

「ランサー、値段見てみ値段」

「あ？……げ、マジかよ」

ランサーが潰し気味に触っていた枕は、お値段39800円と馬鹿らしくなるほど高めの枕であった。その数字を見たランサーも少々げんなりしているが、まあランサーも働いているからある程度金銭感覚は俺に近いのかもしれない。ぶつちやけ、んな枕に金使う位なら美味しい物たんまり食う。

「これに金使うよりは美味しい飯食った方がいいな」
本当に似ていたようである。

「げつ。ほれほれお二人さん、行くよー」

全く同時に枕に顔を埋めようとしていた二人から枕を取って引つ張り、枕コーナーを離れる。

「あうう、兄ちゃんせめて一回、一回だけでええねん」

「ユウイチ、何故止めたのです」

そんなもの周りの目が恥ずかしかっただけである。補正でもかかっていたのか、周囲の目が微笑ましい何かを見るような生暖かい眼差しに気付かなかったのかセイバー。

「あれ八商品デス」

若干片言になった気がするがわかってくれたのかすごい勢いでコクコク頷く二人。

選定を終えたアーチャー、さらにどこぞに行っていたのかいつの間にもやらいなくなっていたアサシンにギルガメッシュと合流し、一同はアーチャーの言う布団を見るためにその場所に赴いた。

「これだ」

「へえ……」

敷き、掛け、毛布、枕の一式ワンセットできつかり3980円。値段の割にはふかふかもふもふで良い感じだ。そういえばここも開店セール中だったとかで、本来の値段より値下げしているらしい。どれほど下げているのかわからんが、となるとさっきの枕も……いや、考えるのはやめよう。

「どうだろうか祐一、値段も手頃で材質も良好。セールは本日までとの事だったから、買い逃せば次はないぞ？」

「うん……皆はこれでいいかな？」

振り返り全員に聞く。実際に使うのは俺じゃないし、皆の意見を優先したい。一同頷く様子を見ると、反対意見はなさそうだ。こねるかと思っていたギルガメッシュも特に何か言うわけじゃない辺り、やはり作中のギルガメッシュとは大分違う気がするなあ……。

「では、購入するでしょう」

計8セット購入、かなりの出費ではあったが……バーサーカーに感謝である。購入したはいいのだが流石に大きく、家まで運ぶのは色んな意味で無理があるということ。明日我が家に届けてもらうこととし、しばしこのショッピングモールをぶらつくことにした。

「ところで……気になったんだけどさ」

「どうかなさいましたか祐一？」

俺の疑問に、はやての車椅子を押すライダーが反応する。すぐ前方に先を歩くランサーとアーチャーの背中。はやてのすぐ横に付くバーサーカーに、辺りをキョロキョロと見ているアサシン。俺の隣を歩くセイバーに、はるか前方にて和菓子屋のおばちゃんに何やら申し立てしているギルガメッシュ……そう、1人足りない。

「いや……キャスターは？」

「そういえば……見当たりませんね」

言ってライダーも一通り辺りを見回す。とりあえず視界にはいなかったわけなんだが、どこに行っただんだあの人は。

「む……女狐ならば確か……」

アサシンが呟き、5階立てのこの施設の3階を指差す。

「ふらっと、あちらに上っていったぞ？」

「上に？」

見上げてみるが、それでキャスターが見つかるでもなし。はあ、と溜め息1つ吐いて、眉間を押さえつつ顔を下げる。

「あ……はやて、ライダーと一緒に適当に回っててくれ。お昼になったら……そうだな、あそこの時計の真下に集合ということにしよう。ライダーもそうしてくれるか？」

「うん、ええよ」

「わかりました」

「それからバーサーカーもアサシンも、適当にぶらついていいよ。昼にあそこの時計の真下、これでいいかな」

「ふむ、心得た」

「わかった」

4人の了解を得て、前方に行く3人に意識を向ける。

『おい』

『む、祐一か』

『どうしたよ』

『3人同時に念話などできるのか……』

『今から自由行動。昼には前方の大きな時計の真下集合、オーケー？』

『いいだろう』

『あいよ』

『了解した』

『んじゃ、また後で』

3人から意識を外し、横を歩くセイバーの方を向く。

「……よし、セイバーも自由に……」

「いえ、結構です。私はユウイチに付いて行きます」

うん…… まあそうなるんじゃないかと思って最後に訊いたんだけどさ……。

「まあ……好きにして」

「はい」

俺とセイバーはエスカレーターに乗り、上階へ。

『あー……キヤスター？』

ゆっくりと滑るように移動する階段。後ろでセイバーがエスカレーター相手に困惑しているのが少しおかしくも思えるが、まあそれは捨て置いて。居場所の知れないキヤスターに念話で語り掛ける。

『……おい、キヤスター？』

はて、一応リンクは繋がっているはずだから聴こえない……なんてことはないと思うんだけど……。疑問に思いつつ更に上階へと続くエスカレーターに乗り、キヤスターが向かったという3階へ。

『キヤスターさん……』

再度話し掛けるが反応がない、ただの屍の……

『あら、どうかしたのかしら？』

うおっ！？びっ、びっくりしたじゃないか……。

『念話に応答しないってのもすごいなと思うんだけどさ』

『ああ……少し考え事をしていたからかしら』

『考え事って……まあいいや、今どこにいるのさ?』

「ここよ?」

「うどうふえっ!?!」

背後から突如声が聴こえ、驚いた俺も変な声を上げてしまった。

「面白いわね」

「心臓に悪いっ!」

「ふふっ、ごめんなさいね」

謝りながらクスクスと……俺がどきまぎする様を見て面白いと抜かしよったよこのおば

「いくらマスターとはいえその言い草は怒っちゃうわよ?」

「すいませんでしたー!」

俺の心を読んだだと……? 流石は稀代の魔術師といったところか…

…!

「顔に出やすいのよあなた」

「不覚っ!」

膝をつきガクリと項垂れる。そうか……所謂俺はポーカーフェイスだと思っていたが違ったのか……なんとという驚愕の事実……! 立ち上がり、改めてキャストの方を向く。

「ところでキャスト、今の今までどこにいたのさ」

「特にこれと言ってどこにいたというわけでもないのだけれど……そうね、色々と見て回っていたと言えば正解かしら」

悪びれる様子は一切無く、しれっとした表情で言うキャスト。まあ今の姿……私服の状態ならそれほど目立つというわけでもない……わけもないな。

「キャスト……耳、耳」

微妙に……動いてる?

「あら、目立ってたかしら」

「いやそれだけじゃないだろうけど……」

何より美人だからというのはあるだろうが、長く尖った耳なんぞそ

れこそファンタジーの世界じゃないか。んな状態で歩いてたんですかあなたは。

「できれば呆れないで欲しいわね……それはそれとして、私に何か用だったのではないの？」

「ああ、いや用というか探しに来ただけどね？」

「何故？」

いやそんな心底わからないみたいな顔されました……。

「気付いたらいなかったし、その……」

「ふふふ、心配してくれたのかしら？」

からかうかの如くニヤニヤし始めるキャスター。

「別にそういうわけじゃないよ……ああ、心配といえば確かに、キャスターが他人様に迷惑でも掛けないかと心配だったね」

「もう、そこは素直に心配していたと言えればいいじゃないの
言って不服そうに頬を膨らませる。

「凄く心配しました」

「今さらよ」

こんなやり取りをしていたら、隣に佇むセイバーが微妙に顔をひくつかせていた。

「いつまで寸劇のような事をしているのですか」

いい加減痺れを切らしたのか、少々不機嫌そうな声で喋るセイバー。

「あら、いたのねセイバー」

それに対し、今気がましましたと言わんばかりにセイバーを煽るキャスター。あれ？なんでそうなる？

「キャスター、ユウイチに無用な手間を掛けさせておきながらその態度は……」

「ふふん、嫉妬かしらセイバー？」

「ち、違う。私はそのような事を言っているのではない」

「あら、そう？ 無理しなくてもよろしくてよ？」

相性悪いなこのお二方！

「いやもういいから……ああキャスター、別に自由に行動していい

いからさ、12時になったら1階の大きな時計の下に来てよ」

「ええ、わかったわ……ホントは一緒に行こうかしらとも思ったけど、セイバーの目が怖いから今回は遠慮しておくわね」

「なっ!? キヤスター!!!」くすくす笑いながら颯爽と去っていくキヤスター。

「おのれメイガス!」

「なんだかなあ……」

興奮するセイバーをよそに、俺もすたすたと歩き始めた。

「あつ、待って下さいユウイチ!」

「でさあセイバーさん」

「何でしょうか?」

「いつまでここにいろつもりだい?」

キヤスターと別れ、しばし適当にふらふらと歩いていると、セイバーがとある店先で立ち止まった。

「もう少しだけ待って下さいユウイチ」

「いやさ、そう言われてかれこれ30分程待たされてるわけなんだけど」

「も、もう少しだけでいいのです」

視線の先にはデフォルメ化されたライオンらしき何か。非常に可愛らしい作りのライオンくんではあるが、よだれ垂らしてまで見るものかとも思う。そこに視線をキープし続けるセイバーの姿はこれまで可愛らしいと言えよう。一瞬浮かんだ年甲斐もなくという言葉は捨て置いて。そんなセイバーの姿を見た日には、財布の紐も緩むつてなもんである。

「セイバー」

「な、なんででしょうかユウイチ」

「買ってあげようか? そのライオンくん」

「ほ、本当ですかユウイチ!!」

「ユウイチ、ウソツカナイ」

「ありがとうございます!」

尻尾を振るわんこの如く、あほ毛がみよんみよん動いている。なるほど、それはそういう物なのか。

セイバーご所望のライオンくんを購入。ついでにはやてにもうさぎくんを購入……だって買わなかったら拗ねそうじゃない?

時間通り巨大時計の下に戻ると、既に皆集合していたようで、俺とセイバーがラストであった。

「時間通り、だね」

「主を待たせては悪いだろう?」

「別に主って気もしないけどなあ……まあいいや。さて、どこ行くか? せっかくだし、外で食べたいと思うんだ」

と言うと、各々が食べたい物を口々に挙げ始める。和食、洋食、中華にハンバーガーやイタリアンだと? 纏まらないなこんちくしよ。う。

「よっし、んじゃいつちよ後腐れなくじゃんけんと行くこうじゃないか!」

号令一発、皆の目が変わる。本日はある意味特殊な日、そんな今日でなければ外食など滅多にできるものではない。そりゃあ貧乏というわけでもないし、アーチャーや俺が作る食事は言っちゃなんだがケチの付け辛いもんだ……だがしかし、外食となればテンションが違う!己が食への欲望を賭けて、俺を除く全員が構える。海鳴ショッピングモール一階西口時計台下……ここに、第六次聖杯戦争へじゃんけん大会《が開催された……英雄がこそって何をしてるんだ、いやむしろ本物の聖杯戦争もこんくらい平和的にすればよろしいじゃない。

『じゃん、けん、ぼん!!!』

気合いの込められた声が響く。徐々に奇異の視線が集まる事を恥ずかしく思いながら、俺はすすつと一団から距離を置くのだった。

雲一つ見えない夜空。満月が大地を優しく照らす中、俺達は我が家の庭に立っていた。

「では指導を始めますよユウイチ」

「了解」

俺が投影して渡した竹刀を正眼に構え、セイバーが開始を告げる。日中のあほさ加減は成りを潜めて、目の前に立つのは紛れもなく英雄の名に相応しい気を纏う1人の剣士であった。これが夕食時にラッサーやギルガメツシユと唐揚げの取り合いをしていたの同一人物とは誰も思えまい。

「はっ！」

「のわっ!?!」

アーチャーと同じく、いやそれ以上の速さで距離を詰められ、縦一文字に竹刀が振るわれる。突然の事で驚いたが、ギリギリのところまで身を捻ってかわせた。すぐに後ろに跳んで距離を取る。

「集中しなさいユウイチ。その回避能力は誉めて差し上げますが、本気でやらなければ修行にはなりません」

「悪いセイバー」

気を引き締めて、竹刀を構え直す。言い終えたと共に再度セイバーが突進してくる。先程よりもその速度は速い。両断するかとも思われる上段からの一振りになんとか追い付き、竹刀を斜めに受け流す。先程よりもその一撃は重く速いが、大丈夫だ。これならまだ付いて行ける！

「なっ!?!」

受け流した竹刀を腰だめに戻し、セイバーの死角に回って横薙ぎの

一撃を放つ。

「くっ!？」

流されたその竹刀をすぐさま引き戻し、その勢いで俺の剣を弾く。流星はセイバーか。剣を弾くとセイバーは一度俺と距離を取るように後方に跳んだ。

「……素晴らしい動きですユウイチ」

「……獅子は兎を狩るのにも全力を出すと言う」

「何ですかそれは？」

「……子供だからと甘く見るのはよくないって事」

言つと同時に空いた距離を詰める。まだ英霊には届かないが、自身に出せる最速で挑む。

「なるほど、確かにそうですね……貴方をただの子供と見るなど愚かでありましょう」

竹刀を振るう。袈裟懸けの一太刀を軽々と避け、俺が現在視認できるギリギリのレベルの突きが迫る。

「ははっ、本気になってくれたねセイバー!」

「当然です!」

走る勢いのまま倒れ込むように転がって突きを避けたが、顔を上げればセイバーは既に次の剣撃を仕掛けて来ていた。竹刀を構え直し、その一撃を受ける。やはり重いつ!

その細腕から一体どんな要領でこんな馬鹿力が出ているんだか、直撃の瞬間にミシミシと嫌な音をたてた竹刀と共に俺の身体は吹き飛び、庭の木に激突した。

「かふっ」

肺から空気が漏れだし、背中に激しい痛みが広がる。あまりの痛烈さに投影していた竹刀が手からこぼれ落ちた。よくよく見るとヒビまで入っている……ちくしょう馬鹿力め。

「ユ、ユウイチ!!」

やり過ぎたと言わんばかりに青ざめた顔のセイバーが駆けてくるのを眺めながら、俺は薄れ行く意識を手放した……。

エルフ耳とかを妙に弄くりたくなるお年頃（後書き）

「如何でありましたでしょうか？ 久方ぶりに作ったので少々キャラを忘れつつあったのですが、大体こんな感じだったかなと思います。後書きを書くというのは確か初めてだったような気がしますね。まあそれはさておき……という事で、アンケートを取りたいと思います。それほど大したことでもないのですが」

題：本作品に登場する仮面ライダーを今の段階で公表するか否か。

「です。実は最終章の構成は出来つつあるので、登場するライダーは一応決まっています。変身するのは当然主人公なわけですが」

「俺か」

「おや、君は未来の祐一君じゃないか」

「未来と言っても19年ただけだな」

「というところまでと暗に言ってるわけなんだがどうだろう？」

「そこまで書き上げられればいいけどな」

「心配になるような事を言わないでくれたまえよ」

「悪い悪い……」

「というわけで、更新日たる本日より2週間。アンケートを行いたいと思います。回答例としましては『教えてくれ』か『後の楽しみでいい』等。もしくは『作者に任せる』のような意見でお願いいたします」

「じゃあ俺からも一ついいか？」

「どうしました？」

「俺からもアンケートだよ」

題2：今のところ登場するライダーは1人しか決めていないので、他にも仮面ライダーを出して貰いたいなどの意見を募集します。出

すか否かは完全に作者のさじ加減にはなっけてしまいましたが、もし『こんなのはどうだろう?』というような入り口から、詳細に設定等をいただいた場合に関して、真面目に検討したいと思います。

「これも上と同じく期間は2週間でお願したい」

「なるほどなるほど、作者苛めですか」

「いいじゃないかお題を貰うくらい。なにかしらの目標があった方が気合い入るだろ?」

「と言っても結局更新は不定期になりますか」

「……やれやれ」

「さて、祐一君が呆れてしまったところで、そろそろ終わりにしたいと思います」

「ったく……それでは皆さん、また会いましょう」

「会えるのは若い君なんですけどね」

「いちいちうるさいっての……ならとつと話を進めるよな」

「……はっはっは」

作者さささつとフェードアウト。

「逃げたか……しかしまあ、昔の俺はこんなにも平和だったのかあ

……あれ、なんか泣けてきたな……」

主人公、手の甲で目を拭いながらゆっくりと退場。

拍子木がチヨンツとなって幕が降り終。

なんでだろう……眼鏡に心惹かれる。(前書き)

どうも、雷泥です。

例の如くサブタイに深い意味は無いのですが……べ、別に考えても
思い浮かばないわけじゃないんですからねっ！

何はともあれアンケート終了のお知らせです。

結果としましては……まあアンケートの内容に触れていたのは二名
だけでしたからアンケートの意味はあったのかなと思いつつあるの
ですが……とにかくまあ、今後も仮面ライダーは主人公が変身する
までは明かさず、他のライダーはいらぬという方向性で行きたいと
思います。

アンケートに協力して下さった方々、感想を書いて下さる方々、誠
にありがとうございます。

これからも、何卒この『いのちをだいに』をよろしくお願いいた
します………という事で、いつもと変わらないクオリティですが、
本編をご覧ください。

なんでだろう……眼鏡に心惹かれる。

目覚めたら隣にはやてが眠っていた。夢かと思って自分の顔を……
やめよう、二度目だ。

俺が起きたのは、何故か昼前だった。

いつ寝たんだったか……昨晚の修行は確か……セイバーに気持ち良
くぶっ飛ばされて終わったんだな。

記憶にはないがこうしてベッドに横になっていたという事は、誰か
が運んでくれたのだろう。

「おーい、はやてー」

「んっ……んうっ……」

二度三度と体を揺する。

齢6歳にして妙に艶やかな声色を出すとは……はやて、恐ろしい子！

「んあ……あつ、兄ちゃん起きたんやあ」

寝惚け眼を擦りながら、俺を見てふにやりと微笑むはやて。

「おはようはやて」

お返しに俺も笑いながらご挨拶。

ああ、今日は良い日になりそうだ……といつても既に半日程無駄に
してはいるが。

「あら、起きたのね祐」

「んや？ ああおはようキャスター」

「おはようキャスター」

しばしはやてで遊んでいると、水桶にタオルを持ったキャスターが
やって来た。

「なにそれ？」

「貴方のよ？ ちょっと強くぶつけたみたいだし」

「なるほど……うん、大丈夫みたいだ。痛みはないし疲労も取れた、快調そのものだよ」

一応解析して調べてみるが、やはり問題はないようだ。

内臓各器官にも異常無し。背中を打った筈だが、痛みは無い。

「そう、良かった……」

心底安堵したと言わんばかりにふうと息を漏らす。

おや、珍しくキャスターが素直じゃぞ？

いつもはからかってばっかなのに……今回は一応心配してくれてたんだなあ。

「ん、ありがとう」

「あら、珍しく素直ね」

「そりゃあ、いつもより心配してくれてた事くらいはわかるから」

「……そう無自覚なのがちょっと困るわね……やっぱり矯正するべきかしら？」

「へっ？」

「なんでもないわよ？」

それより、と置いてキャスターは続ける。

「セイバーが予想以上にダメージ受けてるみたいよ？」

「ありゃ、確かに責任感のあるセイバーの事だからそういうのもあるかもしれないと思ってたけど……」

凹んだかセイバーさんや。

「とりあえず起きるよ」

体を起こしてベッドを降りる。はやてはキャスターが車椅子を持ってきてくれていたのでそれに乗せた。

居間に出ると、見事に落ち込んだ様子のセイバーがどよんとした空気を醸し出していた。

そのただならぬ気配に気圧されたのか、サーヴァント達も居心地悪そうに台所から様子を見ているようだ。

あのギルガメッシュですらオロオロとしている様は中々見れない光

景でもある。

……つてかちよつと笑えるな。

とはいえ、この状況が良しとなるわけもない。俺は一人セイバーに歩み寄る。

「やぁおはようセイバー」

何の気なしに朝の挨拶。すると今気付いたかの如く顔を上げ、その表情は今にも泣きそうなくらいに歪んだ。

「ユ……ユウイチ……」

「やぁおはようセイバー」

目尻にうつすら涙を浮かべたセイバーを見ていると、さらに虐めてみたい欲求に駆られた。

落ち着け、オレ。

「私は……私は……」

「やぁおはようセイバー」

三度目の挨拶と共にセイバーの額にデコピンをかます。ベチンという少々痛そうな音を立て、セイバーの顔が若干後ろに仰け反る。

「あ……あ……な、なにをするのですかユウイチ」

「朝はおはようだよセイバー」

「で、ですが既に昼前で……」

「朝はおはようだよセイバー」

「……おはよう、ございます……?」

「はいよくできました」

頭を撫でてやると、ひたすらにセイバーが困った顔をしていた。

「あの……ユウイチ?」

「この通り、俺は元気でございますです。気に病むなかれセイバー
ちん」

「ですが……加減もせずにふき飛ばしてしまったのは……」

やはり泣きそうな顔でこちらを見つめるセイバー。

そんな謝られる事でもないと思うんだけどなぁ……やはりサーヴァ

ントとマスターの関係っていつか騎士としてひたすらに謝らなくてはならない事なんだろうか？

「俺がまだまだだったってだけさ、今度はちゃんと気絶しないように頑張るからさ」

「うう……ありがとうございます」

「さあてこの話は終わりだ、俺は腹が減ったでござる。ちゃちゃちゃっと昼飯を作っちまうでござる」

セイバーの頭をくしゃっとひと撫でして、俺は台所に向かった。

「おー……布団がいっぱいコレクション」

「なんだそりゃ」

「特に意味はないよ」

昼飯に炒飯を食した直後、家の呼び鈴が鳴った。

玄関先にトラックが来ていて、宅配業者のお兄さんからランサーとバーサーカーが計8つの布団セットを受け取り、それを家に運んでいく。

受け取り印を押して、終了。走り行くトラックを見送って、家に戻る。

これで新たに、我が家の布団が増えたわけである。

真空パックから布団を取り出し、畳んで行く。

俺1人では大変だろうとライダーが手伝ってくれた（こういう時に役立つ紅い主夫はどうか行っていた）んだが……窓から射し込む陽の光に当てられながら、布団を綺麗に畳んでいるライダーの姿は、なんとというかこう……嫁さんにしたくなった。思わず求婚しそうになった事は内緒である。

途中ではやてとキャスターも乱入してきて、我が妹がふかふかの布

団に顔を埋めて幸せそうにしていたのには和んだ。が、何も寝る事はないだろうに……。

「さて、今日の夕飯だが……何を作ろうか？」

夕暮れ時、そろそろ夕飯の準備をせねばならんという時に、アーチャーがそんなことを尋ねてきた。

「そうだな……中華なんてどうだろう？ 中華はお腹に残るしさ、例え我が家の大喰らい共であろうとそう多くは入らないんじゃないか？」

俺の応答にしばらく眉を寄せて考えていたが、

「ふむ……よし、では今晚は中華にしよう。そうと決まれば足りない食材の補充だ、行くぞ祐一」

そう言うとアーチャーは買い物袋を持ち、俺の手を引く。

「その前に財布だろうに……」

「おっと……すまん」

「このうっかりさんめ」

「それは不名誉な称号だ」

居間に戻って財布を取り出し、テーブルの上でカードゲームをやっているはやて達に告げる。

「はやて、俺ちよつとアーチャーと一緒に夕飯の買い物行ってくるな？」

「うんわかった……そうはいかんでキャスター！ 畏カード発動、

『聖なるバリア・ミラーフォース』や！」

「くっ、警戒しておくべきだったわね……私はカードを二枚セットしてターンエンドよ」

ああ……そういえばこの世界って遊 王はあつたんだよな……。

「んじゃ、行ってくるよ」

「行つてらっしゃい兄ちゃん。さあキャスター、こつから私のターンやでえ！」

はやての勇む声を背にしながら、俺は家を出た。

買い物途中、いつぞやにガン付けられたメイドさんがいたのだが、なんとなく俺に対する印象は悪かったような気がしたので避けてしまった。

そういえばあの後どうなったのだろうか……？女の子は大丈夫だったのだろうか？

疑念は消えないが、確かめる術は俺には無い。あの時の感覚を思い出してちよつと沈んだ……。

アーチャーに心配されたから余計にである。

月の光が幻想的な夜。

胃に納められた料理もいい具合に消化したころ、アーチャーに連れられて中庭に出た。

どうやら今日は弓の稽古を付けてくれるらしい。

「では、まずは引き方から教えようか」

「ん、それは大丈夫かな」

「なに？」

「それは知ってるから」

実は言うと、生前の高校時代は弓道もやっていたのだ。多少プランクはあるが……それ自体は体が憶えている、はず。

「ほう……じゃあ早速射ってもらおうか？」

「アーチャー先生顔が怖いです」

「正直、コレでも君に一本取られたら私の立つ瀬がない……だが、一切手を抜く事は許さんぞ？もし手を抜いたりしたら……わかっているな？」

「恐っ」

正直街中で見かけたら思わずその場で回れ右して帰りたくなっちゃうくらいに鬼気迫る表情なんですけど。

心を静めて、弓を構える。矢を弦につがえ、引く。力を弛め、手を離すと……矢はアーチャーの作り出した的に向かって飛び……刺さることなく落ちた。

「……筋力が足りないようだな」

「……ちくせう小学生ボディめ」

無表情を装っているが、微妙に口端がひくついてんだよアーチャーさんや……そんなに嬉しいかこの野郎!!

何本か放ってみるも、変わらず届く前に矢は落ちる。しかも毎度毎度ギリギリの所で落ちるもんだから、とうとうアーチャーが吹き出しやがったので……。

「投影開始!」

「なっ!? ちょっと待て祐一それはっ!!」

手に持つ剣は黄金に輝く聖剣。

振りかぶって、放っ!!

「勝利すべき黄金の剣!!」
カリバーン

「馬鹿やめっ……!!」

俺の初めての相手（投影の餌食）は、紅い主夫だった。何故か敵ではなく味方だったのは……ちょっとイラッとしたからである。

なんでだろう……眼鏡に心惹かれる。(後書き)

今日の戦績。

VSアーチャー。

決まり手：投影、勝利すべき黄金の剣。カリバーン

不穏な気配と不安な未来（前書き）

どうも、雷泥です。

珍しく真面目っぽいサブタイですが、内容は感想で指摘された物です
すね……。

いやあ、遅筆ですみません。

ところで、いつの間にやらPV100000にユニーク10000
越えと、数字が凄い事になっていて、私はガクブルしています。

なんと嬉しい事でしょうか……今一度読んで下さる皆様には多大
なる感謝を。

まあ語ることも特にないので……本編をどうぞ。

不穏な気配と不安な未来

はてさて、どうしてこんな状況になっているのだろうか？

目の前には敵意溢れる眼差しの外人が2人。先程からこちらに向けてただならぬ気配を漂わせて来ている。

うむ……何はともあれ、あまり良い関係にはなれそうもないかな。

「なあランサー？」

「なんだ？」

「これは俺が対処しなきゃ駄目かな？」

「仕方ねえだろ……そこにお前のツレがいんだしよ
いつものように。」

今日はランサーを鞆に入れて、道すがら高町さんと合流して、元気に学校へ行くところであつた。

がしかし、そこな外人さん2名に道を塞がれて、どうにもこうにも進めないでいる。

「お前……何者だ」

かなりシリアスな口調で訊かれたのだが……意味がわからないし、シールギャグを狙ったにしても笑えない、というか物凄く迷惑である。

明らかに俺を睨んで尋ねている以上、用があるのは俺の方……なんだろうが、

「や……やがみくん……」

きつい口調と雰囲気にもまれて高町さんが震えているのだ。俺の制服の裾を掴んでいるので、その震えが伝わってくる。

正直、不謹慎ではあるが可愛く思えたので俺には緊張感とか無いのかと笑えてきたが、やはりこの状況は好くはない。

「日本語が出来るなら……学校に遅刻するから退いて貰いたいんだけど」

「質問に答える」

質問に答えなければ動く事はない……か。

「……用があるのは俺、で良いんだよな」

「そつだ。お前は何者だ」

しかしこの2人よく似ているなあ……中々の美人さんなのだが、険しい表情でそれが台無しだ。

「……質問に答えるのは良いんだけどさ、ただの小学生を脅して何が面白いわけ？」

「ただの小学生だと？」

俺の言い分に何故か納得いかないような顔をする二人。

『まあただの小学生じゃあねえよなあ』

『うるさいよランサー』

「そんな筈がない」

「ああそつ……まあ仮に、貴女方が小学生に脅しを掛けてこの娘のように恐がる姿を見て悦に入る嗜虐的幼児性愛者なのだとしたら、この状況にも一応納得はするよ？ 正直お近づきになりたくないけど」

「このガキっ！！」

俺の言葉を聞いて、先程から質問をしてきていた、どちらかというと落ち着きのなさそうな女性が怒鳴った。それを聞いた高町さんがまたビクツと大きく震える。

「こつちが下手に出てれば……いい気になって調子乗るな！」

そちらさんがいつ下手に出たのか問いたい。どちらかと言えば高圧的だっただろうがとつっこみたい。

「……ひっ、ひぐっ……」

「あっ……」

滅茶苦茶な相手の言い草に、どこかピリピリとした空気に耐えきれなくなったのか、高町さんが泣き出してしまった。

この状況の原因は俺だし、巻き込んでしまったのも俺だし、煽ったのも俺だ。

うわもつなにやってんだ俺。

「あー……ごめんごめん、あのお姉さん恐かったよね……」
抱き寄せて、高町さんの頭を撫でる。

涙で制服がべちゃべちゃになりそうな気もしたが、仕方ない仕方ない。

止まらない嗚咽が治まるように、背中を優しく擦ってあげる。しばらく擦ってやると、泣き止んだようなので手を止める。

「ううう……やあー……」

離れたくないのか、俺の腕を掴んでいやいやと首を振る。

そんなこと言われても……いやおいしいけどさ。

「はあ、仕方ない……ランサー、頼めるかな？」

「こいつらどうにかしろってのか？」

「うんまあ……適当にあしらってくれないかな？俺はこの子連れて学校行くよ……」

「そこまで行けばいくらなんでも追ってこないでし

よ」

「へえへえ……わかったよ、俺もこいつら片付けたら追うからよ」

「ありがとう……って、ランサー学校の場所わかるっけ？」

「お前の反応追えばいいんだろ？ どうせあのアーチャーもいるしな、迷ったりはしねえよ」

「そっか……んじゃ今ならこの子は見てないし、鞆からゆっくり出て誤魔化しながらあの道から出てきてくれ」

「あいよ」

「ごそごそと俺の鞆から小さい音がし、ランサーが出たのを確認した。

「無視してんなガキー！」

「口悪いなあ……そんなんじゃ男寄って来ないんじゃない？」

「大きなお世話だ！！」

凶星か。

顔が真っ赤になってますよお姉さん。

「落ち着きなさいロツテ、敵に隙を見せてはいけません」

ここにきて初めて喋ったもう1人の外人。

余りにも喋らないので、てっきりそういうアレかと思ったのだが：

…。

「よう、何してんだ祐一？」

後ろの方から、中々ナイスな演技力でランサーがやってきた。

「なっ、お前は！！！」

ランサーの顔に見覚えでもあったのか、目の前のうるさい方が驚きの声を上げる。

「やあランサー」

「お前もう学校行ってたんじゃねえのかよ？」

凄じぞランサー、物凄く自然だ！演技派ランサーの称号が与えられます。

「いや実はさ、よくわからないお姉さん方に絡まれて困ってたんだよ……こりゃ走っても遅刻かな」

「おいおい……仕方ねえ、お前らは学校行け。俺がなんとかすつからよ」

ランサーがしつしと手を振り、俺はそれに頷く。

「ありがとランサー、んじゃ行こう高町さん」

「ふえっ、あ！ ありがとございました！！！」

漸く復活して深々とお辞儀をする高町さんの手を引き、追われないように走る。

「あっ、待てこの！！！」

ロツテとか呼ばれた方が追おうとしたが、ランサーに遮られ動けないうつだったのを見届けながら、俺と高町さんはその場を後にした。

……。

「よう、来たぜ」

「おかえり、ランサー」
体育終わりの休み時間。

クラスの連中がまだ遊び続けている中、1人教室にてなんとなくしに窓を開けて涼んでいる（別に友達がいなくてかじやないんだからねっ！）と、眼前にいきなりランサーが現れた。

正直、心臓が悪いです。

「お前に言われた通り適にあしらつといてやったぜ？」

「お疲れさん、誰かに見られるとヤバいから小型化するよ」

「あいよ……だが、随分と妙なもんだったぜありゃあ」

ランサーを小型化し、誰かに見られないようにそつと教室に招き入れる。

「お前らが行つたらすぐ攻撃してきやがってな？ 仕方ねえから適当に避けてたんだがよ……俺に勝てねえとわかつたらあつさり消えた」

ミニランサーを鞆に入れながら念話で続ける。

「消えた？」

「いきなり陣みたいのが出てきてな……そんな中に入って消えちまつたよ」

ランサーの話からすると、どうにもあの2人は普通じゃなさそうだな
「どうにもきな臭え……ちょっとばかし、気を付けた方がいいかもな……」

「やっぱり普通じゃなさそうかい？」

「少なくとも、何かしらお前に用があつたのは確実だろうよ……歓迎できないさそうな用がな」

「……力量は？」

「……ざつとだが、お前以上俺以下つとこだな。今のお前じゃ勝

てねえだろっよ」

きっぱり言い捨てるランサー。

「敵しいようだが、下手にこうすれば勝てるかもなと言われるよりよっぽど良い。」

「まあ、俺達が代わる代わる護衛に付くつても、案外無駄ってわけじゃなかったかもな」

「そうだねえ……結局遅刻扱いだっただけども」

結局俺達は始業のベルに間に合わなかったのである。

まあ途中で走り疲れた高町嬢をおぶったせいでもあるのだが……。

「くっそう、地味に皆勤狙ってたのに……あいつら今度会ったらただじゃおかない……勝てない言われたけど。」

「そいつは俺のせいじゃねえよ、文句ならあの嬢ちゃん達に言え」
嬢ちゃん……いや嬢ちゃんって歳でもなさそうだけどな……。

「まあとにかく、今日は俺がお前の修行を見てやるよ」

「んじゃあ槍か棒の修行か……」今日も俺の体が悲鳴を上げそうである。

「ただ、大変だよやがみくん！」

「おうっ、誰かと思えば……誰だ？」

「ひどっ!？」

珍しく高町嬢が寄ってこない静かな休み時間。そんな数少ない寛ぎの時間をぶち壊してくれたのは、名前も知らない少年君だった。

いや俺も少年なんだけどさ。

「いやちよつと名前があやふやでさ……ああ、大串君か」

「誰だよっ!？」竹中誠だよっ、クラスメイトの顔と名前くらいおぼえといてよ!! ってそうじゃないんだよ!!」

忙しい奴だな……。

「それでどうしたのさ大串君」

「だから大串って誰！ それよりもいつも君と一緒にいるのはちやんがアリサさんとケンカしてるんだよ！！」

「はあ……あの高町嬢があねえ……ところでアリサって誰？」

「クラスメイトだろ！？ アリサ・バニングスさんだよ！！」

アリサ・バニングさんねえ……熱そうな名前だ。

「……やっぱり知らないな」

「うっ……皆の顔と名前くらいは知るところよ……」

「苦手なんだよ……」

本当は面倒なだけなんだが。

「で、その2人が喧嘩してるからどうしろと？」

「え……と、止めてよ……」

「ふーん……まあ、他でもない大串君の頼みだし、引き受けてやりましょうかい」

「だから大串って誰なんだよお！！」

忙しい大串君を案内人に、2人が喧嘩しているという場所に向かう。

と言っても教室を出てすぐの廊下だったんだが……。

「謝って！！」

「何なのよあんた！！」

なんという女の戦い。

互いの頬をひつ叩き合う高町嬢にバニング嬢。その2人を泣きながら見ているのは……誰ぞ？

「大串君や、あそこの子は誰だ？」

「大串じゃない！ あれは同じクラスの月村すずかさんだよっていうか本気で覚えてないんだね……」

脳ミソの容量が結構いっぱいいなもんでね……。

「ほ、ほら、止めなくちゃ！」

「ふーむ……」

大串君に背中を押され、修羅場に突撃。2人のバトルを無視して通り過ぎ、しゃがみこんで泣いている月村嬢の所へ。

「やあどうも月村さん」

「……あっ……」

目線を合わせる為に俺も膝を折る。

はて……近くで見てみればどこかで見たような顔だ……。

「どうして泣いているんだ？」

「……アリサちゃん、んが、私のカチューシャを、とったの……」

「うんうんそれで？」

月村嬢を落ち着かせるべく頭を撫でる。

「それを、見てたなのはちゃんが、怒ってくれた、の……」

どうやら事の顛末はそういうことらしい。

「そうかあ……」

友達の為に怒ってるのか……根性あるじゃないか高町嬢。

「で、君はどうしたい？」

「私……？」

「そ、君は……このままでいいのか？ 2人が喧嘩するのを見てるだけで、いいのか？」

「……良くない……ケンカなんか、してほしくない」

「じゃあ、どうする？」

彼女は涙を拭い、決意を秘めた顔で立ち上がった。それに倣い、俺も立つ。

そして大きく息を吸い込み、今言い争いを続ける少女らに向けて、言った。

「もうやめてっ……!」

月村嬢の大声に驚いたのか、叩き合っていたその手を止める2人。ポケットとした顔でこちらを見つめて硬直していた。

「なのはちゃんもアリサちゃんもケンカなんかしないで!」

その一言が終わると後が無くなり、チラと横目で見ると、すでに顔真っ赤で今にも再び泣きそうであった。

「喧嘩は良くないな御二人さん」

「な、なによあんたまで……」

はて、この少女どこかで……まあいいか。

「聞けば、事の発端はそんな少女が月村嬢にいちわるをしたことが始まりらしいじゃないか」

「うっ……」

俺の確認に、居心地悪そうに表情を歪ませるバーニング嬢。
なるほどどうやら、悪い事をしたという意識はあるらしい。望み有り、だな。

「悪いと思つたならば、謝るのが筋とは思っただけだね？　そこら

辺、高町さんはどう？」

「……なのはもちやんと謝ってほしいの」

「うっ……」

罪悪感が募るのか、次第に眉尻が下がっていく。すでに涙目でもある。

仕方なしに、月村嬢の手を取って歩く。

「えっ？」

バーニング嬢の前まで連れて行き、そこで立ち止まる。

「さて、まずは謝ってしましましょうか？」

「うっ……」

「悪い事したらなんて言うのかくらい、君は知ってるだろ？　だつて、本当の君は……優しい子だもんな？」

出来る限り優しく語り掛けるとバーニング嬢はわかってくれたらしく、顔を上げた。

「……ごめん、なさい」

「……うん、いいよ」

「よしっ、仲直りの握手だ」

バーニング嬢の手を取り、月村嬢の手と重ねる。

2人は重なる手を握り合い、はにかみながら笑い出した。

「うんうん、良い傾向だ……っと、まだ仕事があったな」

一度離れて高町嬢の手を握り、2人の前に連れて来る。高町嬢はキョトンとしているが、まだ解決ではないと俺は考えている。

「さて、高町さんも謝んなくちゃな？」

「ふえっ？」

「月村さんの為とは言え、叩いちゃっただろ？」

「あっ……うん」

「じゃあ、後はわかるよね？」

高町嬢はバーニング嬢に向き直ると、叩いてしまった事に対して謝った。するとバーニング嬢も、叩き返した事を謝りだし、お互い様という事で片が付いた。

笑い合う彼女らを見て、きっと良い友人関係が築けるだろうと一安心。俺はそんな彼女らを置いて、教室へと戻った。

放課、鞆を持って教室を出る。その際、高町嬢に挨拶することも忘れない。し忘れるとへこむ、翌日ぶつぶつと呪詛を言うくらい。

「じゃあね、高町さん」

「あっ……やや、やがみくん」

「ん……？ なんだい？」

「きよ、今日なのはと一緒に……帰らない？」

もぢもぢしながらそんな事を聞く少女。

正直……溜まりません。

がしかし、残念ながら今日はちょっと日が悪い。

「悪いけど……今日はちよっとね」

「そ、そうなんだ……」

こちらとしてはそんな残念がらないでもらいたいのだが……。

「うーん……明日じゃ、ダメかな？」

「ふえっ！？」

「今日はちょっと、近場のスーパーで大特価がいつぱい出るからさ……明日なら一緒に帰るのも問題ないけど、どうかな？」
「ほほほっ、本当なの!？」
「いや嘘は言わないけど……」
「あ、明日でいいよっ!! 明日がいいよっ!! 約束なのっ!!」
「ああうん……約束ね。それじゃ急ぐから、またね!」
目一杯喜んでいる高町嬢に手を振り、今度こそ教室を出る。
「あっ、バイバイなのやがみくん!!」
高町嬢の声を背に、走り出す。
俺達の特売はまだ始まったばかりだ!!

「とまあ、打ち切りみたいなフェードアウトなんだが、そんなことはないので悪しからず」

「何言つてんだ祐一」

「何でもない」

「しかしまあ、やはり多いな……人が」

大きさを戻したランサー、そして仕事終わりのアーチャーとともに『スーパー紅桜』にやって来たのである。

紅桜で……すんごい名前だよな。

「まあ、月一の大特価市らしいしな……やたら人がいるのは仕方ないんじゃない？」

「それもそうか……では行くぞ2人共」

「どー考えても死に行くみたいなものだよな……こりゃ」

ランサーのばやきを聞きながら、俺達は死地へと赴いた。

「終わったか……」

「終わったな……」

「疲れた……」

両手に大量の買い物袋を抱え、スーパー紅桜を出てきた俺達3人。

「だがしかし、得る物も大きかったな……」

「まあ……だいぶ買ったけどよ」

その代わりに減ったと言えば減ったけどね、諭吉さんが3枚程。

「む……？」

「ん、どうしたのさアーチャー？」

早速この収穫を持って家に向かおうと歩き始めたのだが、アーチャーが突如立ち止まり通りの一点を見据えていた。

「いや、先程からこちらを見ている……メイドが居てな」

メイド？いや、メイド？

「あれか？」

ランサーも見つけたようで訝しげにそちらを見ている。

つてかランサーってばメイドと言われてわかるんですかい？

「どこだよ」

「ああ……お前小さいから見えねえのか」

「小さい言うな、こちとら小学生だ」

「らしくない小学生だな」

うるさい。そう言う前に、2人が更に妙な雰囲気醸し出した。

「近付いてくるな……ランサーの言っていた怪しげな2人と同類か？」

「さあな……まああの2人じゃあねえみたいだけだよ」

ん？そういえばメイドさんて……あつ。

「急いで帰ろう2人共」

「む、どうした祐一？」

「ライダーと一緒にいた時のメイドさんかも知れん……あまり好印象じゃないっぽいし……」

「ああ……んじゃ帰るか」

「ふむ……まあ祐一がそう言うのだ、そうするとしよう」

2人が同意してくれたので、さっさと移動。しばし立ち止まっていたその場所から逃げるように、俺達は家に向かった。

「さあてと、飯食う前にサクツと修行終わらせてやるよ」

「いやそんなあつさり済まされても困るんだけどさ」

食事前だが、ランサーはより動いてからの方が食う飯もうまいとのこと、俺も庭に連れ出された。

ただの棒きれを投影し、ランサーに渡す。

そして自分の物も投影。強化もかけているので、振っただけで折れるとかはない……と思う。

「ホレ、構えな」

ランサーが棒を構え、促す。

俺も同じように構え、跳んだ。

「でやつ!!」

槍の基本は突く、斬る、薙ぐ、叩く、弾く、流すだと思っている。

ランサーの体を見ながら、鳩尾付近を狙って棒を突き入れる。

それをかわされ、大きく振られたランサーの棒が迫ってくる。

右から来る大振りの一撃を、しゃがみ込み自身の棒を斜めに立てる事で受け流す。

「付いて来れんのかあ!!」

「意地でもやるさ!!」

ランサーの咆哮に答え、棒を回す。瞬時にバックステップで避けたランサーは、後ろに下がった分助走を付けて速くなる。

「おらよっ!!」

身長差から、必然的にランサーの狙いは下になる。

一度たりとも瞬きを許さない怒涛の突きが何度も繰り出される。

避け、弾いては俺も果敢に攻める。簡単に弾かれるが、弾かれた勢いで棒を回して叩き付ける。

ランサーはそれを棒の先で絡めて弾いた。

次第にランサーもその速度を上げて行き、段々俺も限界が近付いてきた。

もう既に受け手に回るしかなくなっている。ランサーの攻撃が辛うじて見えている程度だ。

やがて、受け切れなくなり……。

「せえいつ!!」

ランサーの掬い上げるような一閃で、俺の手から武器が離れた。

「こいつで終いだな……」

「うへっ、流石にランサーは速いな……受けるのがやっとだったぜ」

「はっ、にしたって大したもんだあな。将来てめえは化ける、間違いないねえよ」

実に嬉しい事を言ってくれる。

「まっ、今日んところはここまでだな。飯食うぞ飯」

「へえへえ」

そう言つて棒を放り投げるランサー。俺は投影を消し、家に戻るその背中を追った。

「祐一、ちよつといいかしら？」

一家団欒夕食を済ませ、ランサーとの風呂から上がった俺を呼び止めたのは、真剣な面持ちのキャスターだった。

「どうしたのさ、随分と似合わない顔してるよ？」

「あら、私が真剣な顔してちゃ駄目かしら？」

「いやあ……キヤスターは綺麗だし、どんな表情をしても良いんだけど……あまりそういう恐い顔にはなって欲しくないなって思っただけ」

すると彼女は少しだけ困った顔をしてから、すぐにまた表情を引き締めた。

「まったくあなたは……でもちょっと真面目な話なのよ、あまり臆抜けた顔はしていられなさそうな、ね」

付いてきてちようだいと言われ、連れて来られたのははやての部屋。そして彼女は大量の本が詰め込まれた妹の本棚の中から、一冊の本を取り出した。

「これ、何かわかるかしら？」

「……“視る”って事？」

「本当に頭の良いマスターで嬉しいわ」

見た目は茶色いカバールの何の変哲もないただの本だ。結構分厚く作られていて、表紙に十字架のようなマークがある以外はこれといって挙げるべき点もない……そう、見た目は。

では“視る”と……なるほど、この本は異常だ。

「魔力の塊か……」

「そう、内包してる魔力はともかくとして、これは魔導具の類いよ。しかも高度に発達した技術によって造られた、ね」

「確かにかなり複雑に出来てはいたけど……」

キヤスターは更に続ける。

「この本、この私をもってしても判明し切らないのよ……そして、わかった事は2つだけ」

「……何さ？」

「この本が微弱ながら日々魔力を溜め込んで行っている事。そして魔力を溜めて行く事が、はやての体と何らかの関係性がある事よ」

「なっ……!？」

キャスターの放った言葉は、俺の心を抉った。

「一応、私の宝具でその繋がりや断ち切る事は出来るわ。けれど、その結果何が起きるかはまだわからない……迂闊に手は出せない状況よ」

「それじゃはやては……」

「いずれは……」

言葉にされなくとも、その意図するところはわかる。

このままなにもしなければはやては……死ぬ可能性が高い。

「今日襲ってきた2人……もしかしてこれが関係してるのか？」

夕食の席で、はやてには暈しながら今朝の話はしておいた。

「かも知れないわ……ランサーの話では、その2人は見た事のない陣を展開して逃げたと言っていたわね」

「ああ」

「私達の魔術とは根本から違うと考えた方が良いのかもしれないわ

……」

「世界が違うせいかな……」

「そいつらを捕まえて知ってる事を洗いざらい吐かせた方が手っ取り早く済むんでしょうけど……引き際の良さから考えて、あまり容易くはいかないでしょうね……」「じゃあ、はやては……」

キャスターはふと笑って、俺を抱き締めた。

「大丈夫よ……私が必ずこの本の仕組みを解き明かすわ。そしたら貴方の大事な妹は、助けてみせるから……安心なさい」

「うん……」

うわいい匂いが……。

「ふふふ……」

「って恥ずかしいんだけどこれ」

「あら、いいじゃない？ たまには甘えてくれても私は構わないわよ？」

「いや……あの……恥ずかしいんで遠慮したい……」

「ふふっ、さっきの貴方……ちょっと泣きそうになって、思わず

抱き締めたくなくなったくらい可愛かったのよ？」

「し……知らんっ」

抵抗虚しく、結局俺はキャスターのなすがまま、10分程抱きしめられていた……。

その後何故かやって来たライダーにも同じように抱きしめられ、恥ずかしさで死にたいと思ったのは、後にも先にもこの時だけだと思いたい……。

2人の胸の柔らかな感触を思い出してもややもやした、そんな6歳の夜……。

難しい事は考えずにシンプルに行こう（前書き）

どうも、雷泥です。

今回はだいぶ時間を取ってしまいました。
とはいえクオリティはいつもと変わらないですけどね。

世の中ワールドカップで盛り上がってますが、何も日曜朝の楽しみを潰す事はないんじゃないかと思えます。

か、勘違いしないでよね！

べっ、別にそれでもモチベーション上がらなかったわけじゃないんだから！

……シンデレラっことは虚しい。

ではでは、どひびぞ。

難しい事は考えずにシンプルに行こう

随分、暖かいなと思いい目を開ける。なるほど、天気が良いのか。

暖かい陽の光がカーテンの隙間から射し込み、窓を開け放てば一日の始まりを告げるかの如く爽やかな風が入る。まさに絵に描いたかのような目覚めの朝。体の調子も良好だし、今日は良い日になりそうだ。

ベッドから身を起こした俺が最初に見たものは、当然のようにすぴよすぴよ隣で眠る妹の姿であった。

「……幸せそうな顔してんなあ全く」

何となしに気持ち良さそうなゆるゆるの顔で眠るはやての頬を引っ張ってみる。

「うーん……兄ちゃん、あかんよそこはあ……」

「どんな夢見てるんだ一体」

むにむにと頬を弄っている、随分な寝言を言い出すはやて。にやける辺りろくなもんじゃないだろうけどな。

「起きる祐一、朝食だ……っと起きていたか」

「おはようアーチャー」

はやてをアーチャーに任せ、顔を荒いに洗面所へと向かった……。

「おはようやがみくんなの!」

「ああ……おはよう高町さん」

いつものように高町嬢と合流して通学路を歩く。

何故か彼女はご機嫌な様子で、今日にはっこり笑顔も3割増といったところだ。何か良いことでもあったのか、もしくはこれから何かあるのか。気になるところではある。

ところでなのって口癖なんだろうか？

『これが噂の貴方の彼女かしら？』

『キャスターまでそれを言いますか……ただの友達だってば』

『あら、隠さなくてもいいじゃない』

可笑しそうに笑うキャスターを無視し、高町嬢に意識を戻すと実に嬉しそうに笑いながら、俺に話し掛けてくる。

「それでねそれでね？ あっ、アリサちゃんとすずかちゃんなの！」

「ん……誰？」

高町嬢のお兄さんはシスコンだという中々興味深い話を中断し、彼女は前方を見て叫んだ。

「アリサちゃんすずかちゃんおはよーなの！」

前方を歩く2人の少女もこちらに気付いたのか、朗らかに笑いながらこっちを向いた。

「おっはよ、なのは」

「おはようなのはちゃん」

どうやら俺は仲間外れらしい。

1人道の隅で泣こうかな……。

「あっ……あんたもやっぱり一緒だったんだ……」

「いちや悪かったかな？」

「別にそんなこと言っていないじゃない」

俺の問いに金髪幼女が反発する。

はてさて、俺はこの幼女をどこかで見たような気がする……一体どこでだろうか。

そっいえば隣の黒髪幼女も……はて。

「けんかはダメだよアリサちゃん？」

喧嘩……？

「わかってるわよ……ただその、ちょっとこいつが……」
喧嘩……喧嘩……。

「ああ、昨日のか!」

「うわたあつ!?!」

ポンと拳で手を叩く。

なんだか世紀末な世界で胸に傷を持った救世主が叫びそうな変な声が聴こえた気もするがまあいい。

「いきなり何なのよ!?!」

「いや、思い出したただだよ。昨日の喧嘩の月村さんに、バーニングさんだろっ?」

「バつ……!?!?」

バーニングさんが顔を真つ赤にした後、高町嬢がなにやら慌てた様子で俺の服を引っ張った。

「やがみくんやがみくん、バーニングじゃなくてアリサ・バニングスちゃんなの!」

「あれ? 間違ったか、すまないカニングさん」

「違うわよ!」

「カ、カニングガムじゃなくてバニングスだよ八神くん……」
今度は月村嬢が訂正する。

どうでもいいが服を引っ張るのはやめていただきたい。

「ああマスタングさんね、重ね重ね申し訳ない。ところで発火能力はあるのかい?」

「あるわけあるか! 一体あんたどうゆう耳してんのよ! バニングスって言うてんでしょ!」

「イノベイダージョークだよバニングスさん」

「イノベイダーって何よー!?!」

頭を抱えて天を仰ぐバニングス嬢。

素晴らしいツッコミだ……将来有望だな。

「うん、君にはツッコミストの称号をあげよう」

「うっさいわボケエ!?!」

「ア、アリサちゃん落ち着いて……」

「こいつ、こいつうつー!!」

「やあがあみいくうん……?」

興奮するバニングス嬢を月村嬢が羽交い締めにして抑え、高町嬢が据わった目で俺ににじり寄ってくる。

「じよ、冗談が過ぎたな……すまないバニングスさん」

「くっ……ハアツハア……」

「気が済まなければ罰でもなんでも受けよう」

俺の提案を聴いたバニングス嬢は、なにやら考え込み出した。
まさかマジで罰とか来るのか?

「だったら……私を、名前で呼びなさい」

「なん……だと……?」

「……バ、バニングスじゃ長いでしょ? ……だからその、アリサって呼びなさい」

頬を赤らめながら名前で呼ぶように命令するバニングス嬢。

正直……たまりmいやそうじゃなくて。

「それは……罰なのか?」

「えっと……お願いかしら?」

「ふむ……まあいいか。では今後ともよろしくなアリサ」

「う、うん……よろしく……」

バニングス改めアリサ嬢と握手を交わす。

ふにふにしてお柔らかなあ等と思っていると、今度は月村嬢が近寄ってきた。

「き、昨日と……この間はありがとう……月村すずかです、すずか
って呼んでくれると嬉しいな……」

「ん、礼には及ばない……ってこの間?」

「憶えて……ないかな?」

紫がかつた黒髪を揺らしながら、月村嬢は困ったように笑う。

はて、俺はこの子をどこかで……ああ、思い出した。

「君とはもう会ってたんだっただな、俺」

「よかった、憶えててくれた……」

「まあ……大丈夫だったか？」

「うん……あの時はごめんなさい、その……」

非常に申し訳なさそうに頭を下げるすずか嬢。

恐らく、あのメイドさんの事だろう。昨日だって俺を警戒してたに違いないのだ。

「気にすんな、誰にだって間違いはあるさ」

「でも……」

「良いつて、別に実害があったわけじゃないしな」

「うん、ありがとう……」

すずか嬢の頭をクシヤリと一撫でし、アリサ嬢を見る。

「犬は元気か？」

「あ……う、うん！」

突然の方向転換に驚いたようだが、質問の意味だけはわかったらしい。

そういえばこのアリサは先日河川敷にて子犬相手にオロオロしていた少女であった。

という彼女ら2人と、俺はそれなりの接触をしていたのだ。なんという偶然か。

「そうか……よかったな」

「あんた……憶えてたのね」

「君までその台詞か」

「だって……」

アリサの言葉を繋ぐようにすずかが言う。

「八神君、学校で会っても無視するんだもん……それに」

「それに？」

「話しかけ辛い雰囲気してたから……」

そんなにか、と高町さんに問う。

「やがみくんはそんな事ないの！ いつつもつまんなそうにしてるけどちゃんと話しかけたら返してくれるよー！」

元気一番、という言葉が似合いそうなお答えがどこか可笑しくて、少し笑ってしまった。

「あーっ、どうして笑うのやがみくん！」

「ごめんごめん、なんかツボにはまっちゃって」

「つぼ？」

「ああ、アレは良い物だ」

「意味が違うよ八神君」

「むしろ意味がわかる君に驚きだよすずか」

「お、お姉ちゃんの影響で……」

中々良い趣味をしてそうだなすずか嬢の姉は。

「ところでちょっとした提案なんだが、いいか？」

「何よ？」

「アリサもすずかも、名前で呼ばせるのならば、勿論俺の事も名前で呼んでくれるんだよな？」

至極真つ当な俺の提案に、何故かアリサもすずかも固まってしまった。

「どうした、まさか嫌か」

「嫌ってわけじゃないけど……」

「は、恥ずかしいかな……」

「むー……」

「そっちはそっちでどうしたのさ高町さん」

何故か恥ずかしがるアリサ嬢にすずか嬢、そしてこちらも何故か頬を膨らませては拗ねたように声を上げる高町……ってそうか。

「高町じゃ嫌なの、なのはもなのはって呼んで欲しいのー！」

「いやうん………なんというかほら、慣れ親しんだ呼び名を変えらるとなるとさ………ね？」

「なのははやがみくんじゃなくてゆーいちくんって呼ぶのー！」

だから自分も名前で呼ぶようにと、高町嬢は強引に押しきる。

「まあ、いいか………それじゃあ、なのはって呼ぶよ」

「うんー！ー！」

にへらつと微笑むなのは可愛さが六割増、やはりまだ恥ずかしがるアリサとすずかに名前でも呼んでもらったところで、学校に到着した。どうにもいつもより長く感じたのは気のせいだろうか……。

授業中、昼休みと特に語るべきところも見当たらず、今日も恙無く俺の小学校ライフが終わろうとしていた。

授業中は念話でキヤスターに魔術理論を教えてもらっていた。昼休みには朝方仲良くなったアリサとすずかの2人になのはも交えて昼食を取り、その際俺の弁当がほしいほしい3人の胃の中へと収まり……悲しい事に現在腹が減って仕方ない。

「ゆーいちくん、一緒に帰るの！」

「ん……ああ行こうか」

なのは嬢と一緒に校舎を出る。

ちなみにアリサとすずかも同行だ。女の子3人に対し男が俺1人といいのも中々肩身が狭いようにも思うのだが、そんな事はどうでも良いらしく3人ともニコニコしながら歩いている。

「あ、それじゃ私こっちだから」

「私もこっちだから、またね」

「うん、また明日なの！」

「じゃあな2人共」

途中でアリサ、すずかと別れてなのはと2人で道歩く。

割と面白い話を振ってくるのでずっと聴き手に回っていると、

「ここがなのはのおうちだよ！ お母さんただいまー！」

なのはは翠屋、と書かれた看板の喫茶店に入って行った。

ここがなのはの家か……なるほど、飲食店を営んでいるのなら料理が美味しいのは頷けるな。

「あら、家の前でどうしたの？」
しばらく呆けて立っている、目の前に綺麗なお姉さんが現れた。
なのはをそのまま大きくしたらこんな感じといった、実に綺麗な女性である。

きつとご家族の方だろう……姉かな？

「こんにちは、なのはさんのクラスメイトの八神祐一です」

「ああ、あなたが……こんにちは、高町桃子です。話に聞く通りし
っかりしてるのね」

「ありがとうございます高町さん」

「ふふ、桃子でいいわよ？」

「では桃子さんと」

「あつ、お母さんただいまなの！」

桃子さんと話していると、なのはが勢い良く翠屋のドアから飛び出してきた。

忙しい娘である。

「ん？」

「おかえりなさいなのは。でもお母さんは外から帰って来たのよ？」

「あつ、じゃあおかえりなさいなの！」

「ふふふ、ただいま」

いやほのぼのしてらっしゃるが……。

「お母さん……でしたか」

「あら、どうしたの祐一君？」

「いえ、若くてお綺麗でしたので……てっきりお姉さんかと」

「あらあら、お上手ね祐一君」

「いえいえ、お世辞は言えない質ですから」

「ほらほらゆーいちくん！なのはのおへやに行くの！」

なのはに手を引っ張られ、俺も翠屋の扉をくぐった。

高町家は、なのはとそのお兄さんである恭也さん、恭也さんの妹でなのはの姉の美由希さん、一家の大黒柱である父親の土郎さん、そして母親の桃子さんの5人家族で、土郎さんと桃子さんがこの翠屋を経営してるとの話。

しかしこの高町夫妻、若い。いや実年齢は30越えてるらしいのだが、20代で十二分に通る。

そしてお兄さんたる恭也さんは……やっぱりシスコンだった。

なのは嬢と適当にぶにやぶにや遊びつつ夕方まで高町家にお邪魔させてもらった俺は、翠屋名物の桃子さん特製シュークリームを家族分購入（桃子さんに御代はいらない等とも言われたが丁重にお断りした）し、またねと手を振るなのはと高町一家に見送られてなんとなくほっこりしながら帰路に着いた。

「ただいま」

「帰ったわよ」

キヤスターと共に玄関をくぐると、ブスツとした表情のはやてが待ち構えていた。

「た、ただいまはやて」

「……遅いで」

「すまん……いやでも、ちょっと用事があつてさ」

妙に迫力のあるはやてに圧され、視線をついと逸らす。

なんか内緒で飲みに行ったのがバレた亭主みたいだな俺。

「女の子の家にお邪魔してたのよね、祐一？」

なんてくだらない事を考えていると、キヤスターがいらん事を言った。

「なん……やて……？」

うおっ、はやての瞳からハイライトが消えた。

「兄チャンドウイウ事ナン？」

「落ち着けマイシスター、今怒ることなく落ち着くともれなくシュークリームが貰えます」

手に持った袋をはやての眼前に掲げる。

「……うん怒ってへんよ？」

するとそれまでの不穏な空気はどこへやら、即座に瞳を輝かせて何事もなかったかの如くはやてが微笑んだ。

我が妹ながら現金な奴だ……扱い易くて助かるが。

「皆いるだろ？ 夕飯の後にデザートに食べよう」

「うんうん、そうしよう」

ゆるゆる笑顔のはやてを押し、居間へと向かった。

「魔術？」

「やってみる気はあるかしら？」

アーチャー&俺手製の夕飯の後、桃子さんのシュークリームに舌鼓を打っていると、キャスターに魔術を習う気はないかと問われた。

「うーん……今はいいや」

俺にとっては接近戦が最もやり易く、今のところ魔術に関しては特に必要性も感じられない。治療や障壁なんかはキャスターが居てくれるし、この家だって安全だろう。だからまだ……いい。

「あらすう……じゃあ対魔術戦を学びましょうか」

「魔術戦？」

「ええ、まずは庭に出なさいな」

「了解」

言われた通りに準備を整え庭へ出る。

「今日も月が綺麗ねえ……」

「んだねえ……」

「ふふ……それじゃあ始めましょう。一部の例外を除いて、魔術師なんかは遠距離戦闘が主な手段。そして自分にとつて有利な状況に導くわね、これは如何なる場合においてもそうなのだけれど……じゃあ魔術師と戦うにあたって一番適切な対処法は何かしら？」

月明かりに照らされ、俺に向かって微笑むキャスターはとても綺麗だった。

月下美人とはまさしくこういうのを言うのか。

「まあ同じ土俵には上がらないのが常套だよなあ……敵が俺より強いのならあくまでも接近戦、一撃離脱に徹する方が良かったろうし、同等か弱いとなれば止まらずに叩きのめしたら良いのかな」

「良い答えね。そもそも遠距離となるとろくな攻撃手段を持たないあなたでは、相手の得意分野に持っていかれたらどうしようもないわ。恐らく、以前に現れた2人っていうのは魔術師ではないでしょうけど少なくとも1人は後衛ね」

ランサー曰く直接ぶん殴ろうとして来たのは片方、口の悪い姉ちゃんの方だったらしいし。

ランサーが見た事ない魔術を使われたって事は……もう一方の無口な方が中々遠距離担当って見て大丈夫だろう。

「いつまた現れるともわからない以上、遠距離攻撃には慣れていた方が良いわ……」

「なるほど、そういうわけでその手の魔力塊なんだね？」

「当たる事なく私のところまで来るのが試練よ？」

「はっはっは無茶を仰る」

言うが早いか、俺はキャスターに向かって走り出していた。

「さあ、もし直接当たったら罰を受けてもらうわよ？」

言いながらキャスターは掌から紫色の魔力塊を生み出しそれを投擲する。

目の前に撃ち出されたソレに進路変更を余儀なくされ、何度もそんなことを繰り返しているといつの間にかキャスターの周りをぐるぐると走っていた。

「うわあああつ、容赦ないよこの人おつ!!」

「当たると痛いわよー」

「どひいいい!!」

逃げ回る事十数分、なんとかかかんとか避け続けるもいい加減ギリ貧な上に体力が持たん。

「くつそ投影、開始!!」

急ぎ干将・莫耶を投影し飛んで来る魔力塊を片っ端から弾きまくる。

「はあつ!!」

ほんの数秒、波のように押し寄せて来る魔力弾が止まり、その隙を突いて思いつき踏み込んだ。

そしてキャスターの直前まで近付いて……横に跳んだ。

「あら?」

チラと横目で確認すれば、予想通りにキャスターは陣を展開しており、そのまま突っ込んでいたら罠に嵌まる所であった。

干将・莫耶を投げ捨て、着地の反動を利用してキャスターに思い切り抱きついてやった。

予想外だったのか、キャスターは踏み留まる事が出来ずに俺諸とも倒れ込む。

「俺の勝ちでいいよね、キャスター?」

「こそ、そうね……今のは完全にやられたわ。あなたの勝ちよ

……だからその……」

「どつたのキャスター、顔が赤いぞ?」

「ち、近づ……」

何故か顔を真っ赤にさせたキャスターはあうあう言いながらまるで出来の悪い人形の様になんか口をパクパクさせている。

よくわからんがとりあえず今回は俺の勝ちで……修行始めて以来初の勝利。

なんとも嬉しいものである。

あまりの嬉しさにキヤスターを更にギュツとしてしまったが……まあはやてにさえ見られなければ問題ないだろうさ……多分。

「兄ちゃん……？」

「え……？」

「あら？」

世の中つてのはなんとも不条理なもので、我が最愛の妹はやてがまたもやハイライトを失った瞳で俺を見つめていた。

「は、はやて……？」

「ナニシトルン？」

「しゅ……修行を……」

「ウフフフフ……ナンノ修行ナン？」

もはや何を言ってもこのはやては消えないだろう。

だから俺は……。

「……」

「ウフフフフ……ドウシタン？ ソナイ土下座ナンカシテ？」

兄の尊厳とか男の自尊心とか色んな物が失われた気がするけども、とりあえず降伏の姿勢を取った。

「ウフフフフ……そこまでされたら許すほかないなあ……」

「ありがとうございます！！」

「その代わり……そうやなあ、今日は私の部屋で一緒に寝よか」

「いやそれは……」

「拒否権ナンテアルト思ツトルン？」

「はい了解しましたお嬢様！！」

その後、執事よろしくはやての世話をさせられ、最終的には抱きしめ合いながら眠りについた。

翌日、はやての部屋で眠っていた事がバレ、アーチャー他2名にか
らかわれた挙げ句何故かセイバーに説教されて酷い目にあつた。
やり場のない憤りを感じ、その場でアーチャーとランサーを勝利す
べき黄金の剣で吹っ飛ばした俺を誰が責められようか。
ついでに学校でバーニングというあだ名は大串君もとい竹中君発信
だという事を俺がつい口を滑らせてそれをアリサが偶然にも聞き付
けて竹中君が運悪くバチコーンされたとしても俺が咎められる謂れ
はないのだと言っておく。

時間ってのは平等でいて長くも短くも感じる不思議なもんだ（前書き）

どうも、雷泥です。

というわけで、台詞と地の文の行間空けを試みました。

どうでしょう？

今回短めな上に巻きでお送りしています。

いやあ、とつとと無印編に入っちゃわないかなんて思っています。

そんなわけで、どうぞ。

時間ってのは平等でいて長くも短くも感じる不思議なものだ

よく晴れた夏の日、太陽がジリジリと照りつけ、どこまでも広い青空に雲がゆるやかに流れていく。波は小さく、潮風が頬を優しく撫でる。

拝啓、天国の父上母上様……俺は今、海にいます。

茹だるような暑さが続く8月某日。

俺も夏休みに入り、初日で宿題を全て片付けて後ははやてに付きつきりだ。

基本図書館に行くか1日中ゲーム三昧だったんだが、流石に限界を感じたために八神家一同は海に来ていた。

白い砂浜の一角を根城にし、パラソルを突き立てて涼しげに座っている女性陣。キャスターのどこかアダルティックな紫紺色のセパレーツ姿や、ライダーの豊満なボディを強調するかのような黒のビキニ。麦わら帽子に白ワンピースと、どこかの令嬢のような出で立ちのはやてを見れば、そりゃあナンパ目的の兄ちゃんや一点特化の危ない趣味の奴ら放つとく手は無いだろう。

実際、何人かの男が彼女らに声を掛けていた。皆には俺が一般人に手を出したりすることを禁じていたため、キャスターは煩わしそうに適当にあしらっていたし、ライダーはひたすら無視の姿勢だ。ちよいと強引な方々にはとりあえずバーサーカーを差し向けて黙らせてやった。勿論手は出させていないし、所詮は軟派な連中だ。バーサーカーを見ただけでビビって逃げた。

逃げなかったどちらかと言えば根性のある方々には俺自ら賞賛の握

手をしてやった……のに手を抑え青い顔しながら逃げてった。
はっはっは意味わからんねえ？

ちなみにはやてにちよっかいかけてた方々は問答無用で砂浜に埋ま
っていた。だいた。

妹に手を出した時点で彼等の本日の予定は砂に埋まる事で決定した
のだ……南無南無。

さて、我が家の女性陣となるともう1人いるわけで、街ですれ違え
ば10人中10人が振り返る事受け合いな金髪美少女の彼女はナン
パされなかったのか。

本日のセイバーの出で立ちはワンピースタイプの白い水着。これま
た白い水着と透けるような白い肌が似合っているのだが……。

「さぁ行きますよユウイチ、ぐずぐずしていると魚が逃げてしま
います！」

「ぐずぐずしてもしなくても逃げられる時は逃げられるよセイバ
ー……」

という会話があったのが船に乗り込む大分前。

現在は海のと真ん中で一緒に糸を垂らしている。

「うむう……竿の扱いにはそれなりに心得があったつもりだっ
たんだが……」

「アサシンのそれは刀だろうに……」

俺が居る場所の反対側に座っているのはアサシンだ。

言いながらも彼は既に何匹か釣り上げているのだが。

海という事で……群青の禪姿に俺はつつこまないからな。

「ふっ、私の餌が一番だという事は魚でもわかるらしいな」

とは、金髪を下ろし、黒地に金のラインが入った海パンを履き、こ
れまた金ぴかの釣竿から魚を外しているギルガメツシユの言葉。

「ふっ、風情がないなギルガメツシユ。釣りとはより優れた釣具で
如何に大物を釣り上げるかが大事なのだ」

等と言っているのは赤のパーカーに黒い短パンのような物を履き、
微かに魔力を感じる釣具を振るうアーチャーだ。

ちなみにアーチャーが握っているそれとギルガメツシユの竿以外は、

「てめえら2人も風情なんかねえつつつの」

苦言を漏らすアロハシャツに青の短パン姿のランサーが渡してくれ
た物だ。

船はギルガメツシユが用意した物で、正直この黄金の船は目立って
しょうがないんだが……海に出る事が出来たのはランサーが漁師さ
ん達に頼んでくれたおかげだ。

そもそもこの海釣り企画の発案はランサーで、釣った魚はそのまん
ま食卓に並び家計にも優しく中々面白い体験でもあるため反対意見
はなかった。

「生態系がまずい事になりそうな勢いで釣ってるけどねー……3人
共」

我が家の3バカが張り合っているのを尻目に、自分の竿に意識を戻
す。波風が気持ち良い。

ところで俺の隣でぼっちゃんぼっちゃん音がするんだが……。

「いやその……セイバーさん、そんなに竿動かしたら釣れるもんも釣れないってば……」

「ううう……何故私だけ全く釣れないのですか」

「さ、さあ……なんでだろうね……」

悔しがるセイバー可愛い等と思いつつ、垂らした糸を見る。

海面はどこまでも青く蒼く綺麗で、空を仰げば日は真上より少し傾き始めていて、なんとなく腹も減ってきた。

「腹減ったなあ……」

一方、その頃のはやて達は。

「おいしいなあ」

「そうですね……あ、キャスターそのたご焼き1つください」

「ええいいわよ。はやてもいるかしら？」

「うんもらつなあ」

「……」

平和だった……。

「フイイイッシユウツ!!」

「アーチャーてめえうるせえ!!」

「ふはははははははは!!」

「てめえもうるせえよ金ぴか!!」

賑やかな……もとい騒々しい3バカと、我関せずなアサシン……んで、今だ掛からずテンション下がりがりまくっているセイバーとそして何故かその膝上に収まっている俺。船上は混沌としている。

「えつとセイバーさん」

「なんですかユウイチ」

「どうして俺は貴女の膝上に収まっているんでしょう」

「魚が釣れないからです」

「いや全く答えになってませんか、それと俺がどう繋がってるのか全くわかりませんから」

見上げればなんとなく目が据わっているわけ。

「はあ……まあいいや、一緒にやるよセイバー」

「……ありがとうございます」

セイバーの手のすぐ下に手を添え、竿を握る。

しばらく2人でぼーっとしていると、セイバーが顎を俺の頭の上に
乗せてきた。

「……落ち着きますね」

「……そうなの？」

「そうです」

「そうかあ」

船上の喧騒をBGMに、海面を見つめる。
なんと……平和だ。

「んっ？」

「どうしたんですかユウイチ？」

「今……海面が揺れたような……ってセイバー、来た!!」

「はっ、はい！」

言ったと同時に、さっきまで俺が釣っていた魚よりも強い当たりが
来た。

「なっ!?!」

「マジか!?!」

あまりの当たりの強さに体が引き摺り込まれそうになる。

「行くよセイバー!」

「はい!」

竿を握る手に力を込め、船の縁に足をかける。

「「せえのお!?!」」

気合いの一声。

水飛沫を伴い姿を現したのは……。

「でっけえー!?!」

俺の身の丈ほどはある巨大な鰐だった……。

「おい、兄ちゃん!」

いらぬ魚をリリースしてから帰ってくると、港にはやて達が見えた。バーサーカーに抱えられながら、こちらに元気良く手を振って

いる。その横にはライダーとキャスターも控えており、俺に向かって同じく手を振っていた。

「はやてー、ただいまー！」

「いっぱい釣れたーん？」

「大っ漁だー！」

答えつつ、今一度船上を見る。

そこには膝と手を甲板について頂垂れるアーチャー、ランサー、ギルガメツシュの3人が居り、その前でセイバーが鯉片手に誇らしげにふんぞり返っていた。

「……ああ、やっぱり平和だ」

「くくく、確かに……」

アサシンと2人で苦笑しながら、黄金の船はゆっくりと港に入って行くのだった。

月って地上から見ると分には綺麗だけど近寄って見ると表面ほこほこだよね（前書）
どうも、雷泥です。

私にしては凄い勢いの更新頻度でございます。
主人公が修行してないようにも見えますが、ちゃんと影でやってお
りますからね？

ではでは、どござい。

月って地上から見る分には綺麗だけど近寄って見ると表面ぼこぼこだよ

頬を撫でる風は柔らかく、気候的に肌寒くなってはきたものの、まだ薄着でどうにかなる。

そんな秋の夜長の八神家では、月見という名の宴会が行われていたのだが、どうしてこうなったのか……俺は何故か、ライダーの腕に抱かれて身動きが取れずにいた。

月見は午後9時より始まって、はやても俺も日中に突いた団子を頬張りながら秋の夜空に優しく輝く月を眺めて、風流だなあと和んでいた。

月を眺め縁側で寛ぐ俺達のすぐ目の前、庭の中央でブルーシートが敷かれており、その上に我が家の働き手たる英霊達はいた。群青の侍、アサシンこと佐々木小次郎は俺とはやてを膝に乗せて一緒に団子を頬張っているのだが……

「アサシンは皆と一緒に酒飲まへんの？」

はやての問いに対して彼はこう答えた。

「何、今宵は主殿、妹君と共に風流を楽しみとうなっただけよ」

「そうかあ、お月さま綺麗やもんなあ……」

「実に月見日和というものよなあ……」

侍と月見つてのも中々様になるもんで、月明かりが俺達3人を照らしてるとこつてのは、いい画になってるんじゃないかと思う。

「まあ、すぐそこでどんちゃん騒ぎしてるからちよいとばかしムードが台無しというか……」

「気にせんでええやん兄ちゃん、あれも風流やで？」

風流か？あれは風流なのか？

「皆して出来上がってるんだけどあれ……」

完全に出来上がった皆さんはちよつと、いやかなり危ない。

普段反りの合わない弓槍金が肩を組んで酒飲みながら夢色チエイサーを合唱する光景なんぞカオスの極みだし、つていうかどこで知つたのさその歌。

ああバーサーカー、そんなところで寝たら風邪引く……のかな英霊つて……。

キヤスターも完全に酔っぱらいだしセイバーにひたすら絡んでるし……そりゃあセイバーの可愛い服着てるところは見たいっちゃん見たいけど……っそうじゃねえよ。落ち着け俺、雰囲気呑まれるな、クールに行けクールに。

セイバーもコクコク頷いてると着せ替えさせられちゃうからねっ！？あれ、ライダーの姿が見えない……どこだ？

「ああははは兄ちゃんもたいがい酔つとる〜」

「なぬっ!?!?」

振り向けばほんのり赤らんだ頬のはやてが俺を見て笑っていた。しかもその手には、先程まで持っていたいなかったはずの赤い杯が………
ってアサシンも同じ杯持つてるしっ！

「も、もしもはやてさん？ その手に持っている物はまさか………」

「えへへえ、ちやうよあゝジュースやでえゝ」

言いながら俺に引っ付くはやて。

ぐっ、酒臭え！？ 飲みよったなこいつ！！

「はやてえ……そのジュースは誰がくれたんだ？」

「んゝ兄ちゃんも欲しいん？ ほならライダーに頼んでもうちよつともらわなあかねえ」

なるほど、ライダーね……はっ！

ふと後ろに気配を感じて振り向くと、妖しげな雰囲気ライダーがいた。

「祐一もいかがですか？」

「いや……未成年どころか小学生に酒を勧めるとはどういうことかい」

ライダーの頬は赤く眼鏡の奥の双眸はトロンとして……そんな潤んだ眼差しで見ないでください。
なんかイケない気分になるから！

「いいりませんか？」

「いいよ俺は……」

どうせろくな事になりやしないんだから……。

「え〜……兄ちゃん飲まへんの？」

だってあなたもひどい事になってますやんはやてさん。

「おいしいのになあ……ZZZZ」

「眠ってしまいましたね」

「やれやれ……もう部屋に連れてくよ、皆も適当に切り上げてくれよな」

電源が落ちたはやてを抱き上げ、はやての部屋に向かう。最近は何となく離れというか、あまり引付いたりしてこなくもなつて……若干寂しく思ったりもする。

「うにゃあ……」

「猫かっつての」

平仮名3つで『はやて』と書かれたプレートが下がっている扉。

反対の壁に寄りかかり、片足でドアノブを捻って扉を開ける。

いつ入っても本とぬいぐるみだらけの部屋だ。散らかってるわけでもなくきちんと整理されてる辺り我が妹らしい。

ベッドの上にはやてが起きないようゆっくり降ろし、毛布をかけてやる。

頭を撫でてやるとなんとなく嬉しそうに微笑んだように見えた。

「んうう……兄ちゃん……」

「……寝言か、なんだいはやて？」

「……大好きやからなあ……ん」

「……くくく、おやすみはやて」

最後に頭を一撫でし、はやての部屋を後にした……。

「くあああ……俺も寝よ」

まだ少し騒がしいところを見ると、どうやら宴会は続いているらしい。

まあ、キャスターが更に強化した結界のおかげで近隣に迷惑は掛からないだろうが……。

俺の部屋に入り、ベッドに倒れ込む。

このクッションのむにゆんとした感触が心地よ……むにゆん？
こんな柔らかかったかなベッド……。

そう思いこの不可思議な手触りを確認するために何度か掴む。
むにゆんむにゆん……。

「あつ……んっ……」

うーん……なんかこうしつかりとした重量感というかぎっしり詰まった質感感というか……。
むにゆんむにゆん……。

「んっ……祐……」

むにゅんむにゅん……。
触っていると幸せになるような……。いやうん、わかってるさ。そろそろ自重しなきゃだよな。

「……………何してるのさライダー」

電気は点けていないので真っ暗なんだが、この手が掴む確かな感触がある以上、ライダーの上に俺が乗ってるわけで……。

「現在の状態を言いますと祐一に胸を揉みしだかれていますが」

「……………いやさ、せめてもう少し恥ずかしがるといっか、そもそも何でここにいるのさ」

「祐一を待っていたのです」

窓から微かに差し込む明かりでライダーの顔が確認できた。

俺の顔をまじまじと見つめ、全てを慈しむ女神のように彼女は微笑んでいた。

「つてか本当にライダーか？」

「なんか普段より表情が柔らかいし、何なんだよそのえへえって感じの笑顔は！？」

「……………可愛」

「……………」

「なんとなしに言った言葉だが、それを聞いたライダーは顔を一瞬紅潮させたその上で更ににへっと笑った。」

なんとという笑顔三割増し！！ライダーのデレ笑顔とか滅多に見れるもんじゃないねえっていうか本当に誰この人！？

クーデレだと思っていたらデレデレだった……何を言ってるのかわからねえか（ry

「祐一……」

ライダーは呟くと俺の背中に手を回し、ぎゅっと抱きしめた。

とてつもなく気持ち良いのだが……こんな時自分が小学生ボディで良かったと思う。

そうでなければ既に理性が飛んでいただろうな。

そんな俺の考えなど露知らず、ライダーは規則正しく寝息を立て始めた……。

「俺はこのまんまかい……」

動こうにもがっちり固定されていて動けず、結局俺はそのまま顔をライダーの胸に埋めながら朝を迎えたのであった。

余談だが、朝方目を覚ましたライダーの見事なまでにテンパる姿は中々見物であったことを言っておく。

『祐一は【ラッキースケベ】の称号を手に入れた』

雪だるまが黒っぽくなるのはきつと作り方が悪いせいだ（前書き）

どうも、雷泥です。

今回も早目の投稿ですね。いやぁ疲れるったらないです。

ちよいとしたりネタを入れ込んである今回の話ですが、実現されたら嬉しいなあなんて思う私ではあります。

ではでは、早速どうぞ。

雪だるまが黒つぶくなるのはきつと作り方が悪いせいだ

深々と降り積もる雪を眺める。

窓から見る限り外の気候は寒そうで、とてもじゃないが外出しようとは思えない。そんな日は炬燵の中でぬくぬくするに限る、と俺は思うわけだ。

その考えは八神家全員同じなようで、皆狭っ苦しい炬燵の中から出ようとはしない。つくづく、墮落した英霊達がいたもんだ」

「声に出とるよ兄ちゃん」

聖祥も冬休みに入り、これといって予定もない俺としては、この短いんだか長いんだか判断し辛い休暇は家で過ごす事に決めていた。冬になってからめつきり寒くなったため、中々修行も捗らない。

まあ、モチベーションの問題もあるのだが。

そんなわけで本日も炬燵に入ってゲーム三昧である。

「うわっ、やられた！」

「ふっ、戦場での油断は命を落とすぞはやて」

ちなみに、現在やっているのは『スーパーロボット対戦』とかいうゲームだ。大戦ではなく対戦ってところからわかるように、複数人で対戦可能なアクションゲームとなっている。

あつちとこつちで所々似たような物が出回ってはいるらしく、任天堂もあるし、バン イも存在していた。

それでもやっぱり仮面ライダーはなかったが……。

まあこのゲーム、生前プレイしたことのあるガンダムVSガンダムをスパロボOGs版にしたようなやつで、結構面白い。ちゃんとパイロットも叫ぶしな。

ちなみに最大で4人対戦が可能なこのゲーム、主な対戦方式は個人戦かチーム戦。全員1000のコストが表示され、そのコスト分がなくなったら負けとなる。

俺が良く使うのはアルトアイゼンリーゼとダイゼンガー。スーパーロボット大戦OGsでは両機共に何度もお世話になった機体だ。たまにゲシユペンストをネタに使うこともあるが。

今撃墜してやったはやてはヴァルシオーネ。はやては大技に頼り過ぎなところがあつて、クロスマッシャー発射後なんか狙い目である。

アーチャーはコンパチブルカイザー。燃えるじゃないかと豪語していた彼は中々染まってると思う。

ランサーはソウルゲイン。得体の知れない親近感がどうとか……まあ、言わずもがな。

ライダーはアンジュルグでの攪乱戦闘が得意。クールビューティー同士合ってると思う……ちょっとずれてるところも。

キャスターは何故かR GUNパワードを良く選ぶのだが、正直な話弱い。我が家では密かに『練習台』と呼ばれている。落ちモノだと強いのだがなあ……。

アサシンはR 1にシショウブレイドを装備して出撃するという変わり種。剣を主流として戦う方が良いとかで、射撃なんかはなっから考えちゃいない。

リアル系のロボットは装備をいくつか変更できるというのもこのゲームのちよつとした魅力である。

バーサーカーは虎龍王と龍虎王。同じ機体を選んだとしても、俺とバーサーカーとでは威圧感が違う……ゲームなものにな。

ギルガメッシュは……グランゾンからのネオ・グランゾン。実は一番相手にすると厄介な機体で、グランゾンは一度撃墜するとネオ・グランゾンとして再出撃するため、ただでさえ面倒な敵がさらに面倒になって帰ってくるのだ。まあグランゾンはコストの関係で2回撃墜されると終わるのだが、正直メリツトの方がでかい。

さて最後にセイバーだが……これまた意外にサイバスター。セイバー的にサイバスターは格好良いらしく、これしか使わないところがある。

ところでサイバスターとセイバーって何となく似てない？

画面に目を戻すと、派手な爆発エフェクトに包まれるヴァルシオーネの姿が。今コントローラを握っているのは俺、はやて、アーチャー、ランサーの4人。

仕事でいないライダーと、またどこかでふらついてるであろうギルガメッシュ以外はこの家に居た。

「くっくくく……出直して来いはやて」

「くうう……まだや、あと一回残つとる！」

「はやて、そう焦っていても当たる物も当たらんぞ？」

「てめえのコンパチは機動が遅えから焦りようもねえじゃねえか」

「なんだとランサー？ 貴様のソウルゲインなぞ髭男爵ロボではないか」

「あん？ 麒麟で切り刻んでやろうか重量過多が」

「気力ゲージも大して溜まっていないのによくもまあ言えたものだな？」

解説しよう。『麒麟』とは、ランサーの使っているソウルゲインの必殺技で、当たれば大ダメージは免れない。しかしその必殺技を撃つには、アーチャーが言った『気力ゲージ』を溜めなくてはならず、これは敵機を撃墜することで高められる。

このゲーム中々優しいところがあり、敵機は自分の他の3人だけだけでなく、『雑魚敵』なる機体がバトルフィールド上に多数出現してくるため、そいつらを倒すことでも『気力ゲージ』は上昇するのである。まあ勿論の事ながらプレイヤー機体を撃墜した時とは気力の上がり方に差があるが。

ちなみに『雑魚敵』撃墜数は俺が一番多い。

『アクセル・アルマーか！』

画面内の俺のプレイヤーキャラ、キョウスケ・ナンブが叫ぶ。

その通り俺はランサーのキャラであるアクセル、彼が駆るソウルゲインを発見しており、バーニアを噴かして接近中である。

『来たか、ベーオウルフ!』

このアクセルとキョウスケ、OGSでは因縁浅からぬ関係で、地味にセリフも多い。

「げっ、来やがったか!」

「話し中に悪いな!」

『撃ち貫く!』

ソウルゲインの懐に飛び込んで、アルトアイゼンリーゼの固有武器リボルビング・バンカーを撃ち出す。一応の通常武器たるこのリボルビング・バンカーだが、雑魚相手なら一撃で片付けることができる強兵器であり、ボタンの長押しで全弾ぶち込む事も可能だ。

「くそつたれ!」

しかしランサーもその動きは読んでいたらしく、ギリギリで避けて青龍鱗（ソウルゲインの射撃技）を撃ってくる。

「その程度で!」

アルトアイゼンリーゼが左腕を前に、5連チエーンガンを撃つ。青龍鱗を撃ち落とし、さらに接近する。

「くらえっ!」

『分の悪い賭けは嫌いじゃない』

第二撃目のリボルビング・バンカーをソウルゲインの腹部に押し当てたその全弾を使い切り、離れる。
次いで爆発。ソウルゲインは炎に包まれながら砕け散った。

「やられちゃったか……だがまだ一機分残ってらあ！」

ランサーの画面にまたソウルゲインが出現し、フィールドを駆け抜ける。

結局……ランサー、アーチャーを撃墜しボロボロになった俺アルトアイゼンを漁夫の利の如くはやてがクロスマツシャーで粉碎。
はやての1人勝ちでこの勝負は終わった。

俺はコントローラーをセイバーに預け、寒いのを我慢して炬燵から抜け出てトイレへと向かった。

「ふう……スッキリウルフ」

小さい方を済ませ居間に戻ろうとするが、庭に誰かが立っているのに気づき、なんとなくしに縁側に座ってその人を見ていた。

空を仰ぐ横顔はどこか寂しそうで、なんだか彼の物語が終わってしまっただかのような雰囲気だ。

彼はどのシナリオから来たのだろうか……彼自身が満足しえる話になっていたのだろうか？

灰色の空を見上げて立ち尽くしていたのは、鉛色の英雄だった。

「……思い出すの？」

訊くと彼は少しばかり驚いた様子でこちらを見た。

「……何をだ？」

「……雪の少女をさ」

「……お見通しか」

サーヴァント連中には俺が特異な生まれであることを話してある。勿論、彼らの事を知っている事も。

「……まあ、どうにもな」

「願いが叶うのなら、もう一度イリヤを守りたい？」

「……さてな、あれは俺の記録であっても俺の記憶ではない。つまりこれも、意味の無い感傷に過ぎない……」

バーサーカーはまた空を見上げ、白い息を吐いた。

「……きっと、イリヤが幸せになってくれる未来もあるのだろう……あの未来の錬鉄の英雄が、イリヤを幸せにしてくれているはずだ……」

それだけでいいと締め括り、バーサーカーは押し黙った。

「……んじゃあ、今度は俺の妹を護ってあげてくれよ。変な奴らもいるにはいるし……」

「ああ……勿論、そのつもりだ」

「そっか、ありがとうバースーカー」

再び沈黙。

別に気まずさなどなく、俺の隣にバースーカーが腰掛け、2人で降り続けている雪を見つめていた。

「祐一もバースーカーもこんなところでなにをやっているのかね？」

「やあアーチャー」

「寒くは無いのか？」

「特には思わないよ。それよりこんなところで何してるのって問いはアーチャーにも当てはまるよね？」

「ふむ、そうだな……君達2人が見えたからでは駄目かね？」

「んー……あつ、そうだ」

縁側から手を伸ばして雪を掬う。

「なにをやっついていぶおっ」

「ぶおってなにさぶおって」

「……まあ君が雪玉を作成し始めた辺りから大体の予想はついていたがな……」

「よし、始めっか！」

玄関に走り俺の靴とアーチャーの靴を持ってくる。縁側にて靴を履く俺にアーチャーはやれやれという顔をしながら、自身も靴を履き出した。

「大、雪合戦大会！」

「まったく……靴が濡れるぞ祐一？」

「濡れんのが恐くて雪合戦ができるか！ いやできない！」

「……よし、いいだろう。付き合ってやる」

「ふっ……行くぞ錬鉄の英雄よ、雪玉の準備は万全か？」

「わ、私の台詞を……」

「作成、開始！」

今ここに、漢と漢の戦いが始まった。俺が投げる白い閃光をアーチャーが避け、アーチャーの放つ銀弾を俺が避ける。幾度となく雪玉の応酬が続いていると、縁側に新たな人の気配。

「2人共何をしているのですか？」

「雪合戦さつてあぶね！」

「くっ、避けられたか！」

「雪合戦とは何ですか？」

「見た通りの遊びだよ、セイバーもやるか？ によわっ!？」

「……では、参加させていただきます」

「靴履いてきてね！」

しばしの後、ブーツを履いたセイバーがやって来た。

「セイバーは俺のチームね」

「はい、わかりました」

「なっ!？ それは卑怯ではないかね祐一!!」

「体格差から考えれば私が祐一に付くのは至極当然とも思いますが？」

言いながら既にいくつか雪玉を作成しているセイバー。

「どう考えても私が不利だろう!？」

「諦めは肝心ですよアーチャー」

「くっ、そんなうぼあっ!」

アーチャーが更に何かを言う前に雪玉を叩き付ける。セイバーも俺に倣い雪玉をぶん投げる。

騒ぎを聞きつけ、家に居た連中も庭に集まって八神家による大雪合

戦大会が始まった。

終わる頃には全身霜焼けになって風呂に入る時は騒いだが、中々に楽しいイベントだった。

一つくらい得意なもんがあってもいいじゃない(前書き)

どうも、またWを見逃し、死にたくなつた雷泥です。

最近原作キャラと絡んでなかったので補充しました。

といつても短いですが……相変わらず緊張感の無い八神家をどうぞ。

「つくらい得意なもんがあってもいいじゃない

桜舞い散る春のある日。

つい先日より小学2年生となった俺は、紙っ切れを睨み付けながら隣に座る少女に戸惑いを隠せずにいた。

「うっ……よくわかんないの……」

……だから何の話だと。

「むっ……」

かなりお困りの様子のなのは。

紙っ切れ、というかテストなんだがはてさて、どうしてこの娘はこんな悩み、時折俺を睨み付けるのだろうか……。

『どう思うセイバー？』

『……唐突に話題を振り出して相手を困らせるのはあなたの悪癖ですよユウイチ』

『いやあ、隣の席の娘に熱烈的に見られててね』

『今は授業中でしょう？』

『まあテストの真っ最中ですな』

セイバーに話しかけつつ外を眺めて見れば桜の花弁が風でくるくると舞っていて、これはこれで中々に綺麗じゃのうと思う。

『ならばユウイチの方を見てはならないのでは……？』

『そだねえ……まあチラツチラ見られると気になるんだけど、大方わかんない問題でもあるんじゃないのかな？』

勿論言うまでもなく俺は全ての空欄を埋めており、現在暇を持て余していてしょうがない。

まあ、小学2年生のテストだし、わからないなんて言ったらお前は生前何をしてたのさって事になるわけですしい……。

『そうだセイバー、夕飯は何がいい？』

『夕飯ですか……そうですね、久しぶりにユウイチが作った鶏の唐揚げが食べたいです』

唐揚げ……ね、そういえば最近作ってなかったっけ。

『お肉が安かったらかな……そしたら今日は鶏唐にしよう』

『嬉しいです！』

『いやだから安かったらね？ 決定じゃないからね？』

そういえば俺が紅い主夫に勝てる数少ないものなんだよな、唐揚げ。これだけは勝ってる。

初めてアーチャーが鶏唐を食卓に並べた時、はやての一言が波紋を

呼んだんだっけ……。

『うーん……』

『どうしたね、はやて』

その日の出来に満足していたのか、アーチャーは満面の笑みだった。

『アーチャーのご飯てみんな美味しいんやけど……』

『けど……なんでしょう？』

セイバーが神妙な面持ちではやてに問う。

この時点でアーチャーの表情は凍り付いてたなあ。固い笑顔とか初めて見たわ。

『唐揚げは兄ちゃんの方が美味しいな』

『……なに？』

『うーん……そうか？』

『うん、唐揚げは兄ちゃんの勝ち』

『なん……だと……』

いやあ、大変だったなあ……。
アーチャーは頻りに唐揚げの作り方を教えて欲しいとせがむし、セイバーは目を輝かせて期待してたし……。大したもんでもないってのに。

(因みに、両人の手順や材料になんら変わりはなく、アーチャーを更に悩ませたのはここだけの秘密である。)

むっ、今変な電波が来たような……。気のせいかな。

『とりあえずまあ、帰りに紅桜にでも寄りますかね……。』

『ああ楽しみです！ 学校が終わる事が待ち遠しいですね！』

どうにも、唐揚げの事になると変なテンションになるよな……。うちの家族って。

「ふああ……。眠っ……」

本日の授業も終わり、小学生の義務を果たした俺はとっとと帰るべ

く教科書を纏めて鞆に詰めていた。つい最近になってから俺は、教科書などの勉強道具を入れるための鞆とその他の物や弁当箱、そしてサーヴァントを入れるためのリュックと分けて持ってきている。

『さあ行きましょう紅桜へ！』

『へいへい……』

まあ鞆とリュックとを分けたのは、サーヴァント達が狭苦しい思いをしないですむようにだ。前はわりとギチギチだったからな。

「ちよつと待ちなさい祐一」

教室を出てすぐ、やたらと上からな物言いで呼び止められた。

「はぁ……なんか用ですかいアリサ殿？」

振り向けばそこには金髪がいた。

「今日のテスト、あんた何点？」

「満点でございます」

どうやったって普通に解けばそうなるわけ……どうせ小学生程度のテストなら、わざと低い点数を取ることもないし。

「くっ……またかぁ……」

「どうせアリサも満点だろうっ？」

「……そうよ」

何故か、この少女によくよく勝負を挑まれるようになった。どうやらアリサ嬢はかなりの負けず嫌いらしく、一度テストで負かしてしまったことが彼女の闘争心に火をつけたようだ。

「同点ならいいじゃないか、引き分けだよ引き分け」

「くう〜……このまんまじゃ0勝1敗43引き分けなのよっ!」

「ありゃあ、数えてたのね……」

「1回は勝たなくちゃ私の気がすまないわっ!」

そんなこと言われても、だ。

「まあ、また今度ね」

「なっ、勝者の余裕ってわけ!？」

「いやそういうんじゃないけど」

「次こそは絶対勝ってやるんだからね!」

そう言い残し、少女は去っていった。

なんだっただんだ一体……。

突然ではあるが、昨年ひたすらに鍛えた結果、俺は英霊相手でもそれなりに戦えるようになった。

まあ、体力が増えて限界稼働時間が長くなり、筋肉も付いて出来る事が増えたというだけだが。

ぶつ切りにし、2時間程タレに漬けて置いた鶏肉を小麦粉にまぶし揚げ油を入れた鍋に放り込む。

間違い無く最高の師に囲まれ、最良の修行をこなして最速で成長していつているのだ。

これほど恵まれた環境も他には無いだろう。

じっくり見ながら、こんがりきつね色に揚がった唐揚げをさささと取り上げクッキングペーパーを敷いた皿の上に置く。

もっともつと強くならなくちゃいけない。

あれから見ていないが、変なお姉さん2人組もいつまた襲い来るかはわからん。あれらが春先によく見られるおつむがどうにかなってしまった妖精界の住人とも思えない。

魔術……いや世界が違うのだからもしかしたら魔法と呼んだ方が正しいのかも知れないが、得体の知れない技術を使っていた以上は、危険な存在である事には変わらないのだ。

全ての唐揚げを取り上げ、油をある程度落としたら完成。

こちらにはセイバー達がいる。

だが必ずしも一緒にいるわけじゃない。警戒を弱めているわけじゃないが、俺が1人になる可能性などいくらでもある。その時にもあの転移魔法？みたいのを俺に対してやられた場合は、敵さんのど

真ん中に俺は放り込まれるわけであって……そしたらまあ、目一杯
暴れ回るしかないよな？

出来る限りロボットとかを相手にしたいなあ……基本的に、俺は人
を殺せる程極まっちゃいないし、なにより罪悪感で潰される。
極力、殺す選択肢を無くしたい。

「ギル、つまみ食いしたら怒るよ」

冷蔵庫を開けて新たに食材を手にし、背後でちょうど今出来上がったばかりの唐揚げに手を付けようとしているギルガメッシュを制した。

「むっ……1つくらい良いであろうっ？」

大皿をもう一枚取り出しながら、ボールいっぱいのだレに漬け込んだ鶏肉を丁寧に小麦粉でまぶしていく。

「つまみ食いは誰であつても許しませんのだ」

「くっ……王たる我がこう言っておるのだぞ？」

「じゃあさつきから君を睨み付けてる修羅セイバーの相手をするかい？」

「……我がすまなかつた」

「よろしい」

ギャグ補正なのかなんなのか、こと食事にかけてはセイバーはサー
ヴァントヒエラルキー上位に位置し、最強となる。
眼で殺すとはこういうことだ。

「まあもう少し待っててよ、すぐ出来上がるから」

さすがごと引き下がるギルガメツシュがどうにも小さく見えたので、笑いかけて宥めておいた。

するとまあギルガメツシュはそれはもうはち切れんばかりの笑顔でうむむと頷いて満足気に居間へ行く。

なんとも愉快的な英霊達である。

先程と同じ工程で唐揚げを作り、大皿に盛り付け居間へ運ぶ。

腹の中に収められたコイツは、本当の本当に最終手段だ。爆発的に俺の身体能力が向上するが、人間には過ぎた代物……。

「はい、唐揚げお待ちどうさん」

テーブルの上に所狭しと並べられた数々の料理を前に、最早セイバ―は待つていられない様子でそわそわしながら俺を見ている。見ればはやても同様で、皆も心なしか早く食べたそうだ。

俺はどこか微笑ましい光景に口の端を上げ、いただきますと宣言した。

なんとなく能力値表（前書き）

どうも、雷泥です。

とりあえず作ってみました能力値表です。

ちなみに危険度判断は空を飛べるか、明確な遠距離戦闘能力があるかどうかで考えてます。

後々追加してつたりもしますので、あくまで仮という事で。

なんとなく能力値表

大体こんな感じで考えてます。サーヴァント勢の（）内は主人公の保有スキルから受けている恩恵です。

魔導師ランクは別名『危険度』と作者は捉えております故、基本的に人を超えた存在たる英霊はランク高いですね。

名前：

クラス：

魔導師ランク：

デバイス：

Fate風能力表：

筋力：

耐久：

敏捷：

魔力：

幸運：

宝具：

保有スキル

名前：アルトリア・ペンドラゴン

クラス：セイバー

魔導師ランク：SS

デバイス：-

Fate風能力表

筋力：A（A+）

耐久：B (A)
敏捷：B (A)
魔力：A (A+)
幸運：A+
宝具：A++ (S)
保有スキル
対魔力：A (A+)
騎乗：B

名前：エミヤ シロウ
クラス：アーチャー
魔導師ランク：A+
デバイス：-
Fate風能力表
筋力：D (C)
耐久：C (B)
敏捷：C (B)
魔力：B (A)
幸運：E
宝具：E } EX
保有スキル
単独行動：B
対魔力：D (C)
投影
同調
強化
固有結界『無限の剣製』

名前：クー・フリーリン

クラス：ランサー

魔導師ランク：A

デバイス：-

Fate風能力表

筋力：B (A)

耐久：C (B)

敏捷：A (A+)

魔力：C (B)

幸運：E

宝具：B

保有スキル

対魔力：C (B)

名前：メデューサ

クラス：ライダー

魔導師ランク：S

デバイス：-

Fate風能力表

筋力：B (A)

耐久：D (C)

敏捷：A (A+)

魔力：B (A)

幸運：D

宝具：A+

保有スキル

対魔力：B（A）
騎乗：A＋
魔眼

名前：メディア
クラス：キャスター
魔導師ランク：SS
デバイス：-
F a t e 風能力表
筋力：E（D）
耐久：D（C）
敏捷：C（B）
魔力：A＋（A＋＋）
幸運：B
宝具：C
保有スキル
陣地作成：A
道具作成：A
高速神言

名前：佐々木小次郎
クラス：アサシン
魔導師ランク：B
デバイス：-
F a t e 風能力表
筋力：C（B）

耐久：E (D)
敏捷：A + (A + +)
魔力：E (D)
幸運：A
宝具：EX
保有スキル
気配遮断：D

名前：ヘラクレス
クラス：バーサーカー
魔導師ランク：A或はSS
デバイス：-

Fate風能力表
筋力：A + (A + +)
耐久：A (A +)
敏捷：A (A +)
魔力：A (A +)
幸運：B
宝具：A (A +)
保有スキル
狂化：B

名前：ギルガメッシュ
クラス：-
魔導師ランク：SSS
デバイス：-
Fate風能力表

筋力：B (A)
耐久：C (B)
敏捷：C (B)
魔力：B (A)
幸運：A
宝具：EX
保有スキル
対魔力：E (D)
単独行動：A +

暑いのは苦手だが熱いのは好きだ（前書き）

どうも、お久しぶりです雷泥です。

最近暑くて色々駄目ですが……私は一応生きてます。

暑いのは苦手だが熱いのは好きだ

「我が名はゼンガー・ゾンボルト……悪を断つ剣なり！」

「斬艦刀が来ますよアーチャー！」

「わかっている！」

「行つたれ兄ちゃん！ 兄妹の力見せたるんやー！」

季節はまた巡つて夏。

地球に何の恨みがあるのか知らんが、太陽は容赦なくその輝きを強めている……ように見える。

「暑い」

「……そうね」

「何故にこつも暑いのか」

「……今年一番つてお天気お姉さんが言つてたわよ」

「おのれお天気お姉さん！」

「……筋違いにも程があるわよ」

茹だるような熱気が我らが教室内に籠っている。
正直な所、暑いし辛いしだるい。

「冗談はさて置き……暑い」

「……うるさいわね、言わなくたってわかるわよ」

「いつものキレがないということはアリサも相当キてるわけだなあ

……」

「………仕方ないじゃない、我慢できないわよこんなの」

と言い、隣の席のアリサ嬢も俺と同じように机に突っ伏して全身で
気だるさを表現し始めた。

先日行われたくじ引きによって、一年間ずっと隣だったなのはが
なり前方の席に移り、俺の隣にはアリサが来ていた。

なんと俺の席は窓際最後尾という高ポジションであったが、残念な
ことに今日のように風の無い蒸し暑い日に関しては地獄そのものと
言えよう。

「それもこれも教室にクーラーがないせいだと思っただ」

「確かに今日は妙に暑いけど……別に今まで無くても平気だったじ
ゃない」

「あと一時間もここにいるとなれば俺はもう溶けるかもしれない…

……」

「あんたの体は何で出来てんのよ……」

「うむ……強いて言うなら剣かな」

「いや……どづいつことよっ」

「どづいつことだろっな？」

「あんたは……」

アリスとのふぬけた会話もそこそこに、陽射しが厳しい青空を見上げて、俺はしみじみとこづかい。

「夏だなあ……」

さて、くっそ暑いこんな日は絶好のプール日和である。ひんやりとした水に浸かれれば暑さを忘れられるし、何より俺は泳ぐのが好きだ。心臓に負担を懸けないように、プールの水を自身にかけまくる。

「祐一君、一緒に泳ごう？」

そんな俺に話しかけてきたのは、黄色い水泳帽子に紺色スクール水着に身を包んだすずかであった。流石幼女、よく似合う。

「あいよ、また競争な」

「うん」

そう言つてプールに飛び込む。ドボンという水の音が2つ。
こと運動に関して、この少女とはよく競う。と言つても、アリサ程
意固地になつてゐるわけではないが……。

すずかは持つて生まれたセンスなのか、平均を軽く上回る運動能力
があつた。同じクラスの女子は勿論、男子生徒諸君よりも運動能力
は高い。

だからまあ、もつぱらの遊び相手は同じく平均を大きく上回る俺に
なるというわけだ。

俺としても彼女とのこの勝負は面白い物であり、彼女自身本気を出
せて日頃のストレスを解消できる良い機会だと思つてる。

「アリサー……」

「はいはい……」

ゴーグルをかけ、アリサの号令を待つ。腕を上げてタイミングを見
計らつてゐるアリサの隣ではなのはが俺達2人を応援している。

「2人ともがんばつてなのー!!」

「行くわよー……よーい、ドン！」

号令一発。

俺とすずかは勢い良くプールの壁面を蹴り、勢いそのままに全身を
動かす。

腕を回し、脚をバタつかせ、体を前へ前へと押し出す。

水中は実に心地よく、ゴーグルの先に見える無音の世界が俺を包み
込むようで……つてもう反対側か。

手を付いて顔を上げる。

後ろを振り返ろうとしたちよつどその時、俺の隣で水が跳ねた。

「ぷはあっ!!」

勢い良くすずかが顔を上げ、次いで視線をこちらにずらし、俺を見つけると朗らかに笑った。

「俺の勝ち、だな」

「うん。また負けちゃった」

おおなんと可憐な事か。

これがアリサならばぎゃーすかぴーちく喚いた後でもう一度勝負だとか叫んだ事であろう。

「でも段々速くなってきてるじゃないか」

「追い付けなかつたら負けだよ」

「俺も負けないように必死なのさ」

共にプールから上がり、プールサイドに腰かける。

「まだまだ遠いなあ……祐一君には」

「いつか追い抜かれそうな気もするがね」

「次は勝つよ?」

「そう簡単には負けてやれないな」

言ってまたお互いに笑い合つ。素晴らしいライバル関係じゃないかと思つね。

「うん！ あ、それとね……」

「なんぞどうした？」

何故かもしもじし始めたすずか。可愛いねえ……いやどうしたのかわからんけども。

「ノエルがね……お詫びしたいから家に来て欲しいって……」

「嫌じゃ」

「うう……即答。駄目かな、やっぱり」

ノエルというのは、すずかとの初めての会合の際にめっさ俺を睨んでくれたメイドさんの名前である。

実は何度もお詫びという名目で誘われているのだが、いらんと突っぱね続けて早1年。俺だけいまだにすずかの家に行った事はない。

「お詫びなんぞいらんと何度言ったらわかるんじやい」

「ううん。で、でもノエルが……」

「ぶつつつに呼んでくれたなら行くんだがな」

「えっ……ほ、ほんと!？」

すぐに食い付くすずか。

「そそそ、それじゃあ今日家にあそびにきませんか？」

何故敬語？

「というわけで、やって来ました月村家」

「ゆーいちくん、誰に説明してるの？」

「大人の事情だよなのは」

別段描写するものもなくあつという間に放課後となり、学校帰りのお馴染み4人は、特に各々の家に帰らずに聖祥の制服姿そのまま真つ直ぐすずかの家へ。

「っていうか、でかいな」

「アリサちゃんの家程じゃないよ」

「大して変わんないわよ私の家もすずかのところも」

実はなんとアリサも超が付く金持ちの家のお子さんで、一度お邪魔した時は非常にでっかいお屋敷にびっくらこいたもんである。なんとという漫画的金持ちさん。

「さ、入って入って」

「「「お邪魔します」」」

豪邸、と言つて相違無いであろう月村家。アリサの家とはまた趣が違つと言えはいいのか、落ち着いた雰囲気のお宅である。

「お帰りなさいですか」

「お帰りなさいですかちゃん」

「ただいま。お友達を連れて来たよ」

俺たちを出迎えてくれたのはメイドさん2人組。いつぞやのおつかねえメイドさんと、初めて見るメイドさん。

「祐一君に紹介するのは初めてだよ。うちのメイドさんで、私の大事な家族でもある」

「ファリン・K・エアリヒカイトです！」

髪の毛の長い……まだそれこそ少女と言つても過言ではないくらいの女の子が元気に頭を振る。

中学生くらいにも見えなくはなく、ぎりちよんで高校一年生とでも言つところか。

「初めましてファリンさん。すずかさんとは仲良くさせてもらつてます、八神祐一です。よろしくお願いいたします」

「はい、こちらこそよろしくお願ひいたしますね……」

とりあえず初見のイメージは元気っ娘か？

「それでこつちが……えつと……」

続いてすずかは髪の短い方を　まあ件の女性なんだが　紹介しようとして吃る。

というか今気付いたんだが、なんじゃろうかこの空気。俺とノエルさんとやらを交互に見るすずかの顔にはありありと不安が見て取れるわ、そのノエルさんは視線が定まらず非常に動揺まくっているわ、内情をよく知らないであろう3人は雁首揃えて疑問符を浮かせているわで……なんなんだろうなこれは。

「……月村家のメイドをさせてもらってます、ノエル・K・エーアリヒカイトです」

「まあ……いつぞやはどうも」

「……その節は申し訳ありませんでした」

「いや別に良いですから」

深々と頭を下げられても、いまいちピンとはこないのだが……。それでもノエルさんが一頻り謝り倒して、俺が許すと言った事でようやく双方の痾のようなものは消え去った。

すずかの姉である月村忍さんにも挨拶が出来、しかも彼女もスパロボフリークであるらしく話が弾むこと弾むこと。

メイドさん2人も含めて皆でスーパーロボット対戦で盛り上がり、忍さんに辛くも勝利した俺は月村家に大いに気に入られる事となった。

俺としても家族以外に良き対戦相手が出来たことを嬉しく思っている。

「……お邪魔しました」「」

「みんなまた来てね、特に祐一君は私と勝負だ！」

「はっはっは、俺の斬艦刀に断てぬ物無しですよ忍さん」

「くっ……私のグルンガスト零式は決して型遅れなんかじゃないということを次こそは証明してくれる！」

「次の戦を楽しみにしておこう！ はっはっは！」

随分ノリが良いので、ネタだけで話が成立してしまう……。恐るべし忍さん！

月村邸を後にし、なのはとアリサを各々の家まで送り届けて帰宅。半ば空気と化しているながら行動を共にしていたアーチャーが俺の本日の行動を一切の偽りなく遅い帰りにご立腹のはやてさん他多数に報告。

俺は刻の涙を見たね。

その夜は忘れられない、でもどちらかと言えば永遠思い出したくない夜になってしまったが故に……。

「今こうして聖剣を振りかぶっていたとしても、なんの謂れもないわけだ」

蒸し暑い深夜の八神家の庭に、紅いターゲットを呼び出し、光輝く黄金の剣を突き付ける。

「いや、待て祐一。それは洒落にならんぞ」

何を言っているのかこのお間抜けは。

「エクス……」

「待て待て待て！ 私が悪かったのか！？ では逆に問うが君は彼女らの気迫を見て尚あの場を退けることができたと言つのかね?!」

「ふっ……知ってるかいアーチャー?」

「な、何をだね……?」

及び腰、さらには夜間にも関わらず喚きまくるアーチャーを見やり、俺は用意しておいた全てを台無しにする言葉を言い放った。

「八つ当たりとは……良い言葉だ。約束された《エクス》……勝利の剣^{カリバー}!!」

「ぬおおおっ、本当に撃つただとおっ!? 熾天覆う七つの円環^{ロ・アイアス}!!」

迫る極光は最上級。急場凌ぎの盾1枚で防ぎ切れるわけがなく、紅いアンチクシヨウは華麗に夜空の星となった……めでたしめでたし。

美味しいご飯と心安らく寝床があればあとはなんもいらねえさ(前書き)

どうも、お久しぶりです雷泥です。

前回、次はなるべく間を空けないで更新するぜ！みたいなことを言っていた気がしますがそんなことはなかったぜ！

すいませんでしたーっ！！

そして今回の話もとんでもなく短いです。

重ね重ねすいませんでしたーっ！！

それでも見捨てないで私の作品を見てくださる読者の方々……ありがとつございます！！
それでは、どつぞー！！

美味しいご飯と心安らく寝床があればあとはなんもいらねえさ

秋である。

相も変わらず中間の描写はないものの（メタ発言はやめましょう）、我が八神家はそれなりに平和な日々を送っている……はずである。今日も今日とて学校終わり、本日の護衛ライダーと共にスーパーに切れかかっていた調味料何ぞを買いに行き、意気揚々と歩いていた帰り道。

とりあえず家の方面から上がっている煙については現場に行つてから判断しよう。

「ゲツホ、ゴツフォ……煙いぞ……何してんのさ！」

「お帰り祐！」

白煙上る我が家の戸を開けば、何やらアーチャーが白煙の原因だったようだ。

「この煙は何なのさ！」

「秋刀魚だ」

「何故に！」

「秋と言えば秋刀魚であろう？」

「いやでもこのげぼっ……煙は？」

「ふむ……どうせだから七厘で焼こうと思ってな」

しれつと言いやがりますかこの男は。

七厘に置いていた何匹もの秋刀魚をどこから持ってきたのか皿に移しつつアーチャーは笑う。

「良く焼けてさぞかし美味いだろうからな。今日の夕飯は期待してくれてかまわんぞ？　ところで味はどうしようか、薄く塩で味つけたのだが……やはり大根おろしにばん酢が良いか。いや軽く醤油を垂らすのも良いかもしれんな」

どうでもいいが、このアーチャーお兄さんはこうやって料理をする時の方が輝くな。

俺は適当に任せると言って家に戻り、まだ立ち上る白煙を見てため息を吐いた。

「美味です」

夕刻。食卓に並べられた秋刀魚を見て、真剣な面持ちで食したセイバーは、ゆっくり咀嚼して二度頷くと賛辞を述べた。

そんな敵かな雰囲気でも思ってたが、その後は尋常でない速度でパクつき始めた。

「確かに美味しいなあ……」

旬であることで美味しいのも関係しているのだろうが、綺麗に小骨が

取り除かれていることもその一因ではあるはずだ。

どれだけの時間をかけてやったのかはわからんが……ストレスなく食べれるのは嬉しいな。ただ、ちまちま骨を取り除くアーチャーの姿を思い描くと……笑う。

「うん、美味しい」

「褒めてもらえるのは嬉しいが、その変な笑顔はやめてもらいたい」

「全俺が泣いた」

「なんだそれは」

秋刀魚が美味しかった昨日を思い返すと、本日はまた違った秋の味覚を楽しみたいと思う。

「栗ご飯とか……いいな」

ほんのり甘い栗と、これまた醤油なんかの調味料で薄く味付けされた新米が……。

「いかんいかん、涎が出るところだったぜ……」

まあ、食欲の秋と言われる位なわけだしな。食に心惹かれるのも無理ないさ。

さて……そんな俺がいる場所だが、まあ全体を紅葉が彩る広大な広場なんだ。

何故か？

理由としては猫に連れられてって言ったら誰か笑ってくれるか？

「うん、こんな綺麗な所に連れて来てくれてありがとうとよにゃんこる達」

にゃあと鳴く同じような猫2匹。実に不思議な話だが、適当にぶらぶら散歩していたところこいつらを発見……というより擦り寄ってきた。

猫には違いないのだろうが、さして詳しいわけでもない俺にだってわかるくらい珍しい種じゃなかるうか。

そんな猫2匹に誘われるままに、家から離れたこの広場にやってきた。我ながらアホな話である。

途中でペットシヨップによって礼代わりにと購入しておいた猫缶を開けて2匹の前に置く。すんすんと臭いを嗅ぎ、2匹共にパクつき始めた。

いやいや、中々素晴らしい食べっぷりではないか。

おなか空いちよったんかしらん？なんて眺めると、あつという間に食べ終わったようので、2匹はまたにゃあと鳴いて擦り寄ってきた。

俺がすぐ近くに設置されていたベンチに座ると、挟むように両隣に猫が飛び乗った。

「うむ……こつやって出会ったのもなんかの縁かな……」

左に座る猫を抱き上げ、確認。

「君はメスか……」

右に座る猫に目を向けると、なんとなく焦ったようににゃあと鳴いた。そう見えた。

「君もメスか？」

肯定するように下を向く猫。これが頷いたとなれば、もしかしたらこいつらは物凄く頭が良いのかも知れない。

抱き上げていた猫を膝に置くと、何故かプルプル震え始め、どうしたのかなあととりあえずその背を撫でる。

しばらく撫でてしていると震えは収まり、気持ち良いのか為すがままとなっている。

すると右隣の猫が……。

「よし、君は1号。君は2号だ」

右隣に座ってる猫を2号、膝に乗ってだるんとしている方を1号と決めた。

2号がにゃあと一鳴きする。

「なんぞ構えって言うのかな？」

それじゃあと、2号を空いている手で撫でる。

やがて2号もふにゃんとし始め、しばし2匹を撫でながらポーツとする俺。

秋風が吹き、木々が揺れる。

ああ、平和だ……。

「ん……」

どうやら俺は眠っていたらしく、にゃあと鳴く2匹の声で起きた。辺りを見れば既に夕方、紅い世界に緋が栄える。

「こりゃまた綺麗だね……君らもそうは思わないか？」

その問いに答えるように、にゃあと鳴く猫2匹。やっぱり頭が良いのかもしれない……。

「そろそろ帰るかな……」

呟くと膝上に乗っていた1号が飛び降り、それを追うように2号もベンチから飛び降りた。

「そうか、君達も帰るか」

俺をじいっと見上げる猫2匹。最後にその頭を一撫で。手を離すと1号2号はしゅたたたと走り去ってしまった。行っちゃまったかあ……。

「帰ろ」

今日の晩御飯はなんぞやな……なんて事を考えつつ、俺は帰路に付いた。

某所、とある2人の会話。

「見られた……見られた……」

「お、落ち着きなつて……別にそんな意味じゃないだろうしさ……」

「うああああああ……」

「くっそう……あいつ絶対に許さない！」

そう言つて握り拳を作り闘志を燃やす片割れの女性。

もう一方の女性が何やら酷く心に傷を負っているように見えるが……

…まあ気にすることでもあるまい。

よくよく考えてみりゃこれじゃ話がぶれちゃいねえか？（前書き）

どうも、雷泥です。

ひっそりこっそりビクビクしながら更新。

ようやくここここまでこじつけましたが、見切り発車って恐いですよね。

なんだかねで次回より、魔法少女リリカルなのは本編の方に進んでいくと思いますが………頑張ろう。

では、ごきげん。

よくよく考えてみりゃこれじゃ話がぶれちゃいねえか？

「ふぁ……」

爽やかとは言えない気だるい起床。よつぼど最近の修行が疲労を溜め込んでるのかとまだ眠らせてくれと抗議する脳味噌の片隅で思考する。

外はまだ薄暗く感じたのだが、時刻は既に常の起床時間である7時を回っている。ふと見た窓の外は1メートル先も見えない程に激しく吹雪いていた……。道理で。

なんて事も考えつつ、俺はもう一度情眼を貪るべく布団を頭から被り直し、瞼を閉じて……

「朝ですよウイチ」

寝れなかった。

「起きてくださいウイチ」

ユサユサと揺さぶられ寝惚け気味だった俺の脳味噌は覚醒し、少しばかりの疲労感を伴わせながらも我が体に起きろと命令する。がしかし、従いたくない。

「起きたくないでござる」

「起きてくださいユウイチ」

「嫌でござる」

「いいから起きなさいユウイチ」

「働きたくないでござる」

「何の話ですかユウイチ」

誰もが思う理想だ。

「こうなれば……強行手段です」

ガシッと布団が掴まれ、次いでガバツと布団がひっぺがされた。

「……寒い」

「わかっていきます。着替えてください、朝食ですよ」

心の中でおによれ鬼め……と呟きながら、俺はノロノロとした動きで寝間着を脱ぐ。

うろう……寒いぜ。

セイバーに見守られる中……って何故に見てるんでしょうか？

「いやあの……見られてると非常に着替え辛いのですが……」

「また眠られては困りますから」

半眼で言われる。

「もう起きたよ」

「……」

わしゃ信じちよらんけんと言わんばかりの訝しげなお顔。

「大丈夫だつてば……」

そりゃ確かにまだ眠気はあるが、また寝たら確実に獅子の咆哮が耳に直撃すること必至なわけだし、そうなると無意味に心臓がドキドキしちゃうので俺としては避けたいのである。

となれば、最早眠い目擦りながらも起きてる他あるまい。どうせ活動し始めたら完全に頭が起動して夜になるまでは眠くならんはずである。

「……わかりました、私は先にリビングに行っています。ユウイチも着替えたらすぐ来るように」

そう言つてセイバーは部屋を出ていってくれた。俺は止めていた手を動かし、半ばまで下げていたパジャマを完全に脱いで、タンスの中に入っていたTシャツとズボンに着替え、セイバーの後を追うように部屋を出た。

おかずの取り合いという八神家の毎朝の風景は割愛するとして、ふと外を見やれば、多量に降りそそぐ雪と激しく荒れる風のせいで、本日は一步も外に出ることは叶わなそうであった。

「うゝむ……これではおちおち買い物にも行けんのう」

これだけ視界が悪いのでは流石のサーヴァントと言えど危険ではある。今の彼らは実質性能的な意味でチートではあるものの、本質的には人間と変わらないように、寒いのは嫌みたいである……と、炬燵でぶにやぶにやしているセイバーを見て思う。

まあ幸い、ある程度は食料もあるので、いきなり飢えに苦しむことになるなんてことは無いのだが、何日もこの天候が続かれると不味い。

日本は雪国というわけじゃないので、そう何日も続きはしないとと思うが……どうなるやら。

「まあ最悪、宝具で雲ごとぶっ飛ばしゃいいよな！」

1人うんうんと頷いていると、ふと後ろに人の気配。

振り向けばそこには金髪でガラの悪そうな男が立っていた。

「何をしているのだ？ 祐一よ」

言わずと知れたギルガメッシュである。

「んやあ、今日は外に出れないなあ……なんて思ってただけさ」

俺がそう言うと、ギルガメッシュも視線を上げて外を見る。

「……今日は我も暇だ。共にゲームでもしようではないか」

実に気持ちの良い笑顔で誘う。ギルの場合、今日はというか毎日暇ではないのだろうか等と思ったものの、どうせ自身も暇なことには

変わりないので、俺は快く頷いて肯定の意を示しその誘いを受けることにした。

本日の予定というものが何もない八神家一同は、炬燵にぎゆうぎゆう詰めになりながら皆でスーパーロボット対戦でバトルに興じていた。

ゲームの状況だが、とりあえず今参加しているのはギルガメッシュにライダーにセイバー、そしてはやて。

俺はそれを眺めながら、もしよもしよとみかんを頬張っていた。

大破したグランゾンがネオグランゾンとして戦場に復帰。蹂躞が始まる……。

「地獄絵図だな」

「まあグランゾン相手じゃなあ……」

呟く間に画面内でネオグランゾンに撃墜されるサイバスター。
流石チート機体……。

「ふははははははは！ 我のネオグランゾンに勝てる者などいないのだ！」

「……アルトアイゼン」

腰に手を当て仁王立ちのまま固まるギルガメッシュ。
うーん、面白い奴だなあ……。

「………今度は負けん！」

なんという負けず嫌いか。

「次は我々の組だな」

アーチャーがライダーからコントローラーを受け取る。それに続いてギルガメツシュからランサーが、セイバーからキャスターが、はやてからアサシンがコントローラーを受け取った。

組、というのはトーナメント制にしてみた故。ちなみに余っている俺とバーサーカーはくじ引きにてシード権獲得である。

最後まで生き残った上位2名が駒を進め、準決勝にて更に上位2名が選出。最後に俺とバーサーカーを加えての決勝だ。

今のゲームで勝ったのは……ギルガメツシュとはやてである。作戦開始！の文字と共に、新たな戦いが始まる。

幾度の戦場を越えて不敗。

それは伊達じゃなかった。

先のゲームはアーチャーが制し、次いでランサーが勝ちを拾った。

アサシンも大健闘である……視界の隅に映るカーペットにのの字を書いていじけてるキャスターはさて置いて。

「……新旧2人の弓兵と槍兵……そして子狸が雌雄を決する時が来たのであった……」

「誰が子狸やつ！」

「ふっ……幾度の戦場を越えて不敗……不敗か……」

黄昏る紅い背中。

「我が……我が負ける……だと？」

虚ろになった赤い瞳。

何処か知れぬ場所を遠い目で見つめる弓兵2人の姿がそこにあつた

……。

まあ……敗者は見てわかる通りだ……。

「やれやれ……にしてもはやて強くなつたなあ」

「へへへえ……特訓したんやもん！」

ぶいっ！と元気良く2本指を突き出すはやて。

やべえ俺の妹可愛い。

気付けばその柔らかい髪の毛を撫でている俺がいる。

がしかし、誰がこの俺を責められようか……想像してみるといい、頬を朱に染めふにやっ嬉しそうに笑いながら「くすぐったいで、もうっ……」とか言ってくるんだぞ……やっべえ俺の妹超可愛い。

「よしっ、はやて分は補充した。さあ始めようか」

「なんだそのはやて分ってのは……」

気にしたら負けだ。

目の前に映るは敵の姿。

ソウルゲインに虎龍王、空を羽ばたくヴァルシオーネ。

更に大軍圧して飛来するガーリオンの群。
進軍するように敵は俺に向かってきていた……………ん、あれ？
これ全機ターゲツト俺じゃね？

「兄ちゃんは先にやっちゃわないとあかんもん」

「勝つつもりであれば余計に……………な」

「まあつまり……………共同戦線ってわけだな」

「鬼だお前ら」

俺が操る赤い機体、アルトアイゼンリーゼが走る。

バーニア噴かしてえんやこら、近寄って来たガーリオンをプラスマ
ホーンで粉碎。

5連チエーンガンで更に迫るガーリオンを数機破壊。
気力が上がる。

「どつちかつつとお前の方が鬼みてえな強さだけどな」

ランサーの言葉を見無視し、俺は新たな敵を求めて走り出した。

死屍累々と横たわる何十というガーリオンの残骸。

そこに埋もれるように倒れるヴァルシオーネと、半壊した虎龍王。
荒野に、所々に傷を負った鱗だらけのアルトアイゼンリーゼと、同
じように傷を負いかなり磨耗しているソウルゲインだけが、相対す
るように立っていた。

『ベーオウルフ!』

『決着を付けるぞ……アクセル!』

突風が砂塵を巻き上げたその時、両機が急速に接近する。

5連チエーンガンが火を噴き、連続で十数発の銃弾がソウルゲイン目掛けて突き進む。

『甘いっ!』

ソウルゲインがステップ移動で弾丸を避け、予備動作に入った。

『貫け、玄武剛弾!』

高速回転を伴いソウルゲインの肘から下が巨大な弾丸となり、敵を挟り殺さんと飛び出す。

ブースターを一気に最大出力で噴かし、何とか回避に成功したアルトアイゼンリーゼに、追撃をかけるべく加速するソウルゲイン。

双方共に満身創痍ではあるものの気力は十分……先に必殺の構えを取ったのはソウルゲインであった。

『うおおおお!』

アクセル・アルマーの雄叫びと共にソウルゲインが高く飛び上がり、その手に青く燃えるエネルギー弾、青龍鱗を生み出す。

『くらえ!』

それはまるで雨のようにアルトの頭上に降り注ぎ、完全に回避出来ずかなり被弾してしまったが、敵の攻撃はまだ終わっちゃいないの

だ。

アルトの体に当たらなかつた青龍鱗が地面にぶち当たり、巻き上がった砂が煙幕となつて視界を遮る。砂煙の中を突つ切るように現れるソウルゲイン。こちらが標的を完全に捉えるよりも速く、鬪気の籠つた拳が怒濤の勢いで振るわれた。

『くっ………』

残像が残る程のラッシュ。ぼろぼろになっていく装甲にキツイアツパーが加えられ……

『これで決める………コード麒麟!!』

ソウルゲインの肘から伸びるブレードが一際巨大になり、蒼白く燃え、打ち上げられたアルトの体を真つ二つに切り裂かんと迫る。刃が下から縦一文字に動いたその瞬間、ダメージにより硬直していた機体のコントロールが戻つた!

『くっ!!』

ステップ移動で機体を右にずらし避ける。避けた時に左腕を持っていかれたが、この状態ならば………まだ行ける!

『伊達や酔狂でこんな頭をしているわけではないぞ』

アルトの頭部に付けられたプラズマホーンが電撃を伴わせ発光、頭突き的要領でソウルゲインの顔面にぶつけ、自機ごと地面に叩き落とした。

『どんな装甲だろうと、撃ち貫くのみ!』

右腕に装備されている巨大な杭打ち機^{ステーキ}……リボルビングバンカーを振るう。いまだダメージの抜けていないソウルゲインに追い撃ちを掛けるように、ステーキで殴り付け……放つ！
六発分の衝撃がソウルゲインの装甲を貫く。

『全弾持つていけ！！』

弾切れとなったステーキをソウルゲインから引き抜き、両肩に装着されたアヴァランチクレイモアが口を開け、何十発というベアリング弾が歪に破損したソウルゲインの機体に穴を開けていく。
クレイモアの爆撃によって浮き上がった機体は煙を上げ、次の瞬間爆発四散した。

『切り札^{ジョーカー}を切らせてもらった……この勝負、俺の勝ちだ』

立ち上る黒煙が空に消えていくのを見上げながら、キョウスケは呟いたのであった。

画面上に現れるWINの文字。

最強を決める激しい戦争を制したのは、この俺であった。

「くあーっ！ 負けちまったかー！」

どこか満足げにランサーが叫ぶ。

横でバーサーカーとその膝上に収まっているはやてが笑っており、後ろでアサシンが俺の勝利を讃えている。

流石私のマスターなんぞとくすぐったい言葉と共にキャスターが俺

を抱き寄せ、その俺をライダーが頭を撫でた。

何故かセイバーが俺の方を見ながら、しまった！的な顔をしているのには少し疑問を感じたが、まあいつものことか。

未だ遠い何処かを見ながら黄昏ているアーチャーとギルガメッシュを除いて、我が家は概ね幸せであった……。

外は大雪だったものの、ささやかながら幸せで暖かかった、そんな寒い冬的一幕である……。

この時、俺は翌年とんでもなく大変な目に会うことになるとは思ってもしなかったのである。

いのちをだいじに！魔法少女リリカルなのは「第1話：始まる物語」（前書き）

どうも、雷泥です。

相も変わらず遅筆ですいませんごめんなさい申し訳ありません。

さてさて、毎度毎度色々な理由を付けては遅れる。そんな遅筆な私ですが……ようやく始まりですよ、リリカルなのは本編が。

これもひとえに、応援してくださる読者の方々のお陰でございます。とはいえ、やはりリリカル人気やFate人気は根強いですね。まだおんぶに抱っこですが、頑張って書き続けます。

では、どうぞお楽しみください。

いのちをだいに！魔法少女リリカルなのは「第1話：始まる物語」

白い光に包まれた、どこともわからない空間に俺はいた。

眠ったという意識もあれば、自分が何なのかちゃんと把握している。つまりこれは夢だと、はっきり理解できる。

……ケ……ダ……。

声が聞こえる……。

何だろうかと耳を澄ませば、少しずつその声ははっきりと聞こえてくる。

……ケテ……サイ……。

途切れ途切れのそれは、次第に確かな音となり。

ダレか……すけ……ださい……。

完全な形となって、俺に届いた。

誰か……助けて……ください……。

「……ああ、そういうことか」

えっ……誰か……聞こえました……か？

「おおっ、会話できるのか。夢にしちゃよく出来てんなあ」

お願いします……助けて……。

「ふむ……OKだ。どこの誰とも知らないが、俺に手伝えることがあるなら手伝おう」

ほ、本当!?

「嘔吐しても仕方ないだろ?」

ありがとう……。

「礼はまだ早いな。助けに行つてやるから、何処に行けばいいのか教えてくれ」

わかつ……。

急速に覚醒する意識と共に、声が掻き消えていくような感覚がした。

夢を見た……それもとびきり変な夢をだ。

ぶつちやけ夢の中の誰かと会話しちゃうとか何よ?

もしかして俺そつという病気?ちょっと病院行って診てもらわなきゃいけない類い?

いやいやいや、それは違う絶対違う限りなく違う。

だって俺ちゃんと自覚あるもの。パープーな感じじゃないもの。

「あれ? 俺誰に弁護してんだ?」

もしやこれも病気？

いやいやいや、もうやめよう。朝っぱらから非常に疲れた。気だるさの抜けない頭に平手打ちで湯を入れ、着替えリビングに向かう。

「あつ、兄ちゃんおはよう」

リビングに顔を出せば、すぐに西の方向的なイントネーションの朝の挨拶。言わずもがな、我が妹のはやてだ。珍しく俺よりも早く起きてきていたようで、八神家一の早起きさんであるアーチャーと共に台所に立って全員分の朝食と、ついでに俺達の弁当まで作っていた。

「おはようはやて。おはようアーチャー」

「おはよう祐一」

俺の挨拶にアーチャーが返す。

そうそう、最近になってはやてが台所に立つ回数が増えている。何故にと聞けば、料理がすこぶる楽しいってのと、俺とアーチャーがいない時に、自分が料理をすれば無駄にお金を使わんでいいから…
…だそうで。

兄としては、実にしつかり者のいい子に育ってくれて助かると同時に嬉しいってなもんだ。

とは言え、やはりまだまだ子供故に早起きには慣れないみたいで、台所に立って練習できるのは昼頃くらいなもんだと記憶していたのだが。

「今日はずいぶんと早くないかはやて？」

「ん〜……変な夢を見てしもたからかなあ？ 今日早く起きてきたんや」

生卵をカシヨカシヨと掻き混ぜながらはやてが言う。

「変な夢？」

「うーん……ようわからん声が聞こえてきてなあ？ なんか言っとつたのはわかってんねやけど……」

「あー……それなら俺も見たな」

あまつさえ会話までしちゃったけどな。

「へっ、そうなん？」

「俺もなんかの声を聞いたな……まあはやてのと同じかはわからんが」

俺がそう言いつつアーチャーから受け取った白飯をテーブルに並べていると、いきなりはやてがいやんいやんとクネクネし出した。

「えへへえ……夢まで兄ちゃんとお揃いやなんてえ……」

「とりあえず菜箸振り回すのは止めなさい。危ないし」

相も変わらずはやてはたまにわからなくなる……。アーチャーと顔を見合せ、同時に嘆息しながら、俺はどこか遠い世界に旅立ったはやてに拳固をいれるのであった。

きつちりと朝食を取り、めんどくさいながらも学校へと向かう俺。
偉いよなあ……俺ってば。

「はて……？」

いつもならこの辺りで「おはよう！ ゆういちくん！！」と元気良
く聞こえてくるはずの音が今日は聞こえない。

「まあいいか」

大方寝坊でもしたのだろうと当たりを付けて、俺は歩を進めた。

「ゆーいちくん……！！」

しばらく行くと、遙か後方から馴染みのある声。
とりあえず一度振り返り、視線を固定したまま歩く。
というか走る。
後ろ向きで。

ついでに爽やかな笑顔で。

『キャスター、サポートよろしく……』

『無駄なことするわね貴方も』

『全力でからかうと面白いんだなこれが』

とりあえず人がいないことを確認しつつ、追いつかれそうで追いつかれないギリギリの速度で走る。

なのは嬢がぜえぜえと息を荒くさせ立ち止まる度にこちらも立ち止まり、走り出すと同時にこちらも走り出す。

三度くらい繰り返した辺りで飽きたので止めた。

よく見ればなのは嬢は目尻に涙なんぞを溜めながら必死に追いつこうと走ってきている。物凄くスローリイだが。

少女は止まってぼんやり眺めていた俺の前まで来ると、荒い息を整える前に怒ったように俺を見る。

「ひどいよゆういちくん!!」

というか怒っていた。

「おはようだな、なのは」

「今日はごまかされないよ!!」

「おはようだな！なのは！」

「お、おはようなの……ってそうじゃないの！もうっ!!」

「何を怒ってるんだよなのは……こんなに清々しい朝なのに」

4月ということで、春の陽気に包まれて、太陽が優しく大地を照らし、心地よい風がふわっと通り過ぎていく。

いい日だな……。

「ゆういちくんのせいなの！ どうしてなのはを置いてこうとしたの!?!」

「いやあ気付かなかったやあ」

「ウソだよ！ こっち見てたの！！」

「あ、寝癖になってるよ？」

「えっ！？ ど、どこのの！？」

「ここだよここ、なんて言いつつみよんつと跳ねていた髪を撫で付ける。」

「これでOK」

「うん、ありがとうなの！ えへへ……………あれ？」

「さあ学校に行こうか」

「う、うん……………あれ？」

何故か頭に疑問符を浮かべているなのは手を握り、すたすたと歩く。いきなり引つ張られて驚いていた彼女は、思考がはつきりしたのか遅れまいと俺の歩くスピードに合わせて歩きだすのだった。

聞こえてる……………？

退屈なと修飾語まで付けちゃう授業中、惰眠を貪っていた俺は、またもや謎の声に囁かれる。

『あゝ……変な夢ってわけでも無かったってことかい』

よかった……繋がった……。

相手の姿は依然としてわからんが、とりあえず声からして安心したようだ。

『お前さんは何よ？ とりあえずこのイメージにはお前さんらしき姿は見当たらんし……見えとるのはぼろぼろの黄色い何かだけだが、これを送ってきてるのはお前さんだろう？ 明らかに生物っぽいし、新手の嫌がらせか何かか？』

やけに傷が多く、血塗れっぽい細長い生物の姿を写し出されても、俺としては困っちゃう限りである。

………ううう………ごめんなさい。

『なんだ、違うのか？』

何故か泣いちゃう声の主。

なんだ、俺が何か悪いことしてるみたいな感じになっちゃうじゃないか！

ううう………嫌がらせじゃないんです………それが僕なんです。

『………ははっ』

鼻で笑わないでください……。……。

『この何やら得体の知れない何かしらの生物（仮）が、俺に話し掛けてきているだ？　なんだ、俺はやはり病気が……治療にいくらかかるかなあ……』

俺がごめんよはやて、兄ちゃん何か頭の病気みたいだからしばらくは入院とかでお前に会えそうもないや等と感慨に耽っていると、泣きそうな声というかこの声しか知れない謎の何かが泣き出した。

わああああん……人を幻覚扱いしないでよおお……。

やたらと喧しく泣く謎の声。とりあえずここは俺の夢の中って事なんだよなあ……それにしちゃ自由過ぎやしないかなこいつ。

『ああ悪かった悪かった……冗談だよ』

うううう……ひっく……うえっ？

『場を和ませる為のちよっとしたジョークだったんだが……まさか泣くとは思わなかった』

ぐすっ……。

『ってかお前さん傷だらけのわりに超元気だな』

あっ……痛い痛い痛い痛い。

それを言つと黄色い何かはうねうね動き出しながら悶え始めた。

『いやそんな思い出したように痛がらんでもいいんじゃないかと思っただがな？』

せつかく痛みを忘れて喋っていたのに……。

知らんがな……と突っ込みたい気持ちを抑えつつ、いい加減本題を出さなくてはと思う。

『で、お前は何故に傷だらけなんかね？』

それは……。

どこか言い辛そうに言葉を濁す生モノ。

『ああ……やっぱいいや』

うえっ!？

『とりあえずその傷治しに行くから……俺の学校終わるまで待つて。ちようど今の授業が終われば向かえる』

わ、わかったよ……場所は……。

『イメージ広げてくれりゃ大体把握できる』

俺に言われるままに広げられた光景は、何といつもの帰り道近くであつた。

『ずいぶんと都合の良いこつて……』

へっ？

『何でもない。んじゃそろそろ授業も終わる頃だ……また後でな』

う、うん……待ってるよ。

意識の覚醒と共に、声が消える。

放課後、例の如く3人娘と一緒に帰り道を歩いていると、あの生モノが見せた林が近付いてきた。

とりあえず探してみるかと足を踏み入れようとする俺に対し、なのは嬢がストップをかける。

「あ、待ってゆういちくん」

「どうしたなのは？　なんだ、おなかでも空いたのか？　やれやれ、食いしん坊だなあ……」

「全く……家に帰るまでもう少しくらい我慢しなさいよなのは」

「あっ、私アメなら持ってるよ。なのはちゃんにあげる」

「違うよ！？　みんなでぼけられたらなのは1人じゃつつこみ切れないの！ー！」

きつちりツッコミ入れてるじゃないかなのはさんや。

「あー……まあそれはいいとして、どうかしたかね？」

「ちょっと良くないけど……えっと、どこに行こうとしてるの？」

「林の中に行こうとしてるだけでいい」

「なんで林の中？」

疑問符を浮かべながらすすすが付いてくる。

「いやちょっとな……」

まさか夢の中で約束したからとは言えないしなあ。

「まあほらアレだ、ちょっと探し物があっただな」

「探し物？」

アリサが小首を傾げて訊ねる。

さて何と答えたものか……。

「まあ……生モノを……」

「はあ？」

「あつ……」

「んにゃ？ どしたいすずか」

俺の後ろに立っていたすずかが林の奥を見て声を上げた。
目を細め、何かを一心に見つめている。

「黄色い……なんだろう……」

「どこだ！」

「えっ……あ、あっち」

さすがが指さした方向に全力でダッシュ。

ああ、俺ってちょっと普通からはかけ離れてるんだなあってことを流れる景色で再確認しつつ、俺達が元いた所から大分離れた場所で動かなくなっている生モノを発見……ってか、ずずかもよく見えたなこんな場所。

「よっ、無事か？」

『……あんまりです』

「遅くなって悪かったな……今病院に連れてっちやるから……もう少し我慢しとけ」

『……はい』

流石に限界なのか、力無く俺に抱き抱えられる生モノ。

どうやら、ちょっと急がなくなっちゃならないみたいだ……。

ぼかんとしていたなのは達と合流し、生モノ……なのは達的にはフレットらしいが……まあ生モノを急ぎ動物病院へ運んだ。

血のせいで大袈裟に見えたこの生モノの怪我だが、俺達が発見したころにはほとんどの傷は塞がっており、少し経てば回復するそうだが心優しい少女達はひとまず安心していただろうだったが、なのはの様

子が少しおかしかったように感じた……。
が、そんなことよりもだ。

これで一応俺が頭の病気ではないと証明されたわけだが……ここでさらに疑問が出てくる。

何故俺とはやてが生モノの声を聞いたのか。

何故生モノはテレパスなんてものを使えるのか。

何故怪我を負っていたのか。

その辺り……訊いてみなければなるまい。

いつもの道まで歩き、それじゃあまた明日と少女達と別れた俺は、
思考を整理しながら帰路に着くのであった。

夕食を取り終えた俺は、夕方に行った榎原動物病院に向かっていた。
夜に1人で出歩くのは中々に危ない、というか俺1人では問題がある
ということ、護衛もとい保護者が付いてきているわけなんだが
……。

「別に護衛なんぞせんでもええやないと思うわけだけれど」

「駄・目・よ・」

どことなくこの人が喜んでいるような気がするのは何故だろう？

「内面はともかくとしても、子どもがこんな時間に1人でいたら怪
しまれるのよ？」

「んなこと言ってえ……本当はキャスターがただ興味あるだけなん
じゃないの？」

そう言つて顔を上げれば、笑顔で明後日の方向を見ているキャスターの姿が。

「……図星かい。」

「うわぁ……」

「うっ……私はあくまで貴方の護衛、保護者として一緒に行くわけであつて……」

ジト目で見つめる俺。

視線を逸らすキャスター。

回り込んで視線を合わせる俺。

キャスターの頬に一筋の汗が伝う。

「……まあいいや。確かに面白そうな事柄っちゃそうだし、キャスターがいてくれるのは心強い」

「そ、そうよね！」

パアツと表情を明るくするキャスター。こういうところ可愛いかも知れんとは思つが……実質キャスターの方が年齢上なんだ……よな？

「……今何か失礼なこと考えなかつたかしら？」

「そういうのって何故にわかるのさ？」

「女の勘って奴かしら……って否定しなかつたわね？」

「……はっはっはっは」

女の勘つてのは恐いな。
そんなこんなをしてる内に動物病院に到着。流石に施錠されていて
入れるわけじゃないので。

『おーい生モノ』

生モノに来てもらおうとしよう。

『起きてるか生モノ、色々聞きに来たんだが……おーい』

何度か呼びかけてみるも応答がなく、なんか空しくなってきた。

「おっかしいなあ……」

「どうかしたかしら？」

「いやさ、生モノからの応答がないんだよね……」

「生モノって……そう呼んでいるの？」

「うん」

名前を聞いてないからねと言えば、よくそれで相手を助けに行けた
わねと呆れられた。

変か……変だな。

続けて呼びかけるが反応は無く、そろそろ帰っちゃおうかなと思
い始めたのだが……何と無しに病院の裏手に回ってみると、病院が
半壊していることに気付いた。

「ありゃりゃ……」

「破壊されてるわね……」

修理にいくらかかるのか……あの獣医のお姉さん泡吹いてぶっ倒れるかもしれないな。

「あら……」

「どしたのキャスター？」

裏手から続く林に目を向け、キャスターは面白そうに笑った。

「貴方も意識すればわかるわよ？」

同じように林の方に目をやれば、何か違和感を感じる。

「……何かヤバイものの気配がする……」

「そうね……行きましようか？」

「……だな」

直ぐ様走り出す俺に浮遊して付いてくるキャスター。

林はつつすらと闇に包まれていた……。

暗闇が続く林を走ること数分、違和感を感じた場所にたどり着いた。そこは少し開けた広場のような所であり、違和感の正体は恐らくこの目の前にいる黒い何かだ。

禍々しさすら感じる黒い影のような何か……は、わりとどうでもいい。

俺としてはむしろ、ここにはいけない人間の方が気になる。

「ふえ……ゆ、ゆういちくん？」

「なのは……」

何故君がここにいる？という言葉を紡ぐ前に、その姿を見て俺は止まる。

白を基調とした、どこか……そう、言ってしまうえば魔法少女チックな服装。聖祥の制服に意匠が少し似ているが、まさか私服？いやいやまさか。

いくらなのはがちょっとお間抜けさんの女の子だとしてもだ、これが私服なわけないさ。うん、きっとそうさ！

「あつ！ 危ないゆういちくん！！」

驚いたようになのはが悲鳴を上げた事で、どっかに行きそうだった意識が戻る。

威嚇するように唸り声を上げていた黒い影のようなものは、いきなり現れた俺を敵と判断したらしく中々の速度で突進してきた。

咄嗟の事に俺も驚いたが、即座に思考を切り替えてイメージを造り出す。

「トレース
投影」

「オン
開始」

両手に干将・莫耶を造り出し、剣を十字に構えることで突進を真正面から受け止める。

「なんだお前？」

聞く声に応える事はなく、黒い影は俺を抑え込もうと徐々にその力を増していく。

ふと腕に込めていた力を抜けば、影の為すままに俺の体が後ろ向きに倒れ込んだ。

「ゆういちくん!!」

倒れ込む勢いそのままに、黒い影に思い切り蹴りを叩き込む。

体を引き起こし、空中に高く弾き飛ばされた影に干将・莫耶を投げる。

投げた剣は影を何度か斬り付けて俺の手元に戻ってくるが、引き戻したその存在を消し、新たに弓を投影。

同じく造り出した矢をつがえ、影に向けて射ち込んだ。

「す……すごい……!!」

衝撃で俺達から少し離れた所に落ちる影。その様を見たであろう聞き覚えのある声の上げる感嘆に少し気分が浮わつく。

「へっ……」

視覚的には中々の様に見えるが、どうやらそうでもないらしい。

黒い影はウヨウヨと獲物を狙い定めるように起き上がる。俺は投影を廃棄し、また剣を造るべく集中した。

「ああっ、それは封印しなくちゃ駄目なんです!」

また生モノが喋った。

「……だってさキャスター」

「あらそう、まあ封印処理程度なら特に問題はないのだけれど……見たところ中々の魔力を保有しているみたいなのよね」

いつの間に近寄って来ていたのか、隣に立つキャスターはその目を爛々と輝かせていた。
うむ、ものすごく興味津々でがんす。

「良い研究材料になりそうだわ、あの塊」

「そうかい。んじゃ、アレの動きを少し止めるから……ちやっちやか封印しちゃってよ」

「わかったわよ、ご主人様」

「その呼び方止めてくれると嬉しいなあ……」

イメージするはアレを地面に縫い付ける為の杭。まあ5本もありや充分か。

「トレスオン 投影、開始」

俺の周囲に現れるは5本の長剣。とりあえず無銘だけど、十分な硬さと重さがあるはずだ。

「……!!」

「声にならない声ってのはこういうのを言うのかね？ まあ大人し

くしてくれ……行け」

解放すると5本の剣は閃光となって見事に影を捉え、地面に縫い付けるように刺さった。

人体にやったら痛みで発狂するなあれ。

「キャスター？」

「はいはい、それじゃあ行くわよ？」

「ちよっ、ちよっと待って！」

さくつと終わらせようとする俺達の前でぴょんぴょん跳ねる生モノ。

「なんだよ生モノ……さっきからぴーちくぱーちく、お前は鳥か？」

「生、生モノってまさか僕のこ……そもそも僕は鳥じゃないですよ、見ればわかるじゃないですか……！」

「喧しい奴だなあ……」

つていうか鳥かって比喻なんだけどなあ……まあいいや。

生モノは俺とキャスターから目を逸らし、ぼけーっとしていたなのはに声をかけた。

「君、いいからやっちゃって！ 封印すべきは忌まわしき器。ジュエルシールド！」

「あ、うん。ジュエルシールドを封印！」

『sealing mode・set up.』

なのはの持つ先っぱ金の白い杖から妙齡の女性の声がした。
喋る杖か……ちょっと欲しいな。

『stand by ready.』

「リリカルマジカル……ジュエルシード、シリアル21」

桃色の光がなのはを照らすように輝き、その中でなのはがぐるりと杖を回し……言い放った。

「封印！」

『sealing・receipt number XXI.』

またもや杖が喋り、俺が地面に縫い止めた黒い影にその光が伸びて包み込むと、何故か黒い影は消えていた。

「で……できちゃった……」

封印……したんだろうか。

封印した当人がものすごくびっくらこいてるんだが、それはいいのか。まあかなり強烈な光だったし、俺も多少驚いたけども。

「おい生モノ」

「……その生モノってやめてください」

「わかった。じゃあナマモノ」

「言い方変えただけじゃないですか！」

「そんなことはどうでもいいのだ。お前は俺の質問に答えてくれりゃあいい」

言いながら俺はナマモノの黄色い体をひっ掴み、顔を寄せる。

「なのはあの姿はなんだ？」

「あ、あれはバリアジャケットと言って……きゅっ」

ナマモノの体を握る力を強め、俺は素敵な笑顔をプレゼントする。

「んふふう……そんなことを訊いてるわけじゃないんだなあこれが」

「うきゅっ……き、きついきついきついですう」

「ゆ、ゆっいちくん！ 何してるの!？」

手の中でうごうご蠢くナマモノから視線を上げてそちらを向けば、慌てたように魔法少女姿のなのはが走り近寄ってきた。

「なのは!」

「ふえ!？」

「なんだその格好は!」

「だからバリアジャケットきゅっ」

「賛成でいける」

俺は右手にぐったりとして動かなくなったナマモノを、左手になのはの手を取り、キャスターと共に走り出したのである。

その後、警察に見つかることもなくあの場から逃げ仰せたものの、状況の説明もされぬまま、なのはを高町家に送り届けて今夜は開きとなった。

そして俺も家へと戻り、色々謎を抱えながらもまあ何とかなさりと、俺はベッドに潜り込み眠りについたのであった……。

いのちをだいじに！魔法少女リリカルなのは「第1話：始まる物語」（後書き）

「危険物だな思いつきり」

「魔法というより……科が「魔法です！」……そうか」

「私、頑張るよ」

次回、いのちをだいじに！魔法少女リリカルなのは「第2話：過去の遺物」

「お仕置きしちやるぞこのわんころめ」

いのちをだいに！魔法少女リリカルなのは「第2話：過去の遺物」（前書き）

どうも、雷泥です。

遅れましてすいません。自分の遅筆っぷり情けなく思います。精進せねば。

あ、あとバトンに答えてくださった方々どうもありがとうございます！

とにかくにもよろしくと一話でいじます。

ではいじます！

いのちをだいじに！魔法少女リリカルなのは「第2話：過去の遺物」

さて始めるかと目配せすれば、即座に手を挙げる者がいて。

「ほんなら私から言わして！初めまして、祐一兄ちゃんの妹で、八神はやてって言います」

「は、初めまして。ゆういちくんのお友達で、高町なのはです」

「よろしくね」

色々あった昨日から夜は明けて……学校終わりの夕方、いつものようにアリサとすずかの2人と別れた俺となのはは共に、我が家の前に来ていた。

「まあ、入っちょくれ」

「う、うん。お邪魔します……」

そういえば、友達を家に呼んだのは初めてだな……何故か緊張するぞ。

「おかえり兄ちゃん」

「お帰りなさい祐一」

扉を開けた俺を、はやてが笑顔で迎えてくれた。その後ろには私服姿のキャスターがいた。

「ただいまはやて。それにキャスターも」

「えと、えと……」

「お客さんやね、どうぞ御上がりください」

車椅子に腰掛けたまま、深々とお辞儀をするはやて。

ちよいとばかりズレてるような気もしたが、とりあえず俺も似たような気持ちではある。

「ほいどうぞ」

新品のスリッパを進呈し、俺自身は着替えの為に自室にその身を向かわせる。

「はやて、居間に連れてってあげてくれ」

「うん、りょーかいや。それでは一名様ごあんない」

「ズレてんなあ……まあそういうわけだから、この二人に付いてっ
てくれ」

なのはに振り返りつつ、そう告げた。彼女もまた緊張してるのか、ガチガチになりながらコクリと頷くと、どこかぎこちない動作で靴を脱いで、おずおずと出されたスリッパに足を伸ばして、先を行くはやてとキャスターに導かれながら居間に向かった。

どうにも可笑しく、見送った後でクスリと笑わせてもらい、俺も着替えを済ませるべく足を動かした。

いつものように白いTシャツに黒のジーンズ姿で居間に戻った俺は、興味深そうになのはを見つめる妹を見た。他の面子……まあサーヴアント一同も同じようになのはとナモノを見つめていて、こちらはどことなく真剣な面持ち。居間の中央に置かれているテーブルを舞台上に、英霊達+1VS少女と獣みたいな構図になっていて、思わずたじろいだ……。

流石に複数の人間から正面切って見つめられるのには慣れていないのか、はやての顔を見たりキャスターの顔を見たりと、なのはとナモノは忙しなく視線を右往左往させている。そんな中で、はやては俺に気付くと表情を一変させ、ふにやっと笑った。そのはやての顔を見て、視線の先に俺を見つけたのか、一気にそれまでの不安でいっぱいであった顔を綻ばせて安心したように、はうつと息を漏らすのは。

「なんだこの状況？」

「兄ちゃんが来るのんを待ってたんやで？」

「互いに初対面で色々と事情も込み合っている、且つこの少女と我々を繋いでいるのは祐一のみ。そら、君を待つしかなかるう？」

ああなるほどと納得。
そりゃそつですよね。

「まずは自己紹介が先だったな」

「そついうことだ」

と、ここで冒頭に戻るわけだ。

テーブルの上で握られる手と手。ニコニコと笑い合う二人を見て、
会わせてよかったなあなんて思った俺であった……。

「いやなんかもう話終わりそつな台詞みたいだなこれ」

「どうかしたのですかユウイチ？」

「ナンデモナイデス」

心配げに俺を見るセイバーさん……メタなこと言わんようにしたい
でござる。

「なのはちゃんって呼んでええかな？」

「うん、いいよ！ 私もはやてちゃんって呼ぶね！」

気を取り直して二人を見れば、もう仲良しさんになっているところ
で……うむ、友情ってのはいいね。

「もうすっかり友達さんな二人には悪いけれども、まだ紹介したい
人達はあるのだよ」

「えへへ、せやったね」

実に楽しそうに笑うはやてを見ると、やはり同世代の友達というのは
必要だったようだ。俺が学校に行っている間も、セイバー達が居
てくれたから寂しくないだろう……なんて思っていたが、やっぱ友

達らしい友達っていうのも大切だよな。
うむ、俺はまだまだ兄として未熟なのだな。

「それじゃあこっちのセイバーから」

自嘲気味にくくくつと笑ってから指差し、なのはの視線を俺の隣に立つセイバーへと移す。我が家のただ飯食らいセイバーさんから順に、錬鉄の主夫アーチャー、商店街の御子ランサー、古書の女神ライダー、家事手伝いの魔術師キャスター、鉛色の大工バーサーカー、群青の門番アサシン、黄金のニートギルガメツシュと我が家の英霊達がなのはに自己紹介をしていく。一人一人にぺこにゃんとお辞儀しながらきちんと自己紹介を返すなのはに良い子だなと少し笑わせてもらった。

そしてようやく話が一段落したところで。

「んじゃあ、お前さんの話をしようか」

「は、はい」

テーブルの上にてじっとしていたナマモノに視線が集中したのだった。

スクライア……遺跡発掘を生業とする流浪の一族。

彼らがとある遺跡から発掘したジュエルシードという貴重な発掘品が、輸送中の事故でこの世界に流れ着いた。その発掘作業の現場指揮を執っていたのが、この目の前にいるフェレットっぽいナマモノこと、ユーノ・スクライアだとか。

ジュエルシードをこの世界、というより海鳴市近辺に落つこととして

しまったことに責任を感じたユーノは独力でそれらの回収をしようとしたらしい……がそのジュエルシードが暴走し、1つは封印できたものかなりの傷を負いあえなく倒れた。しかもそのジュエルシードだが、最も厄介な所は動植問わず生物の「願いを叶える宝石」だということ。もしも邪な願いを叶えてしまったら不味い。

そこで、夢という形で俺やはやて、そしてなのはにも思念波を飛ばし助けを求めた。

実は八神さん家のサーヴァント諸君もその思念波は受け取っていたらしく、どうやら魔力を扱える者に無差別で送っていたようだ。

俺やサーヴァント達は魔術なんかの扱いにも長けているし、はやては例の本が関係しているだろうから大して驚きもしなかったが、なのはにそんな特殊な力があるとは思ってもみなかった。

ユーノの話ではこの世界においてそもそも魔力を有していることがまず珍しいから、これだけいること自体予想外だとか……まあ厳密にこの世界出身なのはとはやてのみだから確かに珍しいのかも知れん。

とそこまで話して、ユーノは口を閉じた。同時に、目を瞑って話に耳を傾けていたアーチャーが口を開く。

「ユーノと言ったか」

「は、はい」

「全部でいくつ、そのジュエルシードとやらは存在する？」

「僕が封印したものとなのはが昨日封印したのを除くと19個です」

「もし一つでも最大出力で暴走した場合はどうなる？」

神妙な面持ちで問い掛けるアーチャー。確かに知っておくべき事か

も知れない。

「多分、大規模な次元震が起こると思われれます。最悪の場合、この世界自体が崩壊する可能性だって否定できません」

「ふむ……随分と厄介なものを」

「危険物だな思いつきり」

流石に話のでかさに驚いたのかランサーも冷や汗をかいている。

しかし冗談じゃねえな、何かの拍子に暴走しました地球滅亡しましたじゃ死んでも死にきれないシューノだって寝覚めが悪いどころの話じゃないだろ。

多分こいつ良い奴だし。

何よりそんなことで皆を死なせたくないしな。

「それなら、回収を手伝う他ないよな」

俺の言葉に躊躇なく頷いてくれるサーヴァント達。

「んじゃそういうわけで、俺達はお前に協力するよ。何が出来るかはわからないけどね」

「ぐすっ……ありがとうございます」

「泣くなって。こっちだってそんな危ない物が落ちてたんじゃ安心して授業中も寝れないからな」

「むっ……サボりはあかんとあれだけ言うつつたのに……もう兄ちゃんは」

「私が言っても聞いてくれないよ、ゆういちくんはいじわるさんだからね」

あれ？なんで責められてるの俺？

「……まあ、そんなこたあどうでもいいのさ。次に質問なんだけど、昨日の夜は何で俺じゃなくてなのはを呼んだんだ？」

ついでと視線を逸らされる。

「オイコラ」

「……だってあなたより遥かに素直っぽかったから……」

「確かにひねた子供よね」

「純真とは言い難いです」

キャスターが言葉のナイフで心を抉り、更にセイバーが切り捨てる。泣いていいかな俺……。

なんかもうどうでよくなってきたが、一応質問を続ける。

「なのはが持ってたあの杖と着てた服はなんだ？」

「杖は魔導師が魔法を使う際の補助となる道具で、総称をデバイスなのはにあげたものの名前はレイジングハートです」

「補助ということは、それが無くとも魔法は行使できるのか？」

「出来ますよ。リンカーコアさえあれば」

ユーノの丁寧な説明によると、『リンカーコア』というのは大気中に存在する魔力を体内に取り込み蓄積する事と、体内の魔力を外部に放出するのに必要な器官のことで、先天的なもので後天的に生ずることは稀らしい。

なのはやはやてにはこれがあり、俺やサーヴァント達にもあるにはある。そんなものあったのかとアーチャーに訊けば、俺に喚ばれ受肉した時点で既に人体にほぼ影響しない何らかの器官があったのは確からしい。ただそれがあると体外から魔力を吸収するには役立つから特に気にはしていなかったとかで、ユーノの説明を受けた事で長らくの疑問は解けたようだ。

所謂……ご都合的な物なんじゃないだろうか。神様もいるようないらんような特典を付けてくれたもんである。

話が反れたがつまり、

「俺もはやてもアーチャー達も、なのはの様に魔法が使えるってことだな」

「魔法ねえ……」

デバイスという補助があった方が良さしいので、いきなりやってみなさいとかは無理でござんすが、練習すりゃ出来るようになるらしい。

「それで、服の方はデバイスが使用者を様々なものから守るために展開するバリアジャケットというもので、レイジングハートのバリアジャケットはなのはのデザインなんですよ」

「なるほどねえ……ってあーあー」

ふむふむと頷きながら話を聞いてみると、ふと見ればどうでもよく
なったらしいギルガメッシュとアサシンは茶の間でスパロボに興じ
ていた。話は最後まで聞けい己等。

しかし、あのレイジングハートの機械的なフォームといい、バリア
ジャケットだのリンカーコアだの。

「魔法というより……科が「魔法です！」……そうか」

なんとなく思ったことを口にしたらすごく否定されました。

「何はともあれ我々のやることは決まったな」

「そうですね……そのジュエルシードの回収及び封印」

「封印処理はキャスターにも出来そうかな？」

「私を誰だと思っているのかしら？ ああ程度でいいのなら昨日の
あれも問題なかったくらいよ」

「OK。それじゃあ封印はキャスターと……」

なのはに目をやる。

「今ならまだ、引き返せるよ？」

恐らくこれが最後のチャンスだ 昨日の事は忘れて、また明日
から何事もなかったかのように過ごす 普通の人生を送る事が
出来る最後の……。

しかしなのはは俺の言葉に頭を振った。縦ではなく横に。

「私、頑張るよ」

強い意志を秘めたその瞳にブレは無く、きつと彼女が手に入れた魔法を手放すことも無いのだろう。

最高の友達に囲まれて、一生懸命に頑張つて、笑つて、泣いて、恋をして、隣に立つ何処かの誰かと結ばれて……そんな普通の人生が、今この瞬間のこの選択によって消えた気がした……。

「頑張つて、ジュエルシードを集める……ユーノくんを手伝いたいし、アリサちゃんやすずかちゃん……家族や大切な人たちを守りたいから、だから！」

「……わかった」

そもそも俺が心配することじゃないな、なのはの人生はなのはが決定的なことだ。

それにいざつて時は、

「俺がなんとかすりゃいいか……」

「ふえ？」

「ああ何でもないよ……よしつ、八神家一同暇な時はジュエルシード探し！ 素の状態で見つけたら即時回収、暴走したら無力化してその後はこのなのはかキャスターに封印してもらおうこと！ ジュエルシードは1から21までのローマ数字が書かれた青い宝石つづつことですよしく！」

各人が一様に頷き、ようやく俺達のやるべきことは定まった。それ

それぞれ席を立ち、キャスターとバーサーカーは茶の間に、セイバーとランサーはこれからの戦いに備えてかふんすつと息巻いて庭へ。ライダーは洗濯物を取りに洗面所へ、アーチャーは夕飯のお買い物へと玄関に向かった。

うむ、中々に所帯染みた英霊達である。

「え、えつと……僕も質問していいかな？」

「どうしたナマモノ」

「その呼び名やめてください！」

「今のは質問じゃなくてお願いだと思っただが如何に」

「わざとだよね、もうわざとやってるよね！　せめて一回くらいは話聞いてくれてもいいんじゃないキュツ」

「おお、お前そのキュツてのが語尾みたいになってるぞ？」

「ああ兄ちゃん！　ユーノくんの顔色が放送コードに引っ掛かりそうなくらいあかん感じになっとるよ！？」

「手離してゆういちくん！」

「ハッハッハ」

俺の魔術やサーヴァント達の特異性など色々と訊かれたり、はやての足や俺達の両親についてなのはが気にしたりと多々あったものの、最終的には面倒な話は置いておき茶の間にてぐだつとしていた。はやてにとって初めての友達であるなのはとのお話はとても楽しい

ものようで、既に女の子だけの……所謂がーるずとーくとやらが展開されていた。

「えっと、兄ちゃんは他行ってて」

やっぱはやても年頃の女の子なんだよなあ……なのはアリサすずかのお三方のお話に付いていけずハブられるのは慣れっこですがねえ。まあ、共通の話題が俺のことなのもあるんだろうけどさ。確かに本人がいるところで言えないようなサムシングもあるのはわかるけどさ。まるで邪魔者のように扱わなくてもいいじゃないか……お兄ちゃんはなんだか切ないよ。夕陽が目に沁みるねえ……。

「仕方ねえ……散歩でもしてくつかな」

どうせ暇なもの。

そうと決まれば行動は速く、俺はすたすたと歩いて外に出た。

外を出て暫く、夕陽が更に傾きかけた頃。俺は途中久しぶりに会った懐かしの猫1号2号を肩に乗せて、これまたいつぞやの広場を歩いていた。

春ということもあってか、しかと立つ木々の青々とした葉が風に靡いて揺れている。それを見ながらいつかのベンチに座り込みふつと一息。膝に乗ってゴロゴロと喉を鳴らす猫二匹を見て思う。

実は俺、こいつらを探しにここに来たんだぜ？

見つけられない事を前提に暇潰しに来たのに目的を呆気なく達成してしまい、ちよいとばかり世の不条理を嘆きたくなった。

「何して暇潰ししようかな……」

なあんて呟きつつ膝の上で気持ち良さそうに丸くなる1号の頭を撫で、2号の顎を擦る。

しばし出来るだけの手を尽くし猫二匹を愛でまくっていると、段々と他にも動物が寄ってきた。

最終的に実に様々な犬猫に囲まれてベンチの周りがちよいとしたわんにゃん王国と化していたのである。

「フシャー！」

その状況が気に食わないのか、自分の縄張りだと主張したいのか、1号が尻尾を立てて周囲に威嚇し始めた。

「仲良くしろよ1号」

「フー！」

やれやれ、当然の如く聞くわけもないので仕方ない。
力を入れずにぺしんと叩く。

「やめんかい」

「痛っ」

「……は？」

「……あっ」

沈黙。それは時に安らぎを、時に気まずさをもたらす。

所謂今のこれは後者だろうか。
声を上げた1号と視線を交わしながら、俺はふとそんな事を思った
のだった……………現実逃避である。

「お前今……………」

俺が漸く声を絞り出すと1号はビクリと体を震わせ、次の瞬間には
脱兎の如く俺の膝を蹴って逃げ出していた。

「ちいつ!」

目標を変更。出遅れたのかわたわたとしていた2号の首根っこをひ
つ掴み捕らえる。

「にゃ!?!」

「逃がさん」

おそらく今の俺の表情は鬼気迫るものであるだろう。
2号はにいに鳴きながらジタバタと俺の拘束から逃れようと暴れ
ている。今日までそれなりに躑躅してきたのにまるで野良の如く利かん
坊……………いや野良だったなこの猫。

「落ち着け2号……………実は私も喋れますとか言ってきたも俺は絶対に
驚かないし、見世物小屋に売り飛ばしたりもしない。だから喋って
みなさい」

「に、にゃ……………」

「喋らなければマタタビの刑に処すぞ? そしてあらゆる手を尽く

して喋るまで卑猥に撫でくりまわしてくれるぞ。俺にそういった趣味はないが致し方あるまいな」

「にい……まつ、待った」

俺が脅しのつもりで（そもそも脅しになるのか甚だ疑問ではあったが）ペットシヨップに向かうべく立ち上がったところで、その音は発せられた。

そしてその声は弱々しくもどこかで聞いたような声だったのだ。

「はて……？」

「くっ……前々から思ってたけど、名前にセンスないよね君」

「なん……だと……？」

まさか猫にそげな事を言われるとは……。

「猫に言われると非常に悲しいんだけど……っていつか、この2号という名前は俺の尊敬する人の名前から取ってきてるんだが」

「ふんっ……」

どこか拗ねたようにそっぽ向く2号。

「……つれないなあ、半ペット状態なのに」

「誰がペットだ!」

「初めて出会ってから今日まで、ちよくちよく様子見に来たらすっ

と寄ってきては俺の膝に乗って日向ぼっこしながらゴロゴロ喉鳴らして甘えてきたのはどこのどなたさんでしたっけ？」

「しっ、知らないよそんなの！」

「ふっ、強情な奴め……ほれほれ、ここが良いんだろっ？」

くりくりと撫でると身を擦りながら気持ち良さそうに声を上げる。

「んにゃん！ や、やめへえ……」

「これでもまだペットじゃないと言えるか？」

「くっ……はにゃあ」

はて、どこかで聞いたことのある声だが……どこだ？

くたっとして俺に身を委ねているこの猫の声は、確かに何処かで聞き覚えのある声なのだ……。

「で、2号も喋れたわけだし、当然1号が喋ったのは俺の聞き間違いではないってなわけだ」

「……なんか慣れてない？」

「まあ、これでかなり不可思議なことには立ち会ってますんでね」
代表例が俺だしな。

振り返ってみたら、俺の周りって見事に特殊カテゴリーな人だらけだ。この分だとアリサやすすかなんかも特殊な身の上だったりなんかして……まさか、な。

「んなことより、お前は何だ？」

「……さあ、何だと思う？」

どこかおちよくなるような言い方をする2号。どうせわかるまいなんて思っているんだろうさ……考えてみようか。

喋る猫……なんてのは正しく怪異以外のなものでもないのだが、俺みたいな他所者や英霊を頭数から除いても、世界を崩壊させるやも知れない宝石とかユーノが言う異世界とか、はやての身体を蝕む病とその元凶たるあの本。

この世界は随分と不思議が溢れている。そして喋るフェレットがいるのだから喋る猫がいても何も不思議じゃない。むしろ普通か。

ファンタジックに考えたら、言語を解する動物っていえば魔術師の使い魔とか人間が変身した姿とか……でなけりゃ妖怪だよな。

「誰かの使い魔か」

とりあえず思い付いたことから言ってみると、

「……………」

「凶星かよ」

「ち、違う」

わかりやすい奴だなこいつ。

なるほどなあ、流石に驚いたぜ。ってことは1号も当然使い魔なわけだな。

「もしかして俺が知ってる奴の使い魔だったりして……」

「うっ……」

「まあ流石にそれはないよなあ……」

そんな知り合いいないしな……多分。

「お前使い魔なのにここによくいるよな？」

「それが何？」

「ご主人様の所にいなくてもいいのか？」

「……答える義理はない」

「ってことは、ここにいること自体が何かの仕事なのか」

聞けば、2号は何故か驚いたように目を見開いて、そして推し測るように俺を睨み付けた。

「そんな目で見るなよ……照れちゃうじゃないか」

「……ふざけてるように見えて、その実何を考えてるかわかったもんじゃないね君は」

「いやあの……何を言ってるのやら」

何か盛大に勘違いしてないか？

「つていつか、そろそろ離してくれない？」

「ああすまん」

首根っこ捕まれぷらーんとしているのは確かに可哀想ですな。

放してやると2号は俺の太ももの上にシユタリと着地し、そのまま丸くなって落ち着いた。

「おや、逃げないのか？」

「逃げてどうなるって言うのさ。どうせ君にはバレたんだし……」

「怠惰なもんだな使い魔さんよ。お仕事はいいのか？」

「あつてないような仕事だから別にいい」

使い魔にあるまじき言動だなおい。

「まあどうでも良いや……とりあえず膝の上に陣取るなら俺の話し相手になってくれ」

「……寂しい奴なんだ君」

「ほつとけ！」

なんとなくニヤニヤしながら言われた気がしないでもない。

俺の普段の生活における苦勞や猫2号による使い魔としての暮らしなど、世間話から完全な愚痴までそれこそ友達のように語らう。

そんなこんなでわかったことだが、1号の本来の名はリーゼアリアで2号はリーゼロッテなんだとか。

やはりどっかで聞いた気がしないでもないがまあいいさ。

しかしたとえちゃんとした名前を聞こうとも俺は1号2号と呼び続けたいたので、今後一切本名を呼ばないことをここに宣言するのでござる。

そして、気付けばいつの間にもやら太陽は沈み、辺りは暗くなっていた。野良犬猫ズはいまだに俺を囲んでのんびりしていたが、流石にもう夜になる。

「今日のところはこれでお開きだなあ」

「そうだね……」

「俺も家に帰るよ。中々面白い話が聞けて良かった……また今度、話し相手になってくれると嬉しいな」

「……気が向いたらね」

まるで猫みたいなことを言うねって、猫か。

「今度は一緒に話そうぜって1号にも伝えといてくれな」

「はいはい」

言つと2号はひよいすたと膝の上から飛び降り一度だけこちらを見上げると、じゃあねと言わんばかりに尻尾を降って去っていった。俺もベンチから立ち上がり、凝り固まった筋肉をほぐすために一度大きく伸びをして、野良犬猫ズに手を降りながら広場を出たのだ。

2号と別れて暫く、俺は家に向かってえっちらおっちら歩いていた。そういえば客人置いてきぼりで外に出てきたが……まあ暇してはいないだろうからいいかな。

はやくも実に楽しんでることだし、俺的には万々歳だ。

と、そんなことを考えていたのだが……それは唐突にやって来た。

「……………うむう」

昨日感じたのと同じような気配が、そこにあつた。

俺の目の前には山があり、その上には確か神社がある。気配はそこから感じる。

「行くか」

この感じはおそらく昨日のような怪物 ジュエルシード。

神社へと続く階段を駆け上がりながら、全身に魔力を通す。

「強化、完了」

三段飛ばしで鳥居まで到着した俺は、気配をより鮮明に探ろうとし

「キヤーツ!!」

「必要なかつたみたいだな!」

草陰から聞こえた女性の悲鳴を頼りに走る。草を掻き分けて駆け付けければ、そこには倒れている女性と、その女性に飛び掛からんと体勢を低くしている巨大な犬がいた。

「待てい犬！」

勢いそのままに両手を広げ巨大犬の前に躍り出る。突然現れた俺に驚いたのか犬は一度後ろに下がり、女性に向けていた視線を俺に向けて喉を唸らせ威嚇し出した。敵意ビンビンだなこやつ。

「グルルルル……ガアッ！」

「うおっちゃあ!？」

大口を開けて飛び掛かってきた犬の真下に体を滑り込ませて、思い切り蹴り上げる。

元々の身体能力に加え更に強化を施した脚力によって、犬の巨体はいとも容易く空中へと浮かび上がった。すぐさま体勢を立て直し、女性を抱き抱えて草場から逃げる。

「よかった、気絶してるだけで怪我もない」

女性を神社の賽銭箱裏に隠して出てくれば、犬は先程以上に牙を剥いて攻撃体勢に入っていた。

このでっかい犬、多分ジユエルシード関係の何かだとは思うのだが……昨日とは違って明確な形になってる。昨日は黒い霧のようなものだったのに……。

「グオオア！」

「危ねっ」

またでかい牙剥いて飛び掛かってきたが、とりあえず地を蹴って右

に避ける。

言うだけなら簡単だが、このでっかい犬、地味にウチのバーサーカーよりもでかいのだ。

んなもんがかなりのスピードで突撃してくるんだから、避けんのも一苦労である。今のもちよっとびっくりしたしな。

「でまあ……どうやって倒すかだよな」

俺は封印魔法なんてのは知らないし、どうやったって……。

もしかして、こいつはジュエルシードが願いを変に叶えようとしたから生まれちゃった奴なのか？

だとすりゃあ、ちよいと厄介だな……多分アイツは願いの主たる犬だ。俺がこいつを倒したら、犬はどうなるんだ？

「って考える時間位くれよ！」

思考に耽っていると犬は更にスピード上げて突っ込んできた。もう一度地を蹴って避けるが、厄介なことにこの犬、俺の速さに対応せんと速度を上げてきている。

あと何回もしない内に追い付いてくる……どうする。一度も攻撃を喰らってはいないが、あの大きく鋭い牙は人間の肉なんて簡単に裂き、骨なんて粉々に砕いてしまうだろう。

俺の体も普通と比べればかなり強靱にはなっているが、あれに咬まれるとかいう危険を犯してまで耐久力なんざ調べたくない。

「厳しいなあ……って待てよ？」

要はジュエルシードと犬が繋がってるからああなってるわけだから……関係を切り離してしまえばこのデカ犬は消滅して、核になってるジュエルシードと犬だけが残るんじゃないのか？

しかしどうやってやるかね。

破戒すべき全ての符がルルブレイカー一番適切ではあるんだろつけど、確実に核に刺すにはかなり近付かなくちゃならない。

噛み付き攻撃をバックステップで回避しながら、手のひらに魔力を込める。更に飛び掛かってきた犬を避け、すれ違い様に横っ腹を叩く。

「投影、トレス・オン開始」

稲妻のように歪んだ刀身の短剣が右手に出現する。

「お仕置きしちやるぞこのわんころめ」

剣を逆手に腰を落とす。

がしかし、ジュエルシールドは……どこだ？

こういう時のセオリーつつと心臓があるとこに核があるんじゃないかねえかなと思うが……。

繰り返される噛み付きやら引っ掻きやらの、字面だけなら笑い飛ばせるがその巨体から繰り出される攻撃は当たれば軽傷じゃ済まないだろう。

何度となく避けてはいるが、避けているだけで実際こちらは攻めあぐねている。

どうにも四足獣相手の立ち回りつてのは難しい。

牙をかわし、爪をいなし、段々それも焦れてきたころ……階段を駆け上がってくる足音三つ。

「ユウイチ！」

「祐一！」

「ゆづいちくん！」

「こ、これは!？」

声の方を振り向けば、鎧姿のセイバーに紫紺のローブを纏ったキャスター、なのはとその肩に乗ったナマモノがいた。

「ナマモノ！」

「だからナマモノじゃないです！」

「そんなことより、昨日の奴と違ってこいつの形がしっかりしてんのは犬を取り込んだからか!？」

「多分そうです！」

「刺したら中の犬まで死ぬか!？」

「……恐らくは！」

「答えが曖昧過ぎんぞおい！」

ギチイと嫌な音を上げ、牙と刃が噛み合う。拮抗する力と力。

いや、手加減がない分あちらの方が有利か。その証拠に、徐々にこちらが押し負けている。

下手に力が入れられないというのは中々厳しいものがあるな！

「うわっ!？」

踏ん張つてた足が浮き、弾き飛ばされた。

いきなり増えた人間を警戒してか、それ以上の追撃はないようだが。

「いっちいち……」

身を起こした俺のところになのは達が駆け付けてきてくれた。

「だ、大丈夫ゆういちくん!？」

「問題ないよっていうか……変身しないのか？」

「へっ……あ、そうだった!」

大丈夫かしらんこの娘にやらせて……。

「セイバー、あれを殺さないように抑えてて!」

「わかりました!」

俺の声に応えるようにセイバーが跳び、恐らくは鞘 インビジブル・エア 風王結界に
納めているであろう約束された勝利の剣エクスカリバーを手に、逃がさず倒さず犬
を牽制する。

それを視界の端に捉えながら、俺は俺で話をしなくちゃならない相
手に顔を向ける。

「んでキャスター、お願いがあるんだけど」

「何かしら?」

「あそこの寶銭箱のところに女の人が気絶してるから」

「ふふつ、それ以上は言わなくても良いわよ。少しだけ記憶を消せばいいんでしょう?」

流石キャスターわかってらっしゃる。言ってる事は実際怖かったりするのだが、これもあの人の為だ……と思う。

やっぱり、本人の了承があった方が良いのかな?

「心配いらないわよ、目覚めたらあの人は何も憶えてないから」

「うむう……つてまづい!?!」

「うーん……あれ?」

なんとこちらが決めかねている間に起きてしまったようで、その視線はしっかりと競り合うセイバーと巨大犬に向いていた。

「きつ、きゃああああ!?!」

夜の神社に悲鳴が響く。

その声を聞いたせいにか、巨大犬は一度身震いすると発光し始め更に一回り大きくなった。

「そんなのありが!?!」

「くっ!?!」

巨体を活かした力業でセイバーが弾かれる。

「グルオオア!?!」

追撃せんと牙を剥く巨大犬に対し、セイバーも体勢を立て直そうと身を翻して跳んだ。

「駄目だセイバー、そっちには！」

「はっ、しまった！！」

「ひいっ！！」

セイバーが跳んだ先は寶錢箱のある方、踞って逃げようとする女性がいる場所！

迫る巨大犬。背中にお荷物を抱え、避ければ大変な事になるのは必至。手加減しなくてはならないセイバーにとって状況は最悪過ぎる。咄嗟に駆け出す俺の横を、薄紫の光弾が通り抜けて巨大犬にぶち当たり、更に！

「だありやああ！！」

横っ面に俺の飛び蹴りが決まり、巨大犬はきりもみ回転しながら吹っ飛んだ。

「ナイスフォローキャスター！」

「貴方の為ならばいくらでも」

ふふんと鼻を鳴らしつつ、キャスターが追い付く。

「……これは夢、そう夢だ。あんな大きい犬なんていないし、金髪の剣士なんて時代錯誤もいいところよ。それに子供が……」

「そう、これは夢。あなたは悪い夢を見ているだけよ……忘れなさい、何もなかった事にして……」

キャスターが手を翳すと、女性の目が虚ろになり、次第に瞼が下がってくる。やがて力尽きたように倒れ、規則正しく寝息を漏らし始めた。

「こっちはこれでいいわね」

「あとは……」

「わんちゃんは任せて!」

待つてましたと言わんばかりになのはが高らかに声を上げ、胸元のペンダントを握る。

だがしかしなのはよ、わんちゃんはどうだろうかこのデカ犬に。

「行くよ、レイジングハート!」

『stand by ready・set up』

なるほど、言わばなのはが握ったペンダントはあの杖の待機状態ってなわけなんだな。

『barrier jacket』

ペンダントの赤い宝石から光が放たれ、なのはの体を包み込む。光の粒子となって服が消え、

「そこから何も見えなくなった……何すんのさセイバー」

冷たい鉄の感触がするのでこれは紛れもなくセイバーさんの手である。

「女兒の裸体をまじまじと見ていいものではありません」

「まだ小さいとは言えあの娘も女の子だもの、見られたら恥ずかしいものよ？」

二人からたしなめられる俺。いやまあ、俺ははやてのを何度も風呂で見てるから別に何とも思わなかったりするわけなんだけど……それは失礼かしらん？

『Protective condition , All Green.』

レイジングハートとやらの声が再度聞こえた後、俺の視界を覆っていたセイバーの手がようやくと外され、なのはは昨夜見たあの魔法少女姿に変わっていた。

「グルオオオオオ！」

「今助けてあげる……お願いレイジングハート！」

『all right . sealing mode . set up.』

杖の先に付いている赤い宝石が明滅し朗々と声が紡がれる。

『stand by ready.』

なのは敵と判断した犬が走る。なのはも犬にレイジングハートを向けるが、当然純然たる力に敵うわけがない。凶悪な爪が振るわれるかと思っただその瞬間、緑色の魔方陣が中空に出現しその脅威を止める。

「今だ、なのは！」

「リリカルマジカル……ジュエルシード、シリアル16。封印！」

『Sealing・receipt number XVII.』

レイジングハートから伸びた桃色の光がデカ犬に当たり、苦しそうに一哭きするとその体は粒子化し、光が収まるとそこには……。

「ワン！」

子犬がちよこんと座っていた。

「わっ、かわいいねゆういち君！」

「まあ……ね」

随分あっさり終わったもんだなあ……やっぱり俺も欲しいぞデバイス。

「……とりあえず、一件落着か」

「釈然としないものを感じますけどね……」

心に微妙なものを抱きつつ……とりあえずなのはを送り届けて俺達

は帰路に着いたのだった。

「ああ、あの人のことすっかり忘れてた……まあいいや」

かくして、この第二の事件を幕開けとして、俺たち八神祐一と愉快な仲間達のジュエルシード探しは始まったのであった。

いのちをだいじに！魔法少女リリカルなのは「第2話：過去の遺物」（後書き）

「私と勝負……？」

「お弁当、作ってきたんだ……」

「……街が大変だ！」

次回、いのちをだいじに！魔法少女リリカルなのは「第3話：少女の後悔」

「私のせいだ……」

いのちをだいに！魔法少女リリカルなのは「第3話：少女の後悔」（前書き）

遅ればせながら、どうも雷泥です。

散々お待たせした挙げ句一話しか作れず本当に申し訳なく思っています。

言い訳らしい言い訳もありませんで、ひっそり更新です。

誤字とかあつたらすいません。

いのちをだいじに！魔法少女リリカルなのは「第3話：少女の後悔」

あの夜、でか犬事件から一週間が経ち、俺達は一日一個の割合でジュエルシードを回収してきた。これで俺たち側が持っているのは七つである。

随分と簡単に見つかるものだから、わりと早く事件を解決できるかもしれない。

変わらぬ日常。お天道さんは本日も輝いていて、誰もこの世界が今危機に曝されているとか思っていない。知らないのだから当然とも言える。

かといって、知っているからどうのってわけでもなくて。なんせ実際に焦っているのはあのナマモノのみで、俺達サイドは特に地球の危機だの構えず、地道に拾っちゃ封印拾っちゃ封印している。

多分、ナマモノと俺たちとはジュエルシードに対する認識が違うのだと思われる。

知識を正しく知っているナマモノと、見て聞いた程度の俺たちと。

『暴走したらまずい』と言うナマモノに対し、俺たちの見解は『つまり暴走させなきゃ大丈夫』だということが、違いってやつなのだ。と、右の袖を引かれる感覚。

「うん？」

目をやればまずい。

その手には、風呂敷に包まれた箱。

「お弁当、作ってきたんだ……」

「作ったって……すずかが？」

「うん。一緒に食べない？」

そういや今は学校で、ついでに言えば昼休みだった。

「あいあい、そうしますかね」

愛用のリュックから弁当を取り出し、いつものようにアリサとのはも引き連れて、やってきました屋上です。

四人が四人定位置に座りつつ、すずかがいそいそと風呂敷包みを広げると、二段重ねの弁当箱が姿を現した。

四角形の蓋を取れば、丁寧に詰められたおかずが見え、更に上段をどければこれまたキッチリとした三角おにぎり。

「すごいな。これを一人で？」

「うっ……おいしそうじゃない」

「ど、どござ、食べてみてください」

言われるままに、おにぎりを一つ手に取るとすずかの表情が強張る。

「では、いただきます」

手のひら大に握られたソレを一口食せば、程よい塩気と梅干しの酸味が口の中を満たす。

「ん、うまい」

「ほ、本当？」

「ホントホント。どらどら、次はこいつをいただこうか」

自身の箸を取りだし、玉子焼きやら焼き鮭やらをひよいばくと口に放り込む。

「うまいな、うん」

「えへへ……」

「ほれすずか、あーん」

「あ、あーん」

すずかの小さな口におかずをやる。もぐもぐと、そんな擬音が実に似合いそう。

どことなくほんわかしていたそんな昼休み的一幕。

……アリサとなのはは何故か悔しげに唸った後で、今度自分たちも作ってくるからちゃんと食べてねとか言っていた。

帰り際、なのはがその話題を切り出した。

次の日曜日になのはの父、土郎さんがオーナー兼コーチを務める翠屋JFCと、隣町のサッカークラブとで練習試合を行うというもので、観に行こうなの……だそう。

日曜日だからゆっくりしようかなと思ってたんだが、アリサすずか

とオツケーし、なら俺も当然来るよね？と強引に押しきられ、仕方なく合意を示した。
最近俺の立場が弱くなっているような気がしてならないが、もしかこれは誰かの策略か？

当日は珍しいことに八神家全員が暇だったので、久方ぶりに皆でお出かけという形となった。

はやてはそれを心から喜び、はしゃいでる。勿論俺も少なからず嬉しい。そしてそれはサーヴァント達も、であろう。

目的地の河川敷まで来たところで、見覚えのある栗色おさげが手を振っているのを確認し、後ろには高町御一家もいた。そして当然、

「オッス、オラ祐一」

「ハイハイ、いつから亀仙流になったわけ？」

「あはは、こんにちは祐一くん」

アリサにすずかもいる。

いつも通り何やら自信に満ち溢れた表情なアリサの隣にはひたすら穏やかにニコニコと微笑むすずか。とりあえず和んだので撫でる。

「え、え？ なな、なに？」

「理由はない」

戸惑う姿がまた可愛いもんで、俺としちゃさらに撫でたくなるってなもんだ。

「こんにちは祐一君」

「あ、こんにちは桃子さん」

「今日のご家族と一緒に来てくれたのね？」

「はい」

翠屋には家の女性陣を連れて何度か訪れている。その時に皆家族であることを伝えているため、桃子さんは特に驚くこともなく我が家のサーヴァント達に挨拶していた。
大所帯なもんだから恭也さんと美由希さんは驚いてたり。

「私と勝負……？」

「相当な使い手とお見受けしました。是非一度」

「おい兄ちゃんよお、だったら俺とやってみねえか？」

恭也さんがアーチャーに手合わせを願ったり、何故かそれにノるのはランサーだったり。

「ほう、道場ですか。それは是非見たいですね」

「あつ、だったら今度家に来ませんか？」

道場があると聞けば見てみたいと言い出すセイバーや、ではではないという美由希さん。

もうのっけからどうよこれ？っていう会話の数々。
で、少女達の初めましてもあるわけで。

「初めまして！ 私は八神はやてや！ 似てへんけど祐一兄ちゃんの妹やってますー！」

「アリサ・バニングス。祐一とは同じクラスでライバルよ」

「初めましてはやてちゃん。私は月村すずか」

『よろしくね』

握手を交わしながら笑い合う少女達。

「アリサちゃんにすずかちゃんかあ……なあ兄ちゃん？」

「ん？ どうしたんだはやて？」

「なのはちゃんに続いて、兄ちゃんの友達が女の子ばかりなんはなんで？」

「えっ、そりゃあ……」

逆に俺が知りたい位なんだけど、そうやってほっぺを引っ張られますとお兄ちゃんとしては痛くて喋れないなーとか思うぞ。

それなりに大きな歓声に包まれながら、河川敷グラウンドでは少年たちによる玉の蹴り合いが始まった。

実のところ、今日ははやてにもっと友達を作る機会をあげたかったからこの場所に来たようなもので、楽しそうになのは達と話しているはやてを見る限り、目的は既に達したと言っている。

「まあ早い話が、暇だったりするわけで……」

「大人しく観ていれば良いだろう?」

「まともに観てる奴なんかほとんどいねーって」

言い方は悪いが、どこまで行っても小学生同士のサッカーに変わりはないんだから、残念ながら暇にもなる。

「せめて必殺技の一個や二個出ればなあ……」

「どんなサッカーなんだそれは」

「あー……超次元?」

「何を言っているのだ君は」

そう言っ指で眉間を揉むアーチャーである。なんだ、それは暗に俺と話していると疲れるというサインか。皆さん俺の扱い悪くありませんか? ねえ。

それなりに盛り上がりながら、2 1、翠屋JFCの勝利で試合終了。

昼過ぎということもあって、桃子さんの提案の下、翠屋で食事をすることになった。じゃあ行きましようかと歩き出そうとしたその時、俺はそれに気付いた。

「祐一」

「ああ……出たな」

なのはを見ると、彼女はどうやら気付いていないようだった。アリサやすずかと一緒に、はやての車椅子を押し歩いている。

「……よし、俺とキャスター、それからライダーで行こう」

「わかりました」

「あら、祐一は一緒じゃなくてももいいのよ？ 私一人でも大丈夫なんですから」

「いいんだ。ついてったらなんかそれはそれで面倒なことに巻き込まれそうだし……」

「ふふっ、そうかしら」

面白そうに笑うキャスターの背中を押しながら、行くべき場所へと足を向ける。

「桃子さん達は適当に誤魔化しといてくれ。はやてや後の事は任せよアーチャー」

「了解した。気を付けろ、祐一」

わかってるだけ返して、俺達は一団と別れた。

「ふいー……」ちそうさまでした！」

最後の一口を味わって、フォークを置く。ちよっぴりぽこっとしてもった自分のお腹を見てたら、なのはちゃんが空いたお皿を片付けてった。

うーん……やつぱ可愛いなあ。

なのはちゃん家は翠屋っちゅうお店をやっている、今日はそこで「馳走になったんやけど……」。

「兄ちゃんも来たら良かったのになあ」

今この場所に、兄ちゃんはおらん。

「仕方ねんじゃねえか？ 例のほら、アレが出たみたいだからな」

「えっと……ジュエルシードやったか」

今でもちよつと信じられへん。異世界から来た喋るフェレットさんとか、この世界の滅亡の危機とか……ファンタジーかつ！と思うけど、私ん家も中々ファンタジーの世界やしなあ……。

「ま、心配いらねえさ」

「せやね、ライダーにキャスターも一緒やし」

まあ、私としては世界の危機とかりありていーに欠けることよりも、私の日常の危機がなあ。

「なんでやるなあ……」

忙しくちよこちよこ動き回るおさげの子を見る。

高町なのはちゃん。

兄ちゃんが初めて家に連れてきた友達で、私にとって初めての友達でもある。

まだ出会って間もないけど、素直でやさしい、しょーねのいい子やっつてわかった。
せやけど……。

「どうしたはやて」

「何でもない」

兄ちゃんの周りはおかしい。

まあ薄々感じておったけども、今日のこれではっきりした。

なんでこない美女美少女が多いねん。

ただでさえ我が家にはセイバーとかキャスターとかライダーとか綺麗所ばっかやのに……。

なのはちゃんもアリサちゃんもすずかちゃんも美少女！

しかもタイプ別！！

天然ぼやぼやなのはちゃん。

正統派ツンデレなアリサちゃんに上品なお嬢様タイプのすずかちゃん。

あれ、私ピンチ？

「あかん……あかんでえ」

「先程からどうしたのですかハヤテ？」

「セイバーもケーキもきゅもきゅしとる場合やない！」

「な、何故です？」

くっ、キョトンとしよってからに……可愛いやないけえ！

皆に比べたら私の属性なんて関西弁美少女（妹）だけやん。妹の段階で色々アウト！

あっ………どないしよ、ちよっとへこんできた。

「大丈夫ですかハヤテ」

「大丈夫、大丈夫や。うん」

とかセイバーに言いながら、だんだん思考がネガティブになっていく。

考えてみれば、駄目な妹やんなあ………私。

「………街が大変だ！」

そんなことを考えていたら耳鳴りがして、それと同時になのはちやんが翠屋を飛び出してった。

八つめのジュエルシードを回収し終えた俺達だったが、今日の仕事はそれだけで終わりそうもなかった。

「もう一仕事ですね。行きましょう」

「なら転移ね」

「えっ!？」

キヤスターが何事かを呟くと、瞬く間に視界は塗り替えられ気付けば俺達はどこかのビルの屋上にいた。

「あつ、ちよつと酔った……」

初めての転移は意外と気持ち悪かったです。

「見なさい祐」

キヤスターが指差す方を見れば、今いるビルと同じくらいの巨木が枝葉を揺らして暴れまわっていた。

「一般人が多すぎて今さら結界は張れないわよ」

「うーむ……どうしよう」

巨木による被害は予想以上だった。

足のようになった何十もの根っこが乗用車を巻き込みながら前進し、枝葉はまるで手のように建物を殴り付け、人を薙ぎ払う。

いずれはこういった騒ぎが起こるんじゃないかとは思っていたが……。

「……キヤスター」

「ええ」

キャスターが朗々と唱う。

俺には生憎と理解できない言語だが、それに魔力が込められていたことだけはわかった。

「消えなさい」

空が渦巻き雲を貫いて、極光が巨木に降り注ぐ。紫色の光の柱は巨木の全てを包み込んで、やがて巨木もろとも消え去った。

「……ふう」

「お疲れ、キャスター」

「ありがとうございます様」

「だからそれやめてってば」

「ふふっ、はいはい」

キャスターはクスクスと笑いながら右手を差し出してきた。

手のひらにはほのかに輝く青い宝石……これで九つ目になるジュエルシードを受け取って、腰に提げていたポーチに入れる。

「祐一、あれは……」

「んっ？」

ライダーが指で示した方向、混乱してる街の人達に、少しだけ異変

が起きていた。目を凝らしてよく見ると、巨木が消えた道路のご真ん中に少年が倒れていた。

「……どういふこと？」

「……私に訊かれても困ります」

まさか、あの少年の願いで生まれたってのか？アレは。

「いやいや、人間が生み出したのならもうちょっと俗っぽいはずだよな」

いくらなんでもつかい木が欲しいですなんて願いはないだろう。じゃあなんだ？あの場所に倒れてるってことは、木にくっついていたいことになるんだよな。巻き込まれて怪我をしたっていう選択肢はゼロだ。あの少年には魔力の残り香を感じる、最初の犬のように。

「ゆーいちくん！」

バリアジャケットを装着したのがふよふよ飛びながらこちらに来ていた。

軽やかに俺の目の前で着地すると、彼女はフンスと鼻息一つ。

「すごいゆーいちくん！ 遠くからでも見えたよっ、すごい魔法！」

興奮してるらしく、俺の手を取ると上下に振りだす。とんでもない勢いで。

「なのはにも出来るかな！？ ねえねえ教えて！」

「おうおう……落ち着けなのは。さっきのは俺じゃなくてウチのキヤスター様だ」

肩がもぎ取られんばかりの上下運動。っていうか一体この娘っ子はナニを目指してるんだ？

「あんまり手放しで喜べるような事態でもないしな……」

なのはから逃れつつ、彼女が見ていなかった事実を告げる。

「あそこ見てみ？」

倒れ伏す少年の姿。ジュエルシードの暴走に巻き込まれて傷付いてしまった、犠牲者の姿だ。

「あの子……？」

「残念だけど俺達は、守れなかったんだよ」

流石にこれはなあ……。

「……………」

「……なのは？」

「……知ってた」

何を、と問う前に、なのははいきなり肩を震わせ始めた。その顔は何故か青ざめていた。

「あの子、さつきグラウンドにいたの……帰る時、あの子から、ジュエルシードみたいな反応があったのに……気のせいだって、思っちゃった」

そう言われてみると見覚えあるような……気がする。

「私のせいだ……」

眩き、なのははへたり込んでしまう。先ほどまでのハイテンションが嘘のように。

「気のせいだなんて、誤魔化すんじゃなかった……ごめんね、ごめんね……」

「なのは……」

大人達に抱き抱えられてどこかへ、おそらくは病院に運ばれていくであろう少年。それを見つめるなのはの両目は、次第に潤んできて……。

「……泣くな」

そんな彼女の頭を、コツンと叩く。

「い、痛いよ」

「うむ、それはよかった」

「あつう……」

「魔法なんて使えたって助けられる人は限られてるし、剣を振るってたって守れるものは少ない」

みんなを守るってのは、言葉で言うほど簡単じゃない。

「でもまあ……次からは、誰かに相談するなりしてくれろと嬉しいな」

「うん……ごめんね?」

「……いや、いい」

「じゃあ、ありがとうだね」

なのははそう言って、鮮やかに笑ってみせた。

「ゆーいちくんが泣いちゃうのはいやだから、だからなのはは頑張るね?」

「いや……意味わからんぞ?」

うんうんと何度も頷く。よくわからんが、変な方向に着地してしまっただよっただ。

「まあ……いいか」

関わってしまったんだから、どうせならもつとこの少女に前向きになってもらいたいたいところだ。

昔からそうだが、若干ネガティブの気があるし。

「一つ……約束してくれ。これからはもっと自分と、周りを信じて行動して欲しい」

「……うん、約束！」

なのはもう一度、鮮やかに笑ってみせたのだった。

その日の夜、なのはは魔法の事やそれに関連する事を家族にバラした。俺やサーヴァント数人もその場にいたから、気持ち先走って支離滅裂になったなのはのフォローもバツチリだった。まあ目の前で娘が変身したら信じざるを得まい。

そして俺やなのはが思っていたよりもあっさりと、桃子さん達は受け入れてくれた。

それでいいのか高町家と不安になったが、なのはが決めた事だからと笑って話す桃子さんや土郎さんを見ると俺からは何も言えなかった。

これから付いて回る危険なんかはアーチャーが説明してくれた。子供の俺が言うよりは、やはり説得力が違う。

それから、高町家の方々と色々深いところまで話していたらすっかり夜中になってしまい、なのはが寝た後で彼女がネガティブ気味な理由について少し知ることができた。

なのはが俺と知り合う前、ちょうど父さんと母さんが死んでしまった頃か、土郎さんとはある仕事で命に関わる大怪我を負った。その頃は翠屋を開いたばかりで桃子さんは手一杯、次第に家族の絆はバラバラになっていった。

当時なのははまだ五歳。甘えたい盛りの子供だ。本当ならもっと両親に甘えたかっただろう、本当ならもっとわがママを言いたかっただろう。寂しさを抱えながら、だけどなのは優しい子だから、た

とえバラバラな家族でも大好きだから、誰かに迷惑をかけないように『手のかからない良い子』であることを選んだんじゃないかと、桃子さんはそう締め括った。

だから、なのはが自分からやりたいと言い出したことを、受け入れたいのだとも語った。

高町家を出てからも、考えていることはなのはのことだった。

思うに、なのはが心の中に抱えた闇はもつと深く濃いうような気がする。幼少期に感じた孤独、良い子でなければならぬという強迫観念。そしてきつと……何もできなかつたという無力感。

だから今、目に見える魔法という不思議な力を持っていた事が嬉しい。

そしてちょうどよく誰かが困っているというのなら、今ある力を使って助けたいに決まってる。

なのはのような優しい子ならば尚更そうなんじゃなかるうか。

……俺は、そうなりたかつた。

新しい命に特別な力、安易にヒーローになりたかつたからこそ、望んだのだ。

もしも生まれ変わった世界が元居た世界と変わらなかつたなら、どうするつもりだったのか昔の俺に問いたいところだが、それは無理かな……いかん、真面目な事考え過ぎて知恵熱でそうだ。

ぐらつく頭を小突きながら、俺はスッキリしない気持ちで家路に着いたのだった。

いのちをだいじに！魔法少女リリカルなのは「第3話：少女の後悔」（後書き）

久々に訪れたすずかの家で、またも出現するジュエルシード。

回収に走る祐一達の前に現れた金髪の魔法少女。

悲しげな瞳の奥で何を思い、何故彼女は刃を向けるのか。

次回、いのちをだいじに！魔法少女リリカルなのは「第4話：黒衣の少女」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5546k/>

いのちをだいじに

2011年8月18日07時47分発行